

山野井孝有



悼む

讃える

ありがとう



山野井孝有（やまのい・たかゆき）

1932年2月22日—2026年3月5日 享年94

（2010年9月6日 奥多摩にて）

目次

はじめに			1
第1部	誕生から敗戦後混乱の日々	1932. 2~1952. 9	4
第2部	毎日新聞社時代—激動の日々	1952. 10~1987. 3	6
第3部	新たな挑戦から人生を閉じるまで	1987. 4~2026. 3	12
第4部	著書などに記した自分史と主張		19
第5部	追悼の言葉		50

<表紙>

「ブロード・ピーク」8,047m (現公式標高 8,051 m)

撮影・山野井泰史

中華人民共和国とパキスタンとの国境にある。K2 から約 8 km 離れた位置にあり、ガッシャーブルム連峰に属する。元々は K2 の次の山ということで K3 という名前が付けられていたが、その後の調査で山頂の幅が 1.5 km にも及ぶことから「広い頂」を意味する「ブロード・ピーク」の名前が付けられた。

山野井泰史さんは、1991 年に登頂した。

高くて広い頂上とは、山野井孝有さんの人生を象徴しているようである。

デザイン・杉山百合子

はじめに

山野井孝有さんは2005年8月15日に『振り返れば「波乱」—73年の人生とこれから』を自費出版しました。それから15年後の2020年11月16日、『我慢できない許せない—叫び続けて18年』を出版しました。前著が自分の73年の人生を振り返って自らの軌跡を確かめ、残りの人生への希望を語っていたのに対して、後著は書名の通り「怒りの声 魂の叫び」です。その「はじめに」で次のように書いています。

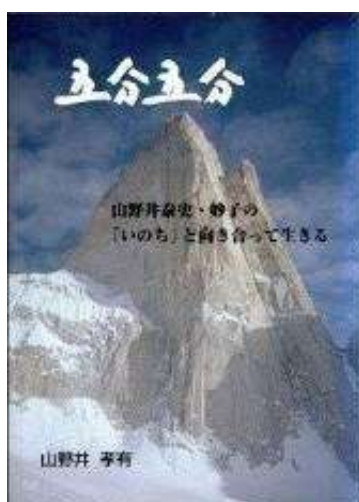
生ある限り、引き続き「戦争に反対」し、「働く者が主人公の社会を！」の思いを貫くために「我慢できない 許せない」と叫び続けたいと考えています。

同書の末尾に掲載された自分史年表「私の人生と時代背景」を、第1部から第3部に編集して全文を紹介します。「時代背景」に記録された出来事は山野井さんの選択です。社会に対する視点と問題意識、怒りが記されています。第4部では、主な著書の「はじめに」と「あとがき」を紹介します。「戦争はいけません」では、寄せられた読後感の一部を追加します。

山野井さんの闘い続けた人生を讃え、学ぶ一助にさせていただきたいと思います。(福島 清)



2005年8月15日 刊

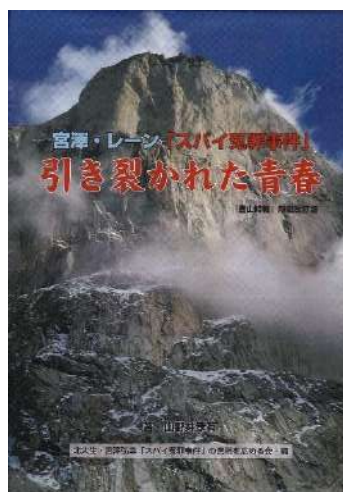


2010年12月1日 刊



2011年6月24日 刊

「山と溪谷社」版

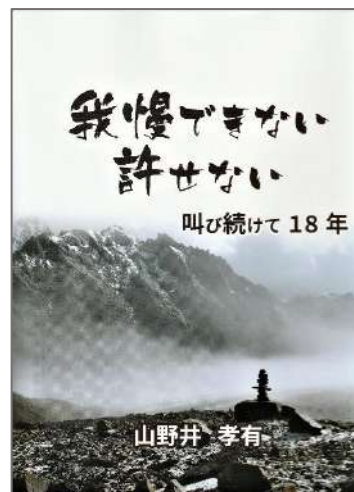


2014年2月22日 刊

「登山時報」連載



2018年12月10日 刊



2020年11月16日 刊

第1部 誕生から敗戦後混乱の日々

1932.2~1952.9

◆1932 (昭和7)年 誕生

2月22日 東京都葛飾区淡之須(あわのす)で、父「福松」、母「しん」の3男として生まれる。

2月=中野重治らプロレタリア作家400人検挙される◇3月「満州国」建国宣言◇5月=5・15事件、犬養毅首相を射殺

◆1933 (昭和8)年 1歳

2月=プロレタリア作家・小林多喜二、築地署で虐殺される◇3月=国際連盟脱退◇8月=関東防空大演習。桐生悠々「関東防空大演習を嗤う」

◆1934 (昭和9)年 2歳

6月=陸軍、カーキ色を国防色に制定◇8月=ヒトラー、ドイツ総統に

◆1935 (昭和10)年 3歳

7月12日 妹・啓子誕生

2月=美濃部達吉博士の「天皇機関説」貴族院で攻撃される

◆1936 (昭和11)年 4歳

2月=「二・二六事件」◇5月=メーデー禁止◇8月=第11回オリンピック(ベルリン)

◆1937 (昭和12)年 5歳

7月7日=盧溝橋事件から日中戦争へ◇蒋介石、対日抗戦総動員令◇12月=第1次人民戦線事件、山川均ら466人検挙◇南京入城と大虐殺

◆1938 (昭和13)年 6歳

4月 尋常小学校入学



(前から3列目、左から2番目)

2月=第2次人民戦線事件、大内兵衛ら検挙◇4月=国家総動員法公布◇7月=政府、東京オリンピック中止を表明

◆1939 (昭和14)年 7歳

◇1月=平沼騏一郎内閣。大相撲横綱・双葉山敗れ69連勝で止まる◇5月=ノモンハン事件、関東軍ソ連に大敗、政友会分裂◇9月=ドイツ、ポーランドへ進撃、第2次世界大戦

◆1940 (昭和15)年 8歳

新聞配達・下駄磨き内職

2月=斎藤隆夫、反軍演説で衆議院から除名される◇9月=日・独・伊三国同盟締結◇10月=大政翼賛会発足◇11月=紀元2600年式典

◆1941 (昭和16)年 9歳

4月=小学校が国民学校に改名◇6月=警視庁、言論統制、用紙制限のため新聞、雑誌の統制に乗り出す◇12月8日=太平洋戦争始まる

◆1942 (昭和17)年 10歳

1月 養護学園(沼津)入園



(2列目中央、女生徒の右。みずぼらしい服装)

4月=東京初の空爆◇6月=ミッドウェー海戦、日本海軍惨敗◇11月=大政翼賛会と新聞社共催で標語募集「欲しがりません勝つまでは」入選

◆1943 (昭和18)年 11歳

2月=ガダルカナル撤退◇英米語禁止で「サンデー毎日」は「週刊毎日」◇4月=山本五十六元帥戦死◇ワルシャワでユダヤ人が反ナチス蜂起

◆1944 (昭和19)年 12歳

3月 国民学校卒業◇妹・啓子学童疎開

4月 国民学校高等科進学

9月 学徒動員で軍需工場へ(ゼロ戦部品作り)

7月＝サイパン島玉砕◇10月＝レイテ沖海戦で
連合艦隊壊滅◇神風特攻隊出撃はじまる

◆1945（昭和20）年 13歳

2月22日 東京に40年ぶりの大雪

4月 グライダー訓練で霧ヶ峰へ（特攻隊予備訓練）

3月10日＝東京大空襲、B29 130機来襲◇8月6日＝
広島に原爆投下◇9日＝長崎に原爆投下◇15日＝
ポツダム宣言受諾。敗戦



（飼犬クロを抱く長兄・源市と特攻隊予備訓練
で霧ヶ峰に出発前の孝有・13歳）

◆1946（昭和21）年 14歳

3月 国民学校高等科卒業

4月 大日本機械工業に塗装工として入社

12月 大日本機械工業労働組合結成に参加

2月＝日本新聞通信（放送）労組結成（新聞単一、
組合数33、組合員2万2335人）◇3月＝新聞単一
毎日支部（3分会）に◇5月1日＝11年ぶりに第
17回メーデー◇19日＝食料メーデー◇8月＝全
日本産業別労働組合会議（産別）結成。議長に朝
日新聞出身の聴濤克己◇11月＝日本国憲法公布
◇日本社会党結成（片山哲）、日本自由党結成（鳩
山一郎）、日本進歩党（町田忠治）結成◇12月＝
共産党、19年ぶりに党大会開催

◆1947（昭和22）年 15歳

1月31日＝マッカーサー、ゼネスト中止命令◇
2月＝教育基本法・学校教育法公布◇3月＝新聞
単一毎日支部、脱退を通告、新組合設立準備会◇
5月3日＝日本国憲法施行◇5月＝毎日新聞社労
働組合結成大会（大阪）、委員長・池田菊次郎◇
片山内閣成立

◆1948（昭和23）年 16歳

9月 都立第七高等学校定時制に2学期から入学

7月＝全日本新聞労働組合（全新聞）結成大会◇

10月＝昭電疑獄で芦田内閣総辞職、吉田茂内閣

成立◇12月＝毎日新聞社長に本田親男就任

◆1949（昭和24）年 17歳

8月 速記講習会受講

1月＝総選挙（自264、民69、社41、共産35、
国協14）◇7月5日＝下山事件◇15日＝三鷹事
件◇8月17日＝松川事件◇10月1日＝中華人民
共和国成立宣言◇11月＝湯川秀樹博士、ノーベ
ル物理学賞受賞◇毎日オリオンズ誕生◇国際自
由労連結成大会（ロンドン）

◆1950（昭和25）年 18歳

6月 米軍戦車の部品作りで旋盤工に



（レッド・パージ後の執行部。前列右から2人目。山野井
ほか2名を除き社会党右派）

1月＝千円札発行◇新聞（朝刊）定価53円◇6月
＝朝鮮戦争◇7月＝新聞・放送レッドパージ。毎
日新聞は49人（東京30人、大阪19人）◇マッ
カーサー、警察予備隊の創設を指令◇9月＝毎日
新聞社、8時間制を組合に提示。毎日新聞労組、
レッドパージ承認◇大日本機械工業にもレッド
パージ◇12月＝池田蔵相「貧乏人はムギを食え」
と放言

◆1951（昭和26）年 19歳

5月＝新聞用紙統制撤廃、新聞（朝刊）定価100
円◇9月＝サンフランシスコで講和・安保両条約
調印◇10月＝毎日新聞労組労働時間8時間制受
諾◇新聞定価（セット）220円◇社会党、講和・
安保をめぐる左右に分裂

◆1952（昭和27）年 20歳

3月 都立墨田川高校（第七高等学校）定時制卒業

5月1日 第23回メーデー（血のメーデー）参加。
翌日、丸の内警察の刑事をしていた兄から「気をつけ
ろ」と言われた

7月 大日本機械工業の企業閉鎖（計画倒産）で解雇
される

9月 毎日新聞社で総選挙要員としてアルバイト

第2部 毎日新聞社時代—激動の日々 1952.10~1987.2



◆1952年10月15日 毎日新聞社入社

1月=白鳥事件◇5月=アカハタ復刊◇9月=毎日、朝日、読売が共同通信配信から脱退◇10月=総選挙(自240、改進黨85、右社57、左社54、共産0)

◆1953(昭和28)年 21歳

1月1日 毎日新聞社から「試用雇員」の辞令。
7月1日 「雇員」として毎日新聞社従業員に。ユニオンショップで毎日新聞社労働組合に加入
9月 青年部委員に。「食塩」を支給せよなどを要求
3月=吉田首相「バカヤロー」で解散◇4月=総選挙(自=吉田派199、改進黨76、左社72、右社66、自=鳩山派35、労農5、共産1)◇7月=朝鮮戦争休戦

◆1954(昭和29)年 22歳

5月 青年部委員、「若人の会」結成し会長に就任。「騒音」発行
3月=米、ビキニ環礁で水爆実験、第五福竜丸被曝◇6月=近江絹糸、人権要求で100日間の大争議◇7月=陸海空の自衛隊発足◇12月=吉田内閣総辞職、鳩山内閣成立

◆1955(昭和30)年 23歳

5月 青年部委員◇砂川基地反対闘争。現地泊り込み参加
9月 新聞労連東京地連青婦協副議長
1月=総選挙(民185、自112、左社89、右社67、労農4、共産2)◇炭労、私鉄、電算など民間6

単産が賃上げ共闘会議。春闘方式始まる◇9月=新聞労連臨時大会、増ページ、不当競争反対決議◇10月=社会党統一◇11月=保守合同、自由民主党に

◆1956(昭和31)年 24歳

5月 青年部委員、新聞労連東京地連青婦協副議長
◇「人食い輪転機」の闘い
2月=ソ連共産党第20回大会、フルシチョフ平和共存を宣言、スターリン批判始まる◇9月=新聞労連臨時大会で増ページ反対ゼネスト否決◇10月=ハンガリー動乱、ソ連軍ワルシャワに侵入◇12月=国連総会日本加盟を承認◇石橋内閣成立

◆1957(昭和32)年 25歳

5月 毎日新聞労組東京支部定期大会で副書記長に
◇毎日新聞労組定期中央大会に初参加(白浜)
2月=マッカーサー米大使着任◇岸内閣成立◇6月=朝日新聞労組、ヘアで12時間スト

◆1958(昭和33)年 26歳

5月 本部青年部長、支部代表委員
10月 毎日新聞労組、闘争委員会設置(委員長=平田満夫、書記長=阿久津宏)、青年行動隊長となって社内デモ◇サンデー毎日印刷反対闘争



(定期大会会場で戸塚章介さん(左)と1958年、奈良県・アヤマが池)

5月=総選挙(自287、社166、共産1)◇10月=警職法反対国民会議結成

◆1959(昭和34)年 27歳

5月 毎日新聞労組東京支部執行委員
1月=キューバ革命、カストロ首相に◇3月=浅沼社会党書記長、北京で「米帝国主義は日中両国

人民の敵」と発言◇安保改定阻止国民会議結成
◇5月＝毎日新聞、朝日新聞北海道進出◇11月
＝朝日新聞労組 96 時間スト◇12月＝三井三池
炭鉱、1278 人を指名解雇

◆1960 (昭和 35) 年 28 歳

2月22日 (孝有誕生日) 母しん 64 歳で死去
11月15日 孝子と結婚 (本給＝15,550 円、年齢手
当＝2,800 円、第二本給＝1,350 円、妻手当＝1,450
円、合計＝21,150 円。所得税＝1,490 円、地方税＝
690 円、社会保険料＝906 円、毎日会費＝90 円、労組
勘定＝2,535 円、差引き支給額＝15,469 円、基準外
手当＝4,684 円、宿直手当＝3,150 円)



10月 毎日新聞労組臨時中央大会。会社の長期安定
計画に対する「賃上げタナ上げ」の執行部提案を否
決。日野執行部は総辞職

11月 臨時中央大会再開、新任の浅海一男委員長は
長期安定計画打破、賃上げ実施要求声明

4月＝毎日新聞夕刊 (東京) 8 面に◇5月＝新安
保強行可決、デモ隊国会を包囲◇6月＝新安保発
効、岸首相辞意表明◇7月＝池田内閣成立、高度
成長政策始まる◇10月＝浅沼社会党委員長刺殺
される◇11月＝総選挙 (自 296、社 145、民社
17、共産 3)

◆1961 (昭和 36) 年 29 歳

5月 毎日新聞労組第 15 回定期中央大会 (委員長＝
浅海一男)、本部執行委員になる。この大会に 1950 年
のレッドパージで解雇された元組合員 49 人のうち 2
人が来賓挨拶、大きな拍手を受ける

7月 東京活版職場で「漢テレ闘争」

8月 毎日新聞労組地域別中央大会。病気で退任の浅
海一男委員長から増田滋委員長に。毎日新聞労組臨
時中央大会。議事規則改正緊急議案提出

9月20日 長女・明子誕生。この年の年末交渉に本
部執行委員として出席し、基準外賃金がゼロであっ
たため「この給料では子供にミルクも買えない」と
発言。以降「ミルク本執」と言われた

1月＝本田親男・毎日新聞社長退任 (在任 12 年)
上田常隆・社長に◇ケネディ米第 35 代大統領に
就任◇2月＝サンケイ新聞労組、新聞労連脱退、
サンケイ残酷物語始まる◇4月＝米駐日大使に
ライシャワー就任。労働運動に分裂を持ち込む
「ケネディ・ライシャワー路線」始まる◇日本共
産党第 8 回大会、「反米帝・反独占の新しい人民
の民主主義革命」を目指す新綱領を決定◇12月
＝毎日新聞北海道発行所労働組合結成

◆1962 (昭和 37) 年 30 歳

5月 第 33 回メーデー



(印刷の仲間たちと＝中列右から 2 人目)

5月 毎日新聞労組第 16 回定期中央大会。現職の増
田滋委員長、加藤親至書記長以下戦闘的候補は全員
不信任される。毎日新聞労組中央委員

7月 東京本社整理部・本田晃さんに対する西部本社
への不当配転反対闘争

◇8月＝第 8 回原水爆禁止世界大会、社会党・総
評は「いかなる国の核実験にも反対」動議不採択
を理由に退場、原水爆禁止運動、分裂

◆1963 (昭和 38) 年 31 歳

5月 毎日新聞労組東京支部大会で、本部執行委員に
1 票差で当選◇毎日新聞労組第 17 回定期中央大会
(委員長＝林卓男、書記長＝奈良泰夫)。林・奈良執
行部は反共を前面に掲げて会社と一体となって組織
攻撃。この時の執行部は東京選出の山野井と西部支
部選出の本執・高藤敏昭、青年部長・勝又敏夫だけが
反主流だった

9月＝最高裁、松川事件全被告の無罪を確定◇10
月＝総選挙 (自 283、社 144、民社 23、共産 5)
◇11月＝ケネディ米大統領、ダラスで暗殺され
る◇輪転機長制発足

◆1964 (昭和 39) 年 32 歳

5月 毎日新聞労組第 18 回定期中央大会 (委員長＝

林卓男、書記長＝奈良泰夫) 労使協調・反共を基調とした執行部提案の運動方針案に対して、政治、労連共闘、賃金体系、合理化など運動方針のすべてに修正案を提出。毎日新聞労組中央委員

IMF-JC 発足◇7月＝共産党、4.17スト反対を自己批判◇10月＝東京一大阪間の東海道新幹線開業◇10日＝東京オリンピック開幕



◆1965 (昭和40)年 33歳

4月21日 長男・泰史誕生

5月 毎日新聞労組第19回定期中央大会(委員長＝後藤秀俊、書記長＝小野塚源次郎)。本部の運動方針に批判集中。毎日新聞労組東京支部印刷分会長

1月＝新聞各紙、日曜夕刊廃止◇4月＝ベトナム戦争報道で、ポール国務次官・マッカーサー二世米国務次官補が「毎日、朝日には共産党員が多い」と米外交委員会で発言。10月にはライシャワー米大使が「毎日、朝日のベトナム報道は偏向」と毎日新聞・大森、朝日新聞・秦の両記者を攻撃◇8月＝毎日新聞西部本社、門司から小倉へ移転

◆1966 (昭和41)年 34歳

1月 大森実・外信部長が退社。会社「本人の希望で圧力はなかった」

5月 毎日新聞労組第20回定期中央大会(委員長＝後藤秀俊、書記長＝小野塚源次郎)。賃金体系改定十原則に職務・職能給に道を開く項目があると削除の批判が集中。毎日新聞労組東京支部印刷分会長

9月 毎日新聞社、有楽町から竹橋へ移転

11月 西部本社への不当配転反対闘争を続けてきた本田晃さん、都労委の和解勧告を受諾し、翌年2月に東京本社に復帰

5月＝中国文化大革命始まる◇6月＝米北爆、ハノイ、ハイフォンへ拡大。ビートルズ日本公演。エレキブームに◇10月＝新聞労連、ベトナム侵略戦争反対決議。ベトナム侵略反対統一スト

◆1967 (昭和42)年 35歳

5月 毎日新聞労組第21回定期中央大会(委員長＝

柳原義次、書記長＝石川四郎) 本部執行委員・合理化対策部長

6月 東京本社で一連20日印刷

11月 会社「職務評価に関する答申」を承認、「毎日型職務分類制度」の全容が明るみに出る◇臨時中央大会は職分制反対を決定

1月＝総選挙(自277、社140、民社30、公明25、共産5)◇4月＝東京都知事に美濃部亮吉氏当選

◆1968 (昭和43)年 36歳

4月 毎日新聞社、労働者に差別と分裂を強要する「職務分類制度＝職分制」実施強行◇中部支部輪転職場で磯貝佳身がベトナム戦争反対カンパの一環として記録映画「アメリカの戦争犯罪」を上映

5月 毎日新聞労組第22回定期中央大会(委員長＝柳原義次、7月に牧孝昌と交代) 本部執行委員・合理化対策部長に再選

6月 印刷・用紙職場で戸塚章介がベトナムルポ映画「勝利はこだまする」上映

9月 会社、磯貝佳身、戸塚章介の2人にけん責処分通告。ベトナム映画上映不当処分反対闘争始まる。毎日新聞労組は都労委へ救済申し立て

3月＝東大闘争、卒業式中止

◆1969 (昭和44)年 37歳

6月 本部、夏季手当闘争で臨時中央大会に闘争委設置提案。賛成＝79、反対＝39、要3分の2条項により1票差で否決

8月 毎日新聞労組第23回定期中央大会(委員長＝牧孝昌) 本部執行委員・合理化対策部長3選◇職分制差別に反対して大阪輪転の4君が闘う

11月 臨時中央大会、闘争委設置提案1票差で否決
1月＝東大闘争、安田講堂攻防戦。東大入試中止

◆1970 (昭和45)年 38歳

3月 大阪で万国博覧会開幕。家族4人で見学へ

8月 毎日新聞労組第24回定期中央大会(委員長＝黒岩義之) 本部書記長に就任



(第25期・牧、第26期・黒岩新旧執行部の東京選出本部役員。前列牧執行部、後列黒岩執行部、中央が山野井＝片山津での中央大会で)

3月＝朝刊24分体制◇4月＝春闘・闘争委設置提案、賛成＝72、反対＝47で否決◇報知・報知印刷労組のロックアウト攻撃◇7月＝ベトナム闘争都労委で全面勝利。会社行政訴訟◇10月＝チリでアジェンデ大統領就任

◆1971（昭和46）年 39歳

2月 会社のファクシミリ強行実施に対して三六協定破棄で闘う
 8月 毎日新聞労組第25回定期中央大会（委員長＝黒岩義之）本部書記長再選
 11月 年末手当闘争、闘争委設置提案2票不足で否決。この年、新聞関係の不当労働行為事件すべて勝利。西日本（公明新聞拒否）、時事通信配転、京都新聞解雇撤回、長崎新聞解雇撤回
 12月 活版職場の川島幸男、鉛中毒で労災認定

◆1972（昭和47）年 40歳

3月 会社、活版職場の龍野正徳君に解雇処分。同職場、解雇に反対し就労闘争⇒会社、同解雇処分を撤回し懲戒休職3カ月に
 5月 毎日新聞労組臨時中央大会（箱根）議事規則改正に反対する会社の意を受けた代議員44人が大会をボイコット◇西山太吉・政治部記者、沖縄密約漏洩を理由に不当逮捕される。「知る権利」闘争（茨城大学、茨城弁護士会主催で講演）
 6月 臨時中央大会を再開したが、議事規則改正問題で紛糾。大会会場を箱根観光旅館、同強羅ホテル、読売ランドと移して3日間継続し、「できれば今期中、遅くも来年2月に改正」の小委員会集約を承認
 8月 毎日新聞労組第26回定期中央大会。役員選出難航、委員長・書記長暫定留任、大会休会
 10月 毎日新聞労組第26回定期中央大会再開（委員長＝志道良太）本部書記長3選



2月＝第11回冬季オリンピック札幌大会、70分級ジャンプで金銀銅メダル獲得◇5月＝沖縄施政権返還、沖縄県に◇7月＝田中角栄、内閣総理

大臣に◇8月＝新聞労連委員長に加藤親至就任◇9月＝田中角栄訪中、日中国交正常化で合意

◆1973（昭和48）年 41歳

2月 議事規則改正に反対する本部執行委員6人が辞意・退席し本部機能マヒ。「山おやじ、迷うな」とハッパをかけた大住組織部長らとねばり強く組織再建への活動を展開
 4月 毎日新聞労組臨時中央大会（箱根）議事規則改正で討論を再開。大阪印刷の代議員ら提案の「重大事項指定」動議を賛成55、反対68で否決。議事規則改正案を賛成70、反対53で可決。議事規則改正ようやく成る。ただし発効は1年後
 8月 毎日新聞労組第27回定期中央大会（委員長＝志道良太）本部書記長4選◇家族4人で九州旅行
 10月＝オイル・ショック◇11月＝毎日新聞西部本社での思想調査問題で同本社編集局長、人事部長解任◇12月＝毎日新聞社「石油ショックによる危機」訴える。組合、社長の引責辞任を要求

◆1974（昭和49）年 42歳

2月 ベトナム映画裁判、東京地裁判決「原告の請求を棄却する」との組合勝利判決
 3月 ベトナム映画裁判判決を受けて会社と解決団交。団交・小委員会では会社を追及した結果、会社は控訴を断念し判決に服す。合意文書と解決金2600万円を勝ち取り組合側の勝利確定◇九段会館でベトナム映画裁判勝利記念集会



4月 会社、定例生産協・団交で平田満夫労担の解任を発表◇春闘全体で32.9%の賃上げ獲得
 6月 夏闘臨時中央大会で15年ぶりに闘争委員会設

置◇会社「借入金 690 億円になる。新聞定価（セツト）1100 円から 1700 円に改定」と発表

7 月 会社、「上期決算が 27 億 5000 万円の赤字になる」と発表

8 月 毎日新聞労組第 28 回定期中央大会（委員長＝安東謙、書記長＝福島清）◇毎日新聞労組本部書記長退任し、東京本社印刷局印刷部輪転課に復帰（6 級職）佐野巖印刷部長の激しいいじめを受ける

11 月 本給＝44,600 円、年齢給＝45,700 円、調整給＝23,200 円、世帯手当＝18,000 円、家族手当＝11,000 円、合計＝142,500 円、基準外＝49,822 円、宿直手当＝16,900 円、合計＝209,222 円、所得税など差引後支給額＝150,000 円

◇10 月＝会社、山本光春社長以下全役員の辞任を公表。11 月の臨時株主総会で田中香苗社長に◇12 月＝統一労組懇（統一戦線促進労働組合懇談会）結成

◆1975（昭和 50）年 43 歳

5 月 東京印刷部差別反対 9 人の闘い勝利解決。会社、「職務分類制度」廃止を表明



（不当差別を撤回させた印刷の 9 人と山野井＝右か 3 人目）

12 月 15 日 父・福松、84 歳で死去

1 月＝毎日新聞社株主総会。41 億 5000 万円の欠損を計上。毎日新聞の経営危機が顕在化◇4 月＝毎日新聞労組、春闘で初のストライキ（9 時 15 分から 1 時間全面スト）◇サイゴン解放、ベトナム戦争終結◇8 月＝毎日新聞労組第 29 回定期中央大会（委員長＝大住広人、書記長＝福島清・再選）

◆1976（昭和 51）年 44 歳

2 月＝毎日新聞社株主総会、田中社長退陣、平岡社長就任。欠損 56 億円、累積 97 億 3000 万円◇2 月＝ロッキード事件発覚◇4 月＝春闘ゼロ回答。臨時中央大会で長期闘争方針「歴史的視点に立った闘いを」決定◇7 月＝ロッキード事件で田中角栄首相逮捕◇8 月＝毎日新聞労組第 30 回定期

中央大会（大住委員長再選、福島書記長 3 選）◇9 月＝平岡新社長「新旧分離」示唆◇毛沢東死去

◆1977（昭和 52）年 45 歳

2 月＝「再建に関する合意書」締結◇3 月＝「労働組合は毎日新聞を守り抜く」との本部闘争方針を決定◇会社「新会社計画」を一方向的に発表◇5 月＝毎日関連労組連絡協議会（全毎連）結成◇毎日闘争中央連絡協議会（中連協）結成◇6 月＝「毎日新聞を考える集会」全国で開催◇8 月＝原水禁大会が 14 年ぶりに統一◇10 月＝従業員持株会発足◇11 月＝毎日新聞北海道発行所労組解散と毎日新聞北海道支部結成大会◇12 月 1 日＝新会社「毎日新聞社」が営業開始

◆1978（昭和 53）年 46 歳

3 月 印刷部輪転課機長

9 月 印刷部用紙課班長

1 月＝毎日新聞労組第 31 回定期中央大会（委員長＝古川和、書記長＝福島清 4 選）◇同盟、労働戦線の右翼的再編方針を決定◇社公合意◇4 月＝京都で革新知事敗れる◇5 月＝再建闘争第 2 段階の方針決定◇新東京国際空港（成田空港）開港◇6 月＝沖縄密約裁判で最高裁は上告棄却、西山記者の有罪が確定◇10 月＝10 万円の夏季手当に反対して朝刊帯のスト。12 万円で妥結（10 日）◇11 月＝毎日新聞労組第 32 回定期中央大会（委員長＝古川和、書記長＝福島清 5 選）◇沖電気で 300 人の指名解雇

◆1979（昭和 54）年 47 歳

12 月 印刷部用紙課副課長

3 月＝春闘スト権確立 84.3%◇4 月＝都知事選で社共統一候補の太田薫氏敗れる◇7 月＝加藤親至・新聞労連委員長退任（5 期）◇9 月＝毎日新聞労組第 33 回定期中央大会（田村徳章・委員長、田場武勝・書記長）◇10 月＝総選挙（自 248、社 107、公明 57、共産 39、民社 35、新自 4、社民連 2、無所属 19）自民党過半数割れ、無所属 10 人を追加公認し過半数を維持◇12 月＝ソ連、アフガニスタンに侵入

◆1980（昭和 55）年 48 歳

1 月＝会社、合意書継続破棄を通告◇失業者 100 万人を越す◇2 月＝海上自衛隊、リムパック（環太平洋合同演習）に初参加◇5 月＝大平内閣不信任案可決◇6 月＝衆参同日選挙で自民圧勝（自 284、社 107、公明 33、民社 32、共産 29、新自 12、社民連 3）◇7 月＝モスクワ・オリンピッ

ク、米・日・西独・中国など不参加◇11月＝米レーガン、カーターを破り大統領に

◆1981（昭和56）年 49歳

3月＝中国残留孤児47人が来日、26人が身元判明◇4月＝世界初の有人再使用可能宇宙船、スペースシャトル・コロンビア打ち上げ◇5月＝元駐日米大使ライシャワー、核積載艦船の日本寄港は60年安保改定当時に日米口頭了解があったと発言

◆1982（昭和57）年 50歳

8月 印刷部輪転課第二課長

1月＝水上勉ら「核戦争の危機を訴える文学者の声明」発表◇芥川也寸志ら「反核・日本の音楽家たち」結成◇2月＝山内毎日新聞社長、団交で「労使関係を見直したい。ストはやめてほしい」と発言◇7月＝中国・韓国、日本の歴史教科書が侵略を歪曲していると批判

◆1983（昭和58）年 51歳

4月 長女・明子、警察病院に就職

4月＝福岡県で革新知事誕生◇NHK朝のテレビ小説「おしん」スタート◇10月＝ロッキード裁判で田中角栄・元首相に実刑判決◇12月＝ロッキード総選挙（自250、社112、公明58、民社38、共産26、新自ク8、社民連3）

◆1984（昭和59）年 52歳

2月23日 かみさん、くも膜下出血で倒れる

3月 印刷部副部長兼第二課長

4月 泰史、アメリカ・ヨセミテに出発

3月＝グリコ事件発生◇7月＝第23回口サンゼ

ルス・オリンピック◇8月＝統一労組懇談会でナショナルセンター的機能強化を決定

◆1985（昭和60）年 53歳

7月 毎日新聞東京本社印刷部長



（印刷部長として職場の部員を団結させるために柴又の「川甚」で印刷部初の「全眩」を開催した。部員の約半数100人が集まってくれた）

8月＝日航ジャンボ、御巣鷹山に墜落◇10月＝毎日新聞「新」「旧」両社が合併◇阪神タイガース、21年ぶりにセ・リーグ優勝

◆1986（昭和61）年 54歳

4月＝ソ連のチェルノブイリ原子力発電所で大事故◇7月＝総選挙（自300、社85、公56、共産26、民26、新自ク6、社民連4）◇8月＝新自由クラブ解散、自民党に復党◇9月＝土井たか子、社会党委員長に就任◇11月＝三原山大噴火で全島民が避難◇12月＝92年度予算で防衛費がGNP比1%突破

◆1987（昭和62）年 55歳

2月22日 毎日新聞社定年退職。

退職金＝10,958,830円

3月 かみさんとアメリカへ。泰史がコロラドで大怪我した際にお世話になった秋間美江子さんへお礼の旅。泰史と合流



1987年2月24日、日本教育会館で「山野井孝有を励ます会」。会社幹部をはじめ、編集、営業、活版、発送、労働組合などの仲間たちが定年退職を祝ってくれた

第3部 新たな挑戦から人生を閉じるまで 1987.4~2026.3.5

◆1987 (昭和 63) 年 56 歳

4 月 嶺鹿産業に再就職。給与 25 万円

10 月 毎日新聞労組 0B たちの交流旅行会「無名会」第 1 回 (館山) 16 人参加。以後、毎年継続し、2006 年の第 20 回が最後となった

4 月 = 国鉄、114 年の歴史を閉じる。JR 発足◇5 月 = 朝日新聞阪神支局が襲撃され小尻記者死亡、犬飼記者重傷。「赤報隊」が犯行声明◇7 月 = 総評大会「90 年を目標に総評解散」を決定◇11 月 = 竹下内閣発足◇同盟・中立労連解散



再就職先での第一歩は居酒屋での焼き鳥焼きと駅頭でのピラくぱり。

写真はしばらくして店長になった巣鴨駅前の居酒屋「みねし か」で家族と。

◆1988 (昭和 63) 年 56 歳

5 月 泰史、北極圏バフィン島トール西壁登頂

10 月 第 2 回無名会 (東京・強羅毎日山荘)

3 月 = 青函トンネル開通で、明治 41 年以來の青函連絡船が姿を消す◇6 月 = リクルート疑惑発覚、中曽根、宮沢、渡辺ら政治家、非公開株取得で利益◇7 月 = 総評、解散を 1989 年に繰り上げを決定◇9 月 = 第 24 回オリンピック (ソウル)

◆1989 (平成元) 年 57 歳

2 月 親会社社長から聖和産業社長を要請され就任。給与 80 万円

11 月 第 3 回無名会 (東京・有楽町)

1 月 7 日 = 昭和天皇死去、「平成」時代が始まる◇4 月 = 弱者いじめの「消費税」導入◇6 月 = 中国で「天安門事件」◇11 月 = 全労連 (全国労働組合総連合会) 結成、統一労組懇解散。連合 (日本労働組合総連合) 結成、総評解散◇12 月 = ブッシュ米大統領とゴルバチョフソ連議長が米ソ首脳会談、冷戦終結を宣言

◆1990 (平成 2) 年 58 歳

10 月 第 4 回無名会 (大阪・琵琶湖)

8 月 = イラクがクウェートに侵攻◇9 月 = 平均寿命、男 75.92 歳、女 81.90 歳、一世帯人口 3 人を切り、2.98 人に◇10 月 = 東西ドイツが統一

◆1991 (平成 3) 年 59 歳

10 月 第 5 回無名会 (西部・メカリ毎日荘)

1 月 = 多国籍軍がイラクに対して攻撃開始、湾岸戦争勃発◇6 月 = 長崎県雲仙の普賢岳で大火砕流発生◇12 月 = ソ連 (ソビエト社会主義共和国連邦) 消滅

◆1992 (平成 4) 年 60 歳

7 月 聖和産業退職。退職金 2000 万円辞退

8 月 交通事故の損害保険受付業務会社にアルバイトで就職。時給 1000 円

9 月 長女・明子、太田口和久 (東工大助教授) と結婚

10 月 第 6 回無名会 (中部・犬山)

6 月 = 国連平和活動 (PKO) 協力法、衆議院で可決◇7 月 = 第 25 回オリンピック (バルセロナ)

◆1993 (平成 5) 年 61 歳

10 月 第 7 回無名会 (大阪・宝塚)

7 月 = 北海道南西沖 (奥尻島) 地震、死者 200 人余◇8 月 = 非自民 6 党連立政権誕生

◆1994 (平成 6) 年 62 歳

9 月 孫・幸久誕生

10 月 第 8 回無名会 (東京・土肥)

4 月 = 細川首相退陣、以後、羽田、村山と 1 年間に 3 つの内閣

◆1995 (平成 7) 年 63 歳

元旦 第 1 回成田山初詣 (歩いて 30 ㌾) かみさんと

10 月 第 9 回無名会 (西部・別府)



1 月 17 日 = 阪神・淡路大震災発生、6,434 人以上が死亡◇3 月 = 地下鉄サリン事件発生

◆1996 (平成 8) 年 64 歳

10 月 第 10 回無名会 (中部・高山)

1 月 = 村山首相辞任、橋本内閣成立◇日本社会党が社会民主党と党名変更。村山富市委員長に 7 月 = 第 26 回オリンピック (アトランタ)

◆1997 (平成9) 年 65 歳

元旦 第2回成田山初詣 (歩いて30㌔) かみさんと

1月28日 孫・未来誕生

2月 毎日新聞従業員持株会理事長宛に「持株会を退会し個人株主になりたい」と申し入れ

8月18日 家族集合、記念写真。左から大田口和久 (長女・明子夫) 山野井孝有、大田口明子 (長女)、同幸久 (明子長男)、山野井妙子 (泰史妻)、山野井泰史 (長男)、大田口未来 (明子長女) 妻孝子



10月 第11回無名会 (大阪・丹波)

7月=英国、香港を中国に返還

◆1998 (平成10) 年 66 歳

元旦 第3回成田山初詣 (歩いて30㌔) かみさんと

2月 交通事故損保受付業務会社で働く。平均66歳のアルバイト26人で、不当解雇に反対して労働組合結成

4月 交通事故損保受付業務会社アルバイトの60歳定年制撤回させる

6月 交通事故損保受付業務会社アルバイト退職

10月 第12回無名会 (東京・佐久平)

2月=冬季オリンピック、長野で開催◇3月=山一証券、100年の歴史に幕

◆1999 (平成11) 年 67 歳

元旦 第4回成田山初詣 (歩いて30㌔) かみさんと

10月 第13回無名会 (西部・山口湯田温泉)

◆2000 (平成12) 年 68 歳

元旦 第5回成田山初詣 (歩いて30㌔) かみさんと

1月 奥多摩の泰史宅で登山仲間の新年会



5月 泰史、ヒマラヤK2挑戦に毎日新聞OB・現役がカンパ集めて激励会



8月31日 泰史、K2に単独無酸素で登頂

10月 第14回無名会 (中部・駒ヶ根)

4月=介護保険法施行◇9月=第27回オリンピック (シドニー)、高橋尚子女子マラソンで優勝

◆2001 (平成13) 年 69 歳

元旦 第6回成田山初詣 (歩いて30㌔) かみさんと

1月 泰史・妙子・かみさん・私の4人でネパールの旅

8月 泰史・妙子・かみさん・私の4人で富士山登頂

10月 第15回無名会 (大阪・舞洲)

4月=小泉内閣成立◇9月11日=アメリカ中樞部で同時多発テロ発生

◆2002 (平成14) 年 70 歳

元旦 第7回成田山初詣 (歩いて30㌔) かみさん、孫・幸久と

8月 泰史・妙子と孫の幸久、かみさんの親子3代で富士山登頂

10月 泰史、妙子がギャチュンカンで遭難

1月=政治スキャンダル続発。鈴木宗男逮捕、辻元清美、加藤紘一、田中真紀子ら議員辞職◇10月=小柴昌俊、田中耕一、ノーベル賞ダブル受賞

◆2003 (平成15) 年 71 歳

元旦 第8回成田山初詣 (歩いて30㌔) かみさん、孫・幸久と

1月 泰史、「朝日スポーツ賞」受賞



6月 泰史・妙子「第7回植村直己冒険賞」受賞。植村直己出身地の兵庫県日高町で囲む会開催



10月 第17回無名会（西部・武雄温泉・呼子）

12月 奥多摩の泰史宅で餅つき大会を始める

3月＝米英、国際世論を踏みにじてイラク侵攻

◆2004（平成16）年 72歳

元旦 第9回成田山初詣（歩いて30㌾）かみさん、孫・幸久、未来と

4月 泰史、「垂直の記憶」（山と溪谷社）出版

11月 毎日新聞従業員持株会理事長宛に有志代表として「持株会に対するOB会員有志による要望」提出

10月 1960年代の毎日新聞労組の運動の理論的な中心だった板垣保さんの没後出版された「検証 労働運動半世紀」出版記念会



（左から松島守保、柳澤勇、山野井孝有、戸塚章介）

10月 第18回無名会（中部・伊勢二見）

8月＝第28回オリンピック（アテネ）◇10月＝新潟中越地震、68人死亡、家屋全壊1万6千戸

◆2005（平成17）年 73歳

元旦 第10回成田山初詣（歩いて30㌾）かみさん、孫・幸久、未来と

8月15日 「振りかえれば波乱一七十三年の人生とこれから」出版

10月 第19回無名会（大阪・姫路）

3月＝愛知万博、120カ国参加◇4月 JR 福知山線で大事故◇6月＝改正介護保険法成立、利用者の負担増に

◆2006（平成18）年 74歳

元旦 第11回成田山初詣（歩いて30㌾）かみさん、孫・未来と

10月 第20回無名会（東京・房総）＝最終回

2月＝トリノ冬季五輪、荒川静香金メダルのみ◇8月＝小泉純一郎首相、靖国神社参拝◇9月＝第1次安倍晋三内閣成立

◆2007（平成19）年 75歳

元旦 第12回成田山初詣（歩いて30㌾）かみさん、孫・幸久、未来と

12月 奥多摩餅つき会。沢木耕太郎さんも参加して開催した泰史・妙子夫妻の「結婚式」記念写真



1月＝防衛省発足◇2月＝衆院厚生労働委で「消えた年金」発覚◇7月＝参院選で民主党が第1党に◇9月＝福田康夫内閣成立

◆2008（平成20）年 76歳

元旦 第13回成田山初詣（歩いて30㌾）かみさん、孫・幸久、未来と

3月＝中国チベットで自治区で独立求める市民が大抗議行動◇6月＝秋葉原で無差別殺傷事件◇9月＝麻生太郎内閣成立

◆2009（平成21）年 77歳

元旦 第14回成田山初詣（歩いて30㌾）かみさん、孫・幸久と

9月＝民主党、社民党、国民新党連立の鳩山由紀夫内閣成立

◆2010（平成22）年 78歳

元旦 第15回成田山初詣（歩いて30㌾）かみさん、孫・幸久、未来と

12月1日 「五分五分―山野井泰史・妙子の『いのち』と向き合って生きる」自費出版

1月＝日本航空、経営破綻◇5月＝普天間基地移転先を辺野古で日米合意◇6月＝菅直人内閣成立◇11月＝米オバマ政権、中間選挙で大敗

◆2011（平成23）年 79歳

元旦 第16回成田山初詣(歩いて30キロ)かみさん、孫・幸久、未来と

7月5日 「いのち五分五分―息子・山野井泰史と向き合って」(山と溪谷社刊)出版

3月11日＝東日本大震災、福島第1原発大事故◇9月＝野田佳彦内閣成立

◆2012（平成24）年 80歳

元旦 第17回成田山初詣(歩いて30キロ)かみさん、孫・未来と

10月 秋間美江子さんと一緒に北海道大学を訪問、新田孝彦副学長に宮澤弘幸の遺品アルバムを贈呈して名誉回復を要請



11月 新宿常圓寺で、秋間美江子さんとの北海道大学訪問の報告集会開催、約30人が参加



12月16日＝第46回衆院選(自民294、民主57、公明31、維新54、みんな18、未来、共産8、社民2)自民圧勝◇26日＝第2次安倍内閣成立

◆2013（平成25）年 81歳

元旦 第18回成田山初詣(歩いて30キロ)かみさん、孫・幸久、未来&明子と(和久が車を運転)

1月29日 「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」札幌で結成。代表に就任



2月23日 宮澤弘幸墓参りと「宮澤弘幸追悼・顕彰2.22つどい」真相を広める会主催(新宿・常圓寺)泉澤章弁護士が「秘密保全法」策動について講演。

7月＝参院選で自民大勝、衆参ねじれ解消◇12月6日＝特定秘密保護法成立

◆2014（平成26）年 82歳

元旦 第19回成田山初詣(歩いて30キロ)かみさんと、孫・幸久、未来&明子と(車・和久)

2月23日 「宮澤弘幸追悼・顕彰2.22つどい」真相を広める会主催(新宿・常圓寺)

5月 秋間美江子さん同席で北海道大学と交渉。北大は「宮澤事件は冤罪である」「宮澤弘幸を顕彰し次代の学生にその精神を伝える『宮澤賞』を創設する」「『宮澤・レーン事件』を風化することが無いよう努力することが必要である」と表明した



2月＝東京都知事に舛添要一当選◇4月1日＝消費税5%から8%に◇防衛装備移転三原則閣議決定◇7月1日＝集団的自衛権行使閣議決定◇12月14日＝第47回総選挙(自民291、公明35、民主73、維新1、共産21、他14)

◆2015（平成27）年 83歳

元旦 第20回成田山初詣(歩いて30キロ)かみさん、孫・幸久、未来&明子(車＝和久)

2月22日 宮澤弘幸墓参り◇「『戦争への道』許さず秘密保護法廃止を！―宮澤弘幸追悼・顕彰2.22のつどい」真相を広める会主催(新宿・常圓寺)

11月16日 かみさん・孝子死去、77歳
12月20日 「山野井孝子さんお別れ会」(千葉市・京葉銀行文化プラザ)



3月11日=東日本大震災、東京電力福島第1原発メルトダウン、水素爆発◇9月17日=安保法制・戦争法成立

◆2016(平成28)年 84歳
2月22日 宮澤弘幸墓参◇「戦争法・秘密保護法廃止を一宮澤弘幸の命日につどう北大OB/OGのつどい(新宿アイランドタワー41F)」



12月8日 宮澤弘幸弾圧抗議墓参(新宿・常圓寺)
3月29日=安保法制・戦争法施行

◆2017(平成29)年 85歳
2月22日 宮澤弘幸墓参後、「宮澤・レーン事件を忘れない—強権国歌づくりノー、宮澤先輩の命日に集う北大OB/OGのつどい」(新宿・常圓寺)
12月8日 宮澤弘幸弾圧抗議墓参(新宿・常圓寺)
6月15日=共謀罪法成立◇7月7日=国連会議「核兵器禁止条約」採択。国連加盟193カ国中122カ国の賛成(保留1、反対1)

◆2018(平成30)年 86歳
2月22日 宮澤弘幸墓参後、「強権国家NO!—宮澤先輩に命日につどう 北大OB/OGのつどい」(新宿・常圓寺)
12月6日 「芸術と憲法を考える連続講座」(東京藝大)で「北大生・宮澤弘幸スパイ冤罪事件」について

山田健太・専修大教授、川嶋均・東京藝大非常勤講師と鼎談



12月10日 「戦争はいけません—元従軍看護婦戸田ノブ99歳の思い」(山野井孝有・後藤真理子共著) 第1刷300部自費出版
9月6日=北海道胆振地方でM6.7の地震

◆2019(平成31、令和1)年 87歳
2月22日 宮澤弘幸墓参後、「宮澤・レーン事件を考えるつどい—思想教育統制の歴史から学ぶ 北大OB/OGのつどい(新宿・常圓寺)」
12月8日 宮澤弘幸弾圧抗議墓参(新宿・常圓寺)
5月1日=元号「令和」に

◆2020(令和2)年 88歳
2月22日 宮澤弘幸墓参(新宿・常圓寺)



10月25日 秋間美江子さん、ポルダーで死去。93歳
11月16日 「我慢できない 許せない—叫び続けて18年」300部出版
4月7日=コロナウイルス禍で緊急事態宣言◇9月16日=菅義偉内閣成立◇10月1日=菅首相が日本学術会議新会員6人の任命拒否

◆2021(令和3)年 89歳
2月22日 宮澤弘幸墓参(新宿・常圓寺)
7月=第32回オリンピック(東京)◇10月=岸田内閣成立◇10月31日=第49回総選挙(自民261、公明32、立憲96、維新41、国民11、共産10、れいわ3、他11)

◆2022 (令和4) 年 90歳

2月22日 宮澤弘幸墓参 (新宿・常圓寺)



3月11日 自らが体験した「77年前の『匂い』と『香り』—消えぬ東京大空襲の悲惨な思い出」を、KOMOK会報号外に投稿した

12月8日 宮澤弘幸弾圧抗議墓参 (新宿・常圓寺) と「北大OB/OGのつどい」参加

7月=参院選 (自民63、立憲民主17、公明13、維新12、国民民主5、令和3、共産4、他8)

◆2023 (令和5) 年 91歳

2月22日 宮澤弘幸墓参後、コロナ禍のため2020、2021、2022の3年間中断したつどいを再開。「戦争に暴走し自由を圧殺した『宮澤・レーン事件』を忘れない 北大OB/OGのつどい」(新宿・農協会館)。①「HBC開戦記念日特集」DVD上映②問題提起=山野井孝有③講演「原発・憲法・ジャーナリズムの今」青木美希



4月23日 宮澤弘幸姪の福原恵美さん夫妻が上京して宮澤家遺骨を供養塔へ移設法要 (新宿・常圓寺)



(右から3人目山野井。5人目宮澤弘幸姪・福原恵美)

12月8日 宮澤弘幸弾圧抗議墓参 (新宿・常圓寺)

3月=作家・大江健三郎死去

10月=将棋の藤井聡太、史上初八冠達成

◆2024 (令和6) 年 92歳

2月23日 宮澤弘幸墓参◇「宮澤・レーン事件を考えるつどい—クラーク先生と大戦前夜の北大生」北大OB/OGのつどい主催 (新宿・常圓寺)



12月8日 宮澤弘幸弾圧抗議墓参 (新宿・常圓寺)

1月=能登大地震M7.6◇10月=石破内閣成立
◇12月=日本被団協、ノーベル平和賞受賞

◆2025 (令和7) 年 93歳

2月23日 宮澤弘幸墓参と法要◇「2025宮澤・レーン事件を忘れない! 宮澤弘幸さんを偲ぶ墓前のつどい」(北大OB/OGのつどい主催=新宿・常圓寺)



5月15日 第6回KOMOKのつどい (後樂園・涵徳亭) 兄が出征した時の寄せ書きを持参して紹介し、戦争の残酷を訴えた





(前頁の第6回KOMOKのつどい続き) 毎日新聞、新聞OBたちと一緒に記念撮影(前列右から4人目)

7月30日 トークイベント「いのち五分五分」山野井孝有×泰史×妙子×神長幹雄(お茶ノ水・THE TRIBE)に親子3人で出席



12月8日 宮澤弘幸弾圧抗議墓参(新宿・常圓寺)



◆2026(令和8)年2月22日 94歳誕生日(この集いが最後の行動参加となった)
宮澤弘幸追悼法要(新宿・常圓寺)◇北大OB/OGの会主催「スパイ防止法と『宮澤・レーン事件』を考えるー宮澤弘幸没後79周年墓前のつどい」甥・麻生豊運転の自動車に参加した



「北大OB/OGの集い」の最後に94歳誕生日祝の花束を贈呈。左から甥・麻生豊、宮澤弘幸の姪・福原恵美、寺沢玲子、山野井孝有、黒澤多佳子、大住広人

3月5日 死去 94歳11日

2月8日=第51回総選挙(自民316、維新36、中道49、国民28、参政15、みらい11、共産4、他6)
◇2月28日=トランプ、イラン攻撃

第4部 著書などに記した自分史と主張

『振り返れば「波乱」73年の人生とこれから』(2005年刊) はじめに

『いのち五分五分一息子・山野井泰史と向き合って』(2011年刊) はじめに あとがき

『かあちゃん ありがとう』(2015年刊) はじめに

『戦争はいけません一元従軍看護婦戸田ノブ 99歳の思い』(2018年刊) 贈呈にあたって 読后感想文

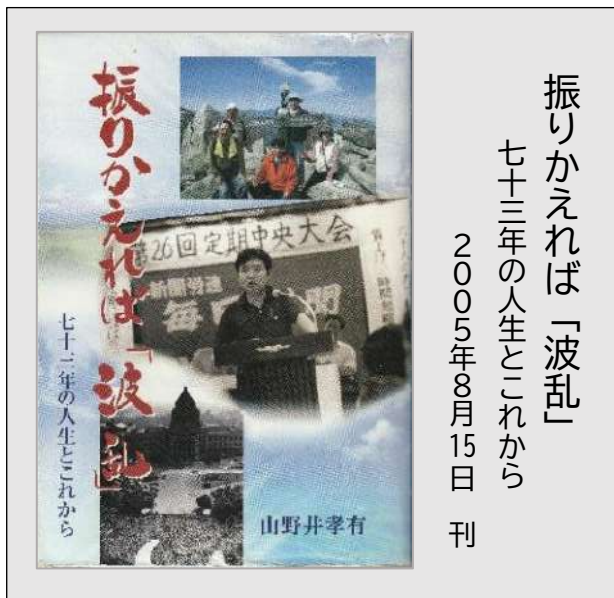
『我慢できない 許せない』(2020年刊) はじめに あとがき

『秋間美江子さんの献身と苦悩を思う』事務局たより 号外 2020年12月8日付

『幻のグライダー特攻』朝日新聞千葉版 2021年8月12日付

『77年前の「匂い」と「香り」』KOMOK会報 号外 2022年3月10日付

『トークイベント「いのち五分五分」』事務局たより 号外 2025年8月1日付



はじめに

私は2002年2月22日、70歳を迎えた。古希である。かつて人生50年の時代、60歳(還暦)は長寿であり、70歳(古希)は文字どおり「古来希な年齢」だった。しかし今は平均寿命が伸びた。60歳まで働くのは当たり前で、70歳はまだ高齢者仲間の入口の年齢かも知れない。

そうは言ってもこれからは身体が衰え、記憶が薄れていくことは避けられない。一方、40年以上一緒に暮らしたかみさんではあるが、私の家庭外での人生は、おそらく十分の一も知らないだろう。ましてや、二人の子供(明子・泰史)にいたっては、父親がどのように生きてきたかはまったくとっていいほ

ど知らないはずだ。知ったからと言って何かを感じることはないかもしれない。今は自分達が生きるのに精一杯の世の中だから。

しかし、70歳になって自分の行く末を考えた時、かみさんや子供たちに、夫として父親として、また二人の孫たちには祖父として、どんな生き方をしていたのか残しておこうと思うようになった。そこで、還暦を迎えたときに自分自身の人生のメモとしてまとめていた「おやじ」「おふくろ」「一冊の絵本」「大八車」「夜間高校」、さらに新聞OBが発行している「オレンジの旗」第五集に寄稿した「私の戦中・戦後」などを読み返しながらずつ追加して書いてきたものをまとめることにした。

*

『おやじ・おふくろ・兄・妹』と『戦争と多難の少年時代』は、私の生い立ちと少年時代である。この項にある「大八車」は、アル中のおやじに対して、子供として父親らしいふれあいを感じた唯一の出来事だった。「一冊の絵本」はこれまで他人から後ろ指を指されるような過ちを犯さないで生きてこられたきっかけとなる事件だったと思う。「幻の特攻隊」は、当時の戦争指導者の「鬼畜米英」の掛け声に忠実な軍国少年だった13歳当時の私を振り返った。グライダーに乗って爆弾を抱えてアメリカの軍艦に突っ込むと言う特攻訓練に誇りを持っていたのである。教育がいかに重要であるかを、改めて考え直さざるを得ない体験である。

*

『労働者の原点と闘いのスタート』は、高等小学校

1年12歳、2学期の時、学徒動員で連れて行かれた工場で、みかん箱の上に乗って旋盤を操作し、ゼロ戦（海軍零式戦闘機）の部品作りに携わった労働者の原点から、解雇されるまでの記録である。敗戦後、就職した大日本機械工業kkでの6年間はまさに波乱の人生の幕開けだったと言える。14歳で労働組合結成に参加し、レッドパージの嵐、朝鮮戦争、勅令311号違反で警察に追われ、血のメーデーに参加した。そして解雇された。

＊

『毎日新聞と激動の労働組合活動』は、毎日新聞在職33年間の記録である。「二度と労働組合活動はしません。赤旗は振りません」と面接で会社と約束をしたが、配属された職場は、前に勤めていた小さな自転車会社よりも労働条件が劣悪で、まさに「タコ部屋」だった。それにガマンできず労働組合加入と同時に活動をはじめた。砂川基地反対闘争では現地の農家に泊まりこみで闘争に参加した。その時、服部一良、橋本順の両君が毎日労組の旗を警官に奪われた。続いて、勤務評定反対闘争・警職法反対闘争など労働者、学生、知識人と広範な戦いが組織された。安保反対闘争は、「革命前夜か」と高揚した日々だった。

安保闘争に危機感を持った支配層の反動攻勢と「合理化」攻撃は熾烈だった。毎日新聞の企業内でも議事規則改正、増ページ反対闘争、職分制反対闘争と闘争が途切れることはなかった。有楽町から竹橋の新館移転では、「お堀のコイの下に寝かすのか」と地下4階の寝室に反対した。

会社の労働者に対する攻撃が組織的にピークに達した時、私は毎日新聞労働組合の本部執行委員と本部書記長を歴任していた。その当時、私だけが知り、私だけが悩み、私の記憶から消す事が出来ない局面に何回か直面した。その当時の事を、毎日新聞労使の表面には出ない歴史の事実として書き残しておくことにした。

＊

『かみさん倒れる』は、私の人生の一大事だった。この時、「かみさんのためなら、なんでもしてやりたい」と思っていた。しかし元気になるとその時のことを忘れてしまう。残る人生の日々では、あの時の気持ちを思い起こすことに努力したい。

『第二の人生は裏側で』は、毎日新聞がなぜか私に

は再就職を斡旋しなかったことから始まった。そのいきさつを、今だから記しておきたい。定年退職後は「皿洗いと焼き鳥を焼き、半纏をきて呼び込み」からスタートし、「年商13億円の雇われ社長」となった。いずれも180度転換の日々だった。任された赤字の居酒屋、クラブなどのチェーン店を黒字にし、負債7億円を返済し、退職金2000万円をかみさんの強い意向で辞退して『雇われ社長』は、60歳になった時、自らの決断で退職した。次のアルバイト先では、労働組合を結成した。14歳で労働組合結成に参加し、毎日新聞の在社中のほとんどを労働組合活動にかかわり、そして今度は、日本で初めてであろう「平均年齢65歳の労働組合結成」だった。

＊

毎日新聞定年退職後の人生で得たものは計り知れず、「働く者こそ主人公であるべきだ」との私の人生にふさわしいと思っている。毎日新聞を定年退職した時、会社が再就職の斡旋をしていたら毎日新聞の傍系企業で何となくの人生を送っていたかもしれない。そう思うと「災い転じて福」だ。第二の人生、「俺はついていた」と、今は誇りを持ってそう言える。

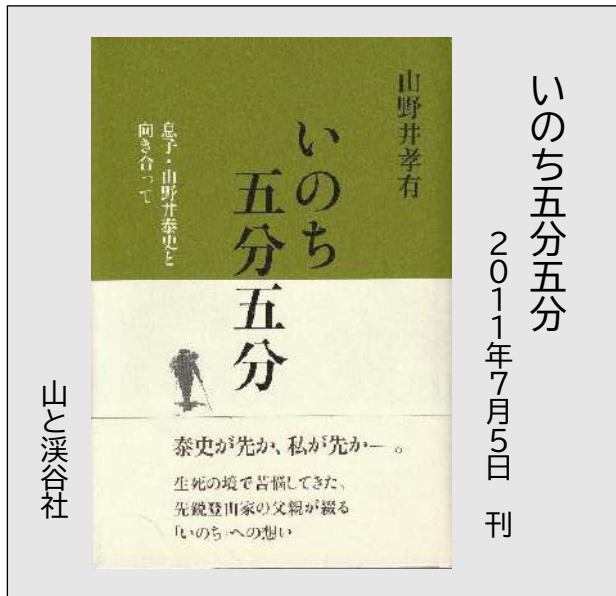
＊

最後は、『天国に一番近い男』と言われた息子・山野井泰史についての父親としての思いである。私の「波乱万丈の人生」のなかで、息子・泰史の山登りは、私の意思ではどうにもならない、ハラハラ、ドキドキ、そして喜びが交錯する出来事だった。泰史の登山については、多くのマスコミ報道や、丸山直樹さん著の『ソロ』、そして泰史自身が書いた『垂直の記憶』にまかすとして、私は泰史自身が知らない出来事と、さらに親と姉がどのように悩み苦しんだかを残しておきたいとの思いで書いた。特に、行方不明の一報が入った時には死を覚悟したギャチュンカンの事故、そして各種の「受賞」……。苦しみと喜びの日々との間の大きな落差……。

＊

しかし家族の思いを超えて、泰史と妙子は、岩壁にしがみつくと人生を再開した。私たちもまた不安との戦いが始まった。それでも山をやめろとは言わない、むしろこれからは一番の理解者でありたいと思う。ただ俺よりも先に逝くなと願うばかりだ。

2005年夏



はじめに

「おやじ、『今度こそ死ぬのではないか』と書いていただろう。おれはおやじの雰囲気からそんなことを感じた。おれも少しやばいなど感じていたが、出かけたんだ」――。

2009（平成 21）年秋、ヒマラヤ遠征から帰ってきた泰史とこんな会話を交わした。泰史のこのつぶやきのようなひとことを聞くと、2カ月前の8月19日、成田空港での胸を締めつけられるような出来事が甦ってきた。

泰史と妙子がヒマラヤ遠征のため成田空港を発つのはこの日の昼過ぎだ。いつものように2人とかみさんの3人を千葉の自宅から車で送り、空港のベンチでかみさんが握ったおにぎりを食べた。しかし私はこの時、これまで感じたことのない不安に襲われてどうにもならなかった。不安を抱いた原因は、出発3カ月前に泰史が鼻の手術をしたことにあった。1年前、泰史は自宅近くでジョギング中にクマに襲われて以降、約8カ月間、鼻からの呼吸ができなかった。ヒマラヤ出発の3カ月前の手術で、鼻からの呼吸ができるようになったばかりだ。ギャチュンカン以降初めてのヒマラヤの本格的登山だから心配になって、「泰史、その体調で大丈夫なのか」と聞いた。泰史は「鼻から呼吸ができるようになり、楽になったから大丈夫だ」と答えた。

いつものようにヒマラヤに出かける前夜は私の家に泊まる。しかし泰史の態度からは、これまでのよう

な挑戦前の「ワクワク、ドキドキ感」が感じられなかった。空港でも同じだった。ギャチュンカン事故後初めての大岩壁挑戦は、2年後の中国・ポタラ北壁だったが敗退し、1年後にようやく成功した。ポタラ北壁で敗退した時も成功した時も、挑戦前の泰史からは「ワクワク、ドキドキ感」が私にも伝わってきた。しかし今回は、「決めたことだから行く」という雰囲気を感じられて仕方がなかったのだ。

そんな時、いきなり泰史が立ち上がって私たち3人にカメラを向けた。泰史が空港で私たちにカメラを向けたことはこれまで一度もなかった。

今度は、私は食べかけのおにぎりをかみさんに渡し、妙子、泰史、かみさんと並んだ3人に、泰史と同じようにシャッターを2回切った。「今度だけはやめてくれ」と言い出すことができなかったかわりに、せめて写真だけでも撮っておきたいとの思いが無意識に働いたのだろうか……。

9月に入ると、泰史、妙子の登山計画が気になって落ち着かない日々が続いた。本格的登山が始まる予定の9月22日、長野県善光寺に私は一人で参拝した。かみさんに不安を悟られたくないからだ。さらに翌日、信州上田の別所温泉の北向観音をはじめ6つのお寺を回り、手を合わせた。ただただ、無事帰国を祈った。

2人は、10月17日、無事に帰国した。目指したクーラカンリ（7,538 ㍎）は登頂できず、敗退だった。空港に着いた泰史は、私とかみさんに「天候が悪かった」とだけ話した。だが妙子は私に「泰史は現地に着いてから、鼻の手術前の検査で肺活量が極端に落ちていたと言い、体調も悪く胸の痛みを訴えていた」と話した。口だけの呼吸では、肺活量が減るのは医学的にも明らかで、肺活量が正常に戻るのは、鼻の手術後1年は必要だとも言われている。妙子にも自分の体調が悪いことを隠してのヒマラヤ挑戦だったのだ。

振り返ってみれば、この30年、泰史が登山に向かう時、私とかみさんは常に悪夢に悩まされてきた。妙子と一緒にってから、2人分になった。泰史と妙子は、これからも、これまでと同じように、山に挑戦し続けるだろう。私とかみさんの悪夢も続くに違いない。

泰史が「天国に一番近い男」と言われて 25 年になる。私は 2009（平成 21）年 2 月、喜寿を迎えた。日本人の平均寿命は、男性 79.29 歳、女性 86.05 歳（2008 年）だから、私はあとわずかだ。泰史は登山を続ける。私は老いていく。

私と泰史の残された人生の時間、つまりどちらが先に葬式をするかは「五分五分」だ。その比率は私の方が、年々高まっていく。同時に、私と泰史がこれからどのような人生を歩むかも「五分五分」だ。本書のタイトルはそういう意味である。

泰史、妙子の挑戦の記録は、テレビ、新聞、雑誌などで取り上げられるが、挑戦者の家族の不安と苦悩は世に出ることはない。これまでも多くの挑戦者がこの世から去った。その挑戦者の家族、特に母親の「不安と心配」は計り知れないものだ。私とかみさんが、泰史に対して、そして妙子に加わってから、お互いが「いのち」とどのように向き合ってきたかをできるだけ正確に記録しておくことは、多くの挑戦者の家族の思いでもあったと考えられた。

泰史が誕生して以来今日まで、私とかみさんは、親としてとともに一人の人間として、喜び、怒り、苦しみをさらけ出して育て、生きてきたつもりだ。泰史もまた自らが目指した目的に向かって一直線で生き抜いてきた。妙子と一緒にあってからは、山への挑戦という目標を中心に据えつつも、家族・仲間・仕事・地域・環境・政治など、生きるうえで避けて通れない課題に対しても真摯に考え、対応する努力を忘れていない。山へ挑戦する姿勢は孤高だが、日常生活では、「自分さえよければ」という態度とは無縁である。

私とかみさん、そして泰史と妙子が貫いているこうした生き方は今も変わらないし、これからも変わることはないと思う。

本書を読んだ方がどのような感想を持つかはわからない。「親バカだ」と批判されても甘んじて受ける。しかし、親と子が、たった一つしかない「いのち」とどのように向き合ってきたか、現に向き合っているかを知って、「いのち」と人生を考え一助にいただければ幸いである。

私が「いのち」にとりわけ敏感なのは、13 歳の時、東京大空襲で見た幼い子どもたちの焼死体と、その

仇を必ず討つと爆弾を抱えてグライダーでアメリカ空母に突っ込む特攻隊予備軍の訓練に志願した経験を持っているからだ。東京大空襲や子どもにまで特攻隊を志願させるような事態は二度と繰り返してはならない。本書で「戦争と平和」についてあえて書いたのは、その痛恨の思いがあるからだ。

本書は、自費出版した『五分五分』を読んで、「親が子のいのちと向き合って生きる日々の記録は、親子の関係を見つめ直すとともに、絆とは何かについて考えるうえで貴重な羅針盤となる。ぜひ出版したい」と言って、ご努力いただいた山と溪谷社の神長幹雄さんがいなければできなかった。冒頭に記して、心からお礼申し上げたい。

あとがき

本書を編集していた 3 月 11 日、東日本大震災が起きた。多くの「いのち」が一瞬にして奪われた。これまで発生した津波の予測をもとに築いたという防波堤も一瞬にして破壊された。66 年前の 3 月 10 日、米軍の大空襲で東京は焼け野原となった。テレビで放映される東北各地の津波被災地は、あの焼野原の東京と同じだった。

一方、地震と津波で福島第一原子力発電所が大変な被害を受けた。多くの住民が見えない放射能で危険にさらされた。そして何万頭もの牛など家畜の「いのち」が犠牲になった。原子力の恐ろしさは日本が一番知っているはずだ。1945（昭和 20）年、広島、長崎に落とされた原子爆弾で一瞬にして数十万人の「いのち」が奪われた。66 年経った今も苦しんでいる人たちがいる。私たちはこの危険な原子力を平和利用と称して、のほほんとして生きてきた。そのつけが今の恐怖と不安なのだ。私は、原爆で「いのち」を奪われた人たちからの「忘れるな、原爆を」の「叫び」ではないのかと思う。

もちろん原子力の恩恵にあずかってきたのは私も同じだ。電気が止まれば「いのち」が止まる生活をしている。

私は本書で「いのち」をテーマに書いてきた。今回の地震・津波、そして原発・放射能、私たちはこれから自分たちのかけがえのない「いのち」とどう向き合

って生きるのかが、問われていると思う。

本書の発行にあたっては、実に多くのみなさんのお世話になり、協力をいただいた。心から感謝したい。とくに福島清さんにはお世話になった。福島さんは、毎日新聞東京本社活版部出身。印刷部の私と職場は違うが労働組合活動では25年、定年後を合わせると55年のお付き合いになる。私は定年後、居酒屋チェーン店の雇われ社長として東京・渋谷のど真ん中で暴力団とも向き合って仕事をした。福島さんは定年後、山野美容芸術短期大学の事務局長を6年勤めた。請われたとはいえ、美容師養成の短大という、およそそれまでの福島さんからは想像もできない仕事に変わった。私と福島さんの第二の人生はゼロからの出発だった。苦勞をしたが、その苦勞が今の私と福島さんの人生の大きな力になっているのだと思う。泰史との関係でいえば、幼いころ、私の一家と一緒に

御宿や逗子へ海水浴に行つて以来だ。何よりも私の泰史に対する思いを知り、泰史の力強い応援者だ。この福島さんが「編集はまかせろ」と言ってくれた。この書が世に出ることができたのも福島さんおかげだと感謝している。

最後になるが、泰史と妙子は本書を出版することに必ずしも賛成ではなかった。奥多摩に住み、ひたすら山に向き合う生活をそっと見守ってほしいと思っているからだ。その気持ちは、私とかみさんと家族、妙子の家族も同じだと思う。それでも私があえて出版しようと書いたことに対して、事実関係を私の思い違いなどについて率直に意見を言ってくれた。それは80歳を前にした私に対する夫孝行、親孝行だと受け止めている。そんな家族の気持ちを知って嬉しかった。心から感謝したい。

2011年6月



昭和35年を西暦に換算しながら何度も考えた。すると、今日が結婚55年目だと気が付いた。便座に座ったまま、とめどなく涙が流れた。トイレットペーパーで何度も何度もぬぐった。

結婚してから55年を経た今、長女・明子夫婦がいて2人の孫がいる。日本を代表する登山家と言われる泰史と妙子夫婦がいる。私とかあちゃんが育てたのだ。結婚したとき、お互いに何と呼び合ったかは思い出せない。しかし明子が生まれてからは、「かあちゃん」「とうちゃん」だった。かあちゃんは時に「あんた」といい、私は外では「かみさん」と呼んできた。でも、「かあちゃん」と呼んだ回数が一番多いと思う。ここでは「かあちゃん」と書く。

かあちゃんは「はらはらドキドキ」の人生を歩みながら、娘の家族と泰史夫婦を見守り続けた。思えば子育てはすべてかあちゃん任せだった。

明子と泰史の「父親参観日」に参加した記憶はない。明子の高校進学と卒業後の進路についてもタッチしていない。泰史が高校卒業時に、進学も就職もないというので、高校から呼び出された。学校に出かけたかあちゃんは担任の先生から「親として無責任だ」と責められた。

11月15日朝。

病院に向かう前に自宅トイレに座った。

「いよいよ別れの時を迎えるのかな……」。

そんなことを考えていた。

「結婚して何年になるのだろうか……」と、

ふと思った。

何気なくトイレのカレンダーを見た。

11月15日のところに小さな丸印がついていた。

「今日なんだ」。

その時、かあちゃんは、「高校を卒業する 18 歳になれば、自分の進路は決められるはずです。麻薬や犯罪ではなく、山に登りたいという息子を止められませんか」と言って帰ってきた。

30 年前の 1984 年 2 月 23 日、かあちゃんは、くも膜下出血で倒れた。医師から「死を覚悟してください」と言われた。だが見事に快復した。退院 3 日後に 46 歳の誕生日を迎えた。その時、かあちゃんは、友人たちに次のような礼状を書いて、新たな人生を歩みだした。

厳しい冬も去り、遅いとは言え、春が確実にやって来ました。皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。今年の冬は私達にとって長い辛い冬でした。4 月 3 日に 41 日間の病院での「生と死」の闘いのすえ、「生還」する事が出来ました。これも皆様方のおかげと感謝しています。

自分の足で我が家に帰る事を何度夢見た事でしょう。これが実現できた感激は生涯忘れる事は出来ません。

退院して一週間後の 4 月 9 日に 46 歳の誕生日を迎えました。毎年なんとなく迎える「4 月 9 日」も今年は違います。私は「生きている」——。このことを身体で感じました。来年も再来年も……元気でこの日を迎えたいと思います。

2 月 23 日、「くも膜下出血」で倒れてから今日まで私は恵まれていました。良き隣人、知人、病院の先生、親身で親切に看護して下さいました看護婦さん。私は多くの方々によって助けられました。この事を私は忘れる事は出来ません。

またこの間、私は「家族」とは何かについても考えさせられました。私は今度の「出来事」をこれからの生き方を考える良い機会にいたします。今日から私は「頭を丸めての一からの出直し」です。ヨチヨチ歩きの私を見守って下さい。

1984 年 4 月 9 日 (46 歳誕生日)

山野井孝子

*

今度も、30 年前の奇跡が起きて、かあちゃんが同じような礼状を書くことを願った。だが、それはかなわなかった。私は、快復したかあちゃんに「これから



1960 (昭和 35) 年 11 月 15 日、結婚式



かあちゃん最後の写真=2015 年 10 月 29 日、瑞牆山荘前にて。左から山野井孝有、長瀧正昭 (孝子の弟)、孝子、妙子 (泰史の妻)、泰史 (長男)、大田口明子 (長女) 孝子はこの日から約半月後の 11 月 16 日、死去した

は、おまけの人生だから」とブレーキを掛けた。しかし、かあちゃんのあれからの 30 年間は、本当に充実した人生だったと思う。

頭の手術を終えて麻酔が覚めたとき、ヨセミテを目指して渡米直前だった泰史が、母を残して行くことに悩んでいるのを見たかあちゃんは、「私は大丈夫だからお前はアメリカに行きなさい」と言った。もし母親のこの言葉がなければ、登山家・山野井泰史はなかったと思う。泰史が日本一の登山家ならば、かあちゃんは日本一の母親であり、日本一の女性だと心底から思う。

病院に着いた私はかあちゃんの手を握り、「今日が結婚記念日だよ。55 年間ありがとう」と、強く手を握りしめた。この日は奇跡が起こったように元気だ

った。孫娘に「未来ちゃん成人式を迎えるまで……。ごめんね」。私の妹の子どもが「おばさん、子どもが埼玉県から賞がもらえるかもしれないよ」と話すと、ベッドの上で、両腕で丸印をつくって、「よかったね」と言った。

私は、もしかしたらもう一度家に帰ることができるかも知れないと思った。泰史は、「おやじ、しばらくかあちゃんの傍に居てやって」と言って、みんなし

て病室を出ていった。

私は最後の「ありがとう」をかあちゃんの耳の傍で少し大きな声で言った。かあちゃんは目をまたたかせた。そして、かあちゃんの人生は、翌日終わった。

かあちゃん、55年間ありがとう。

かあちゃん、日本一のかあちゃん、さようなら。

2015年12月20日



『戦争はいけません』

元従軍看護婦戸田ノブ99歳の思い

～贈呈にあたって～

私は「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」を広く知ってもらうために、宮澤弘幸の妹・秋間美江子さんを励ましながら35年間取り組んできました。

8年前の2012年10月に札幌で開かれた「秋間美江子さんを励ます会」で山本玉樹さんと偶然お会いしました。山本さんは私より長く40年間もこの事件の真相を糾すために、上田誠吉弁護士と共に頑張ってくられた方でした。それからは、一人ではなく多くの仲間と共に運動を続けて全国的に広がり、朝日、毎日、道新、さらにNHKも数回にわたり取材して、全国放送されました。そして私たちは12月8日には札幌・北大で2月22日は東京・常盤寺で途切れることなく集会を開いてきました。

「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」に取り組んでいるさなかの2015年11月に96歳の元従軍看護婦・戸田ノブさんの取材に立ち会いました。その時、戸田さんは何度も「戦争はいけません」の言葉を繰り返していたことが忘れられませんでした。

安倍政権が戦争へとまっしぐらに暴走している今、私はこの96歳の元従軍看護婦さんの「戦争はいけません」の思いを戦争体験者の一人として書き残したいと思いました。そして、2018年12月に『戦争はいけません—元従軍看護婦戸田ノブ99歳の思い』を、戸田ノブさんの知人で私の友人の後藤眞理子さんとの共著で自費出版致しました。

この本はボルダーに住むスパイとされた宮澤弘幸の妹・秋間美江子さんと、秋間さんの友人たちにも贈らせていただいたところ、美江子さんから「この本は多くの人に読んでほしい」との話がありました。そこで、今日の集いに参加した皆様にぜひお読みいただきたく、お贈りさせていただきます。

当時84歳だった私と、がん手術後の不安を抱えた後藤さんにとって、戸田さんの体験と思いを正確にまとめ、本にすることは、初めてのことであり、時間ばかりが過ぎていきましたが、多くのみなさんの励ましで刊行にこぎつけることができました。

もとより、研究者でも歴史家でもありませんので、まだまだ調査と分析が不足しているかも知れません。従いまして、ご一読の上、感想とともに、ご意見や事実関係についてのご指摘などを、山野井までお寄せください。お願いします。

偶然ではありますが、戸田ノブさんと宮澤弘幸さんは同年生まれです。

戸田ノブさん 1919年2月26日生まれ

宮澤弘幸さん 1919年8月8日生まれ

宮澤弘幸さんがスパイ容疑で検された 1941 年 12 月 8 日、戸田ノブさんは、中国の陸軍病院で、戦場で傷ついた兵士の看護にあたっていました。この時、2人は22歳。戦争で「青春を奪われた」のです。

なお、戸田ノブさんは昨年11月2日、100歳で逝かれました。

戸田ノブさんの「戦争はいけません」の叫びは、この会場にお集りの皆さんと同じだと思います。

さらに偶然が続きます。「アベ政治は許さない」の

スローガンを揮毫された金子兜太さんも、同じ1919年の9月23日生まれで、2018年2月20日に亡くなりました。もし宮澤弘幸さんが戸田ノブさんや金子兜太さんのように最近まで生き抜いて、自ら体験された「スパイ冤罪事件」の残酷さを語り続けてくれたらと思わずにはられません。

「二度と繰り返してはいけません。戦争は！」

この思いを私たちは忘れてはなりません。

2020年2月22日

元陸軍看護婦語り継ぐ

97歳 中国に2度派遣

第二次世界大戦中に中国にあった陸軍病院へ2度派遣された元看護婦、戸田ノブさん(97)は神奈川県南足柄市に証言を後世に伝えようと、知人らが戸田さんからの聞き取りを進めている。陸軍看護婦の活動に関する資料はほとんど残されておらず、専門家は「体験者の証言や記録は貴重」と話す。

福島県出身の戸田さんは、ナイチンゲール(1820~1910年)や慈善事業家の瓜生岩(1829~97年)にあこがれ、看護婦になった。陸軍看護婦を募集していることを新聞で知り、「国のために役に立ちたい」と志願した。戸田さんによると、最初は中国山西省へ1941年4月から約2年半、2度目は44年7月から山東省の病院で勤務した。

山西省の病院にいた時のことだ。血だらけの兵士10人ほどが担ぎ込まれてきた。「水くれ」「水くれ」と叫ぶ兵士たち。軍医の指示で水を飲ませると、ある兵士の胸の傷から飲んだばかりの水があふれ出た。

兵士が亡くなると病院で火葬し、遺骨はまとめて日本に送った。「お世話になりました。女々しい」振る舞いはなかったでしょうか。親族からお礼の手紙が届くこともあった。過酷な環境だったが、戸田さんは「任期途中で日本に帰りたいとは一度も思わなかった」と振り返る。

2度目の派遣中の45年8月15日、病院で終戦を迎えたが、すぐには帰国できなかった。戸田さんが勤務していた病院の「復員記録」によると、この年の12月14日、患者に同行して現地を出発。列車やトラック、船を乗り継いで日本を目指した。途中で容体が悪化し、亡くなった人もいた。博多港に着き、祖国の土を踏んだのは46年4月4日だった。

こうした体験の記録を進めているのは、南足柄市にあった母子健康センターで戸田さんと同僚だった助産師の後藤眞理子さん(88)は南足柄市に、後藤さんの知人の山野井孝有さん(84)は千葉市に

戸田さんはそれまで、家族以外に体験を語ることはなかった。だが保管していた復員記録を3年前に初めて後藤さんに見せた戸田さんが「若いうちに体験を書き残しておけばよかった」ともらしたことをきっかけに、後藤さんが聞き取りを思い立ち、山野井さんと一緒に戸田さんが入居する高齢者施設に連うようになった。

山野井さんは「友人の間で『すごい体験だね』と話さただけで終わらせてはいけない。ぜひ記録に残したい」と語る。

大谷渡・関西大教授(日本近現代史)は「日本赤十字社が派遣した救護看護婦の記録は、日赤が戦後に編集した文獻である程度知ることができているが、陸軍病院の募集に個々に応じた看護婦の記録はほとんど残っていない。体験者の証言や記録は貴重だと話している。」

【福島祥】




●中国山西省の陸軍病院で働いていた当時の戸田さん(後列左から3人目)＝戸田さん提供●戸田さん(中央)の陸軍看護婦時代の体験を聞く後藤さん(左)と山野井さん(右)＝神奈川県南足柄市で、福島祥撮影

毎日新聞 2019年1月5日夕刊

「戦争はいけません」を贈呈した 方々からの感想（順不同）

◇秋間 実さん（東京都立大学名誉教授・哲学）

このたびはまことに感動的な、そして時宜にかなったご本『戦争はいけません——元従軍看護婦戸田ノブ 99歳の思い』（後藤眞理子様とのご共著）をお贈りくださりましてありがとうございます。ご芳情に心から篤くお礼申し上げます。

きのう・きょう息をひそめて読みふけり読みあげました。この上なく貴重なノブさまの数かずの証言を聞き出してこのようにりっぱな本にまとめてくださったことに感謝申し上げます。はじめて知ることばかりでした。そのつどのおどろき・感想はとても書ききれませんが、すべては「戦争はいけません」という思いに帰一します。老生（昭和の遺物いま 90歳）、何も出来ませんが、心あるみなさまと思い・怒りをともにしたいとねがいます。今後ともよろしく願いいたします。

本書は自費出版と伺いました。老生にも経験があります。その経費の一端にもと考え、失礼かもしれませんが、寸志を寄せさせてください。お納めください。

後藤さまにくれぐれもよろしくごあいさつを。
ご両所くれぐれもお大切におすごしください。

*

◇菊池博文さん（岩手県花巻市在住）

先日は「戦争はいけません～戸田ノブ99歳の思い」を送ってくださりありがとうございます。体調の悪い中、また奥様を失うという最大の悲しみを越えて、3年間も戸田さんの聞き取りや資料集めをなさるなど、使命感や正義感を土台にした意志の強さに驚きました。

私の父（95歳）も千島列島でソ連軍と戦い、蛸壺のような穴を掘ってその中に隠れ、戦車が来たら体当たりするという訓練などをしたそうです。また、ある時、訓練中に銃剣を落とし、全員で探して発見した後、その銃剣で腹を切れと上官から命じられたそうです。一瞬の内に人生が走馬灯のように蘇り、腹に

剣を突き刺そうとしたとき、命令した上官から止められ命拾いをしたとのことでした。

その後、父はその時の潔さが認められたのか、年齢が若くして数百人の中の数名しかなれなかった伍長という階級まで上がり終戦を迎えたとのこと。実際には終戦日の8月15日から一週間ほど戦いは続いていたそうです。

戦争中の悲惨さはもちろん、その後の極東の厳寒の中で強制労働をしいられるという捕虜生活も大変だったようです。

戸田ノブさんも私の父も「国のために」、「天皇陛下のために」命を捧げることが当たり前で、名誉なことだという教育を受け不幸な生活を余儀なくされました。本のタイトルと同じく父も「戦争は悲惨で、絶対にやってはならない」と言っていました。直接、戦争を体験した世代がだんだん少なくなり、真実を語る「語り部」がいなくなっていくことを思うと貴重な著書をまとめたことに改めて感服いたします。

私の読後の感想も一言でいえば、「戦争はいけない！」ということです。安倍政権の奢りに対しても同感です。日本の平和がどんどん危うくなっているように思います。しかし、その政権を認めているのは、多くの無関心層も含めて結局は国民です。

私は次代を担う小中学生、高校、大学生の子どもや青少年がもっと、戦争の惨さを知り、政治にも関心を持つように「子どもが自ら考える教育」をすることが大事だと思います。学校ではもちろんやっていることですが、「もっと！」です。

以前、広島に旅行した時、修学旅行を引率していた先生が数名の中学生に「こっちに集まれ」、「はい、チーズ」と原爆ドームを背景に記念写真を撮っていました。満面の笑顔に罪はありませんし、先生も悪気はないのですが、悲しい気持ちになりました。

自分に何ができるかわからないというのが現状ですが、私の住んでいる花巻市には小中学校併せて30校ありますので各校にこの本を1冊ずつ寄贈したいと考えています。

在庫が30冊ありましたなら送ってくださいますようお願いいたします。数が足りない時には、中学校分の11冊でも結構です。また、代金、送料の支払い方法についてもお知らせください。急ぎませんので、体調が良くなった時にお願いたします。

*

◇藤田修二さん（毎日新聞大阪OB）

『戦争はいけません』を拝読しました。山野井さん 86 歳の渾身の作です。もちろん後藤さんとの共著ですが、山野井さんの力がなければできなかった仕事ですね。

戸田さんの頭脳、記憶力の明晰さにも驚嘆しますが、この仕事を成し遂げた山野井さんの衰えないエネルギーと精神力、脳力にも感じ入るばかりです。

赤十字の従軍看護婦と別に陸海軍の従軍看護婦があったこと、従軍看護婦と兵たちとの間に恩給差別があったことを初めて知りました。

ちなみに、沖縄戦で男女の学生たちが動員され悲惨な目に遭ったのは別に、沖縄戦が組織的に終わった後も沖縄本島北部で 10 代の子供たちが、陸軍中野学校出身者によって組織され、ゲリラ戦を続けたことを、私は昨年に映画「沖縄スパイ戦史」（三上智恵監督）で初めて知りました。三上さんはご承知かもしれませんが毎日放送（大阪）から琉球朝日放送を経て独立、沖縄をテーマに映画を作り続けている人です。ありがとうございました。

*

◇金谷貞夫さん（山野井さんと同町内居住の友人）

前略

『戦争はいけません』拝読いたしました。労作と貴重な記録を精力的にまとめられたことに心から敬意を表します。

戦中派のわれわれ世代も自秋期を迎え、記憶も臙げになりつつありますが、改めて戦争のむごさを思い知らされました。ウジ、ノミ、虱、飢え、貧乏、思い出します。

貴兄が体験された 3 月 10 日の東京大空襲、私は 100 ㌾も離れた旭市（銚子の近く）に住んでいました。当時 10 歳、新聞紙の燃えカスが飛んできたことを鮮明に覚えています。

小さな農村、片道 2 ㌾の通学、防空頭巾が必需でした。校庭には、敵軍を模したワラ人形が備えられ、上級生は竹やりで刺す、銃剣術の訓練をしていました。鬼畜米英、支那ポコベン、チャンコロなど、日本人以外は下級民族だと教えられていたのです。

「欲しがりません勝までは」と、各家庭には金属品の供出を義務づけられ、私は学生服の金ボタンを提出しました。代わりに支給された瀬戸物のボタンは、すぐに糸がちぎれてしまいました。わが家では、銅製の茶釜があり、それは隠匿して供出せず、よそには言うなど口止めされていました。村内には香取航空基地という海軍の飛行場があり、ゼロ戦の飛行訓練が行われていました。そのためか、空襲警報の発令前に、九十九里沖の航空母艦から艦載機・グラマンの襲撃や、B29 から焼夷弾も落とされました。親類の叔父は、中支で敗戦を迎え、朝鮮まで帰国したが、途中で列車は方向を変え、シベリア抑留、結核を罹患、帰国間もなく死亡しました。妻（私のおば）は 65 年近い年月を戦争未亡人として一生を終えました。

私の心に、非戦の誓いが消えることはありません。

戸田ノブさんのヒューマンヒストリー、一気に読了しました。これが戦争の残酷さです。そして、後藤眞理子さんの取材（聞き取り）力、表現力にも佩服です。履歴を拝見すれば、助産婦として活躍した傍ら、自分史を刊行する行動派です。戸田さんの心を開かせた情熱も、平和主義からなのでしょうか。そうした彼女を発掘し、パートナーに選んだ貴兄の慧眼にも尊敬いたします。

後半の「証言と資料」。よくぞここまで探求されました。私は、歴史は庶民によってつくられるものだと思います。有名人、成功者の「私の履歴書」は、美談を並べただけのフィクションです。貴兄が収集された資料のなかから、真っ当な歴史がつけられるものでしょう。

私のプロフィールを少しのべます。1935 年 9 月 2 日、旭市鎌数（旧共和村）に、5 人兄弟の次男として生まれました。旧地主でしたが、敗戦、農地解放により小作地のほとんどを失い、敗戦は貧困のどん底でした。父（1901 生まれ）は、戦中、翼賛壮年団員として活動、戦後は公職追放、家族を養うために甘藷のでんぷん工場を創業、お蔭で私は大学へ行くことができました。しかし、貿易自由化でトウモロコシでんぷんが輸入されるようになり、家業は倒産しました。

私は、北大に進学、農業経済学科を選びましたが、学ばば学ぶほど日本農業に未来はなく、中小企業なら喰いはぐれはないと思い、国民金融公庫に就職しました。問題意識は、二重構造の底辺に落ちづけられ

ている中小企業の近代化に何らかの道筋がつけられないかというものでした。つまり、中小企業弱者論ではなく、その社会的存在意義を究明し、アイデンティティを確立したい思いでした。そんななかで、森清さんと知り合い、40 数年のお付き合いをしました。たまたま、上司に清成忠男（後に法政大学総長）さんが在籍し、啓発されました。日本におけるベンチャー企業を発掘した研究チームの一員でもありました。

私の中小企業論の原点は、シュマッハー「small is beautiful」です。つまり、「大規模時代のおわり」、アンチ体制といえます。

3月初旬、鎌倉に住んでいる北大時代の友人・森田邦彦が佐倉市のH農園を訪ねてきました。農林中金に勤めながら、鎌倉市腰越の里山の開発に反対する市民運動を展開し、市長に立候補した人材です（落選）。30年ぶりの邂逅でした。今は、有機農法を推進させる運動を展開しています。

その彼に、私の町内に「宮澤さんの冤罪事件」を究明しようとしている山野井さんがおられること、そしてその概要を紹介しました。そして、森田君は、small is beautifulの著者E・F・シュマッハー会の研究メンバーであつたのです。ご縁とは、不思議なものです。

私は貴兄より4年後輩、このところとみに体力が衰えています。散歩は、毎日6000歩をノルマにしていますが、肉体は日々老化、アンチエイジングはあり得ないそうですから、目標はソフトランディングですが、これも努力の処方箋がありません。

もっぱら、政治の墮落に憤りが増すばかりです。今年の初めには「覚醒と自覚の日待つわが余生」でしたが、最近「権力の肝は稀代の恥知らず」、そして「暴政に万狗吠ゆれど鉄面皮」、「自らが隷従なれば他人に強い」です。希望を捨てたわけではありません。今後ともよろしくご指導ください。 草々

*

◇長谷川綾さん（北海道新聞記者）

山野井さんが、聞き書きされた元従軍看護師・戸田ノブさんについての御本「戦争はいけません」を、本日落手しました。貴重な本をいただき、ありがとうございます。

山野井さんからのメールなどで、聞き書きの様子

は仄聞していましたが、自費出版であっても、本にまとめて後世に残すことは、記憶の継承として、非常に意義深いものだと思います。

お体はいかがですか。後藤さんもそうですが、けっして盤石ではない体調の中、書かれたことに敬意を表します。また、お会いしましょう。

*

◇赤石文子さん（横浜市在住）

「戦争はいけません」を読みました。いつ命を落としてもおかしくない苦難の連続の日々を生き抜いた戸田ノブさん99歳の言葉を聞きとって、このように文字に残し、一冊の本にしてくださった山野井さん、そして大切な本を私に手渡ししてくださった宮田さんに感謝します。

何があっても戦争はいけない、これが私の考えです。この本を読んでいて、心に残ったところはたくさんありました。その中で特に残っている文章を書き出しました。

「戦争はえらい人たちが始める。戦争で犠牲になるのは、いつも貧乏人だ。一般の人々はみんな仲良しだった」中国の人が別れる時、赤カブと白カブの種をくれた。

「辛かったのは病院で送還された患者さんが懸命の看護で元気になって、再び戦場に復帰するのを見送る時」戦いの場に送り戻すための看護。

「戦争を仕掛ける人は戦地には行きません。」「戦場で死んで傷を負って病気になっても『名誉と心得よ』というのだ。」名誉。

私の父は昭和4年生まれ、もし生きていれば91歳です。あまり戦争中のことを語りませんでした。とても印象に残って、思い出す話があります。

JR東神奈川駅近くに住んでいた父は、駅の東口と西口をつなぐ、線路の下を通る地下道の中に、たくさんの死体があったと言ったのです。怖かったと。

戸田ノブさんの「生きている限り『戦争はいけません』の思いを、多くの人たちに語り続けていきたい」という言葉。私たちの世代、若い世代に引き継いでいかなければと強く思いました。

「戦争処理をいいかげんにしている、女性を軽視している」このことも、本を読んで知りました。

詳細な記録を焼却したのは、証拠がなければ声を

大にして言えない弱みにつけこんでいるのですネ。戦時下にあり、死んでいく兵隊さんに、人間として尽くした従軍看護婦に対して、口封じしているように感じました。

私は、2001年9月11日の同時多発テロ後のアメリカのブッシュの考えに、大反対でした。日本人であることイコールブッシュの戦争に加担していると思ったのです。同時多発テロは、人間として許しがたい行為です。祈りました。約2800名の犠牲者。

けれど悲しみや憎しみは、新しい戦争を始めることでは、解決しない。誰も戦争をすることでは、癒されないし幸せにはなれないのです。そう思いました。

戦争とは何か。愛する者を失う。愛する者たちが罪のない人達の命を奪うために連れていかれ、自分の意思とは無関係に、人殺しを強要される。

今こそ、声を大にして、戦争はいけない、と言いつける必要があります。この本を読んで決して戦争体験を風化させてはならないと思いました。

「知らなかった」と言っておしまいにしないためにも。ありがとうございます。2冊しかない貴重なご本を1冊、私に下さって。大切にします。

(2020年9月8日 宮田貞夫さんの友人)

*

◇山田泰吉さん(横浜市在住)

読後感。どんなことを思うか。一人の人が生きることの凄さかな。ほんのチョットした差で生死が分かれたトンネルをくぐってきたような。今私は85歳。国民学校5年が敗戦。それでも福島は戦禍に遭うことはなかった。9人兄弟の8番目。長女は看護婦だったという。次男は中国へ兵隊で行った。しかしこの二人からその話が一つも聞いていない。長女は100歳で今は施設にいるようだ。仙台なのでなかなか行けない。次男は80歳で死んだ。惜しかったなあ。

聞き取りを纏めたものだからでしょうか、とても読み易いと思いました。特に敗戦後の引き揚げの時にメモを取っていた軍人の記録を基にした聞き取りは良いと思いました。

シリアやイエーメンなどの戦禍ではやり看護師など悲惨な思いをしているのではないだろうか。戦争とは“人を殺す”こと。人を殺すには相手を人と思っではいけない。鬼畜米英でなければならない。理不尽

だと思う。

障害者の支援教育に25年関わってきたが“障害”って誰が誰に障害になるのか。この言葉は適切と思えない。ハンディを持つ人を殺しても構わないという考えは“役立つ論”に立つ。役に立たない者は消しても良いというのは戦争に直結する。病んだ兵士を楽にしてあげる記述もあったが、新聞には“死ぬ権利も認めてほしい”という意見が寄せられた。大切なのは“死にたいと思ってしまうほど苦しむ人をどう支えるかだ”という意見が寄せられた」とあったが、過酷な戦争では通用しないだろう。

ハンディがあろうが、どんなに苦しむ病であろうと、生きる見通しを探る世であってほしい。

(2020年8月9日・宮田貞夫さん友人)

*

◇長澤 愛さま(イタリア在住・国営放送勤務)

初めまして。イタリアに住んでいるのですが、山野井通信でお父様の自費出版の「戦争はいけません」を知りました。

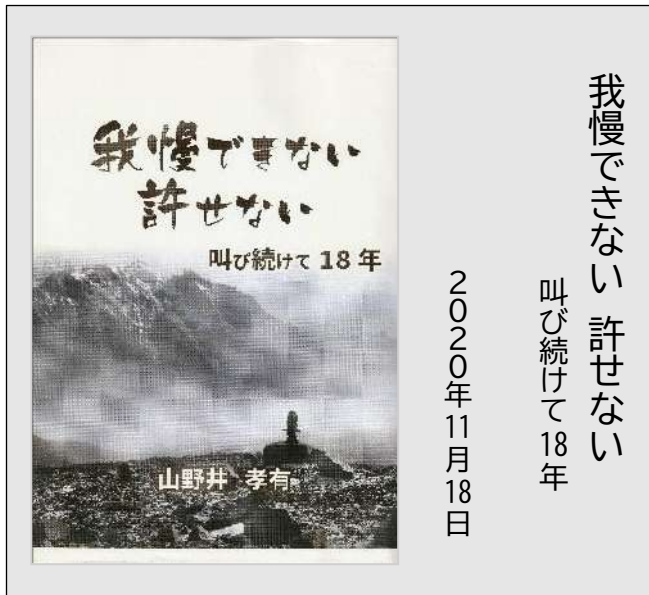
日本国内にいる時よりも海外で生活している方が平和の意味を深く考えるようになります。歳をとったせいもあるのですが、当たり前前かがみのことが当たり前でない現実を生きてきた人たちの話は必ず伝える必要があるのだと思うようになりました。

イタリアでは国営放送の歴史番組などを担当しているので、歴史と毎日向き合っています。日本のことも機会があれば伝えていきたいです。

贈呈していただけるとは、本当にびっくりしています。本当によろしいのでしょうか。何かの形で調査への貢献をさせていただきませんか？

実家の母親も満州で生まれおり、看護婦も経験しているので山野井さんの本を興味深く読んでもらえらると思います。私は次回帰省した時に読ませていただきます。お手数をおかけしますが、宝塚市の実家までお送りください。

私も息子さんのようではもちろんありませんが、山登りをします。去年彼がいかれたオルコ・バレーに今週末行ってきます。泰史さんが、もしイタリアで困ったことなどあるようでしたら、私の携帯番号をお伝えください。どうぞよろしく願いいたします。



はじめに

2020年2月22日、88歳となり、日本人男子の平均寿命(87.45歳)を超えました。人間のいのちに限りがある以上、その日がだんだん近づいていることだけは確かです。そんな思いに浸る日々の中で、昨年秋ごろ88歳の誕生日を目標にして「我慢できない許せない」と書き続けてきたことをまとめて本にしようと考えました。

73歳の2005年、『振りかえれば波乱』と題して、生い立ちからそれまでの人生をまとめた記録を自費出版しました。この自分史と並行して、2002年からは「我慢できない 許せない」と題して社会のさまざまな動きに対する怒りと身近で起きる出来事に対する思いを書き、メールで発信してきました。

2009年2月、77歳・古希の時、簡単な冊子にして友人たちに贈りました。その時、「これから先、何時まで生きられるか分かりません。しかし生きていく限りは『我慢できない 許せない』と叫び続けていきたいと思っています。私はこの『自由』を手放さないことを誓います」と書きました。

それから11年、私はこの自由を放棄することはありませんでした。そして、初めて「我慢できない 許せない」と書き始めてからは18年になるこの言葉を掲げて、叫び続けてきたことは間違っていなかったと思っています。

しかしながら賛同や意見などの返信がないことで不安になり、中断したこともありましたが、折にふれ

て「返事は出さないが楽しみにしている」との便りに接するとまた元気と勇気が出て、「よし、続けよう」と思ってきたのです。

*

安倍晋三首相が辞任しました。「安倍辞めろ！」と叫び続けてきたことが実現しました。本来ならこぶしを上げ「やったぞ！」と叫ぶところですが、何か気が抜けました。理由は私たちの「力」で倒したのではなく病気が理由だったからです。

この7月と8月、国会議事堂前に2回、1人で立ちました。この同じ場所で60年前に連日十数万人の労働者や学生、市民が「安保反対！」を叫び、そして岸首相を退陣させました。

静かな国会議事堂前に立って、その時の情景を思いながら、ここを10万人、20万人の労働者・学生・市民が取り囲むことはもうないのだろうか？ と考えました。

「安倍政権打倒」と叫びながらも、その運動はどうだったでしょうか。森友・加計・桜疑惑と、政権の不祥事が続きました。安倍内閣の支持率も30%台に落ちましたが、その一方、野党の支持率も上がりませんでした。国民は野党に期待していないからです。もし「森友・加計、桜」で、連日のように我々が国会議事堂を包囲し抗議していたら、安倍晋三を引きずり落とすことが出来たと思います。私自身の反省をこめてそう思います。

国民の命に係わるコロナ問題の国会でも、共産党は予算案に反対しましたが、その他の野党は賛成し、東京都知事選でも野党が事前に協議することなく宇都宮徳馬氏が立候補表明した後になって、立憲民主党と共産党がそれを追認する形でした。国民民主党はいち早く自主投票を決めてしまいました。

「野党共闘どうした！」と叫びたいと重ねて思います。野党が結束すれば世の中変わるのです。

香港をはじめ外国では、悪政に対しては、数十万、数百万の市民が声を上げスクラムを組んで結集しました。しかし、日本ではスケートの羽生選手の仙台で行われた祝賀パレードに11万人が、ラグビー選手の健闘をたたえるパレードには熱狂的な市民が沿道をうずめました。しかし次々に起こる疑惑隠しと戦争に向けて突っ走る安倍内閣に「我慢できない 許せない」と声を上げ結集する運動は起きませんでした。

今、日本は確実に戦争への道を歩んでいることは間違いありません。2019年に「令和」元号が始まった時、日の丸の小旗を振り、数万人が「天皇陛下万歳、天皇陛下万歳」と叫んでいました。この光景をテレビで見ながら背筋が寒くなるのを感じました。私の子供の頃、神社の境内や駅のホームで同じように出征兵士を送るときの光景とまったく同じでした。

さらに幕張メッセでは「武器展」が行われ、世界各国から武器商人が大勢詰めかけました。そしてあの中東に「軍艦」と航空機が派遣されています。

昔、若者が日の丸の鉢巻きを締め片道だけの燃料を積んで特攻機に乗り飛び立ちました。私は12歳で高等小学校の時、学徒動員で日の丸の鉢巻きを巻き軍需工場の特攻機の部品を作っていました。日の丸の旗の下で多くの若者が命を失いました。

トランプが一声かければ日本は戦闘機100機を購入しました。国防予算は年々増額されています。この国防費を河川の堤防の補修に回していれば多くの国民のいのちが救えたのです。

＊

2002年に「我慢できない 許せない」を書き始めた時の内閣総理大臣は小泉純一郎でした。以後、小泉第2次、同第3次、安倍晋三第1次、福田康夫、麻生太郎、鳩山由紀夫、菅直人、野田佳彦、安倍第2次、同第3次、同第4次と続き、今年8月、安倍晋三は再び病気を理由にして政権を投げ出しました。

そして出てきたのが秋田出身で「苦勞人」と自称する菅義偉です。この首相、マスコミ分断を画策し、早速、学問の自由に立ち向かってきました。これは戦前と同じです。

＊

本書の編集にあたって、すべての文書を読み直しました。削除したい、訂正したい箇所が多々ありましたが、当時考え思ったことを尊重して原文通りとしました。

生ある限り引き続き「戦争に反対」し「働く者が主人公の社会を！」の思いを貫くために「我慢できない 許せない」と叫び続けたいと考えています。

あとがき

—お世話になったすべての皆様に
感謝を込めて—

2002年から書き続けてきた「我慢できない 許せない」は今年で18年になりました。2009年2月22日の77歳の「喜寿」の祝いの集いで、それまでに書いたものを冊子にして配布しました。表題は「我慢できない 許せない」ですが、内容は表題に沿ったものだけでなく、「感動」「感激」など、私がある時、心に感じてきたことも合わせて書いてきました。

中華人民共和国は社会主義国なのか？

意見や疑問などはほとんどありませんでしたが、最も反響があったのは2005年1月19日の「中華人民共和国は社会主義国ではなかったのか？」でした。すぐに、Mさんから「中国は今社会主義国を目指し建設途上だ。わずかな時間の見聞きだけでそのような見方をするのは誤りだ。共産党の方針をしっかりと読んでいればそのような疑問が起こるはずがない」「これからの5年、10年の中国の社会主義国を目指す発展を見ればそれが実証される。勉強不足だ」と。

あまりにも多くの反論に自分の考えが間違いか？と不安になりましたが、どう考えても警官が無銭飲食し、棍棒を持って物売りを追い回す姿、さらに多くの農民が家族と離れ離れになって北京で働く「農民工」と言われる農民の貧しい生活を見て「社会主義とは労働者や農民が主人公」ではなかったのか？私の目には社会主義国を目指す国とは考えられませんでした。

中国を訪問したのは2004年10月で「国慶節」の時でした。社会主義国を目指す中国旅行に胸をときめかしていたので、この目で見た中国に驚いたのです。同じ時期に中国を訪れた毎日新聞記者のAさんは年賀状で私と同じ感想を書いていました。

「共産党の方針をしっかりと読め」という返信があったので、2004年1月の日本共産党23回党大会の綱領を読みました。「社会主義国をめざす新しい探求が開始された国として、中国、ベトナム、キューバと友好関係を強めていく」と、中国を高く評価した「綱領」が全員一致で採択されました。しかし疑問が続き

ましたので、「胡錦濤中華人民共和国主席来日」(2008年5月10日)と書き続けてきました。

中国訪問から16年、2020年1月に行われた日本共産党第28回大会では、中国に関する「社会主義をめざす新しい探求が開始された国」を綱領から削除することを全員一致で採択しました。16年前の私の主張が正しかったことを確認しましたが、「働く者が主人公」である社会主義実現への道が遠くなったことに一抹の寂しさを感じました。できればゲバラの国キューバに行ってみたいのですが、この歳では無理かもしれません。

その後はまた返信がなかったこともあって、一時中断しました。すると2008年に戸塚章介さん、2009年に名古屋の磯貝佳身さんから、「最近、山野井さんから『我慢できない 許せない』の送信がないが、身体でも悪いのか?」と心配のメールがきた。そんなメールは磯貝さんだけではありませんでした。うれしくなりました。返信がないが読んでくれているんだ!と。私は再び「我慢できない 許せない」を書く元気が出て書いてきました。

高等小学校時代に学徒動員

2005年、自分史『振りかえれば波乱—73年の人生とこれから』を500冊出版しました。「我慢できない 許せない」を手にする人の多くは「振り返れば波乱」を読んでいないか、記憶に残っていないと思います。そこで本書の第一部で紹介した「はじめに」と目次に加えて、少年時代からこれまでの人生の思い出のいくつかを記しておきます。

1944年に入学した高等小学校に在学した2年間は学徒動員で学校へはほとんど行けませんでした。敗戦後の1946年に卒業すると、軍需工場が自転車を作る会社になったので、その塗装工として働き、入社半年後、労働組合結成に参加しました。「働く者こそ主人公の社会を」のスタートでした。

その後、旋盤工などを経た後、丸の内警察にいた兄の伝手で、毎日新聞社印刷局に入社しました。入社時に「二度と組合活動はしません」と誓約しましたが、ユニオンショップでしたので、正社員に採用されると同時に労働組合員となり、青年部委員、支部の代表委員に選ばれました。当時の印刷職場はレッド・パージ直後で、職場は沈滞し労働強化に加えて、40度の

高温で汗まみれになる職場環境でした。作業着は持参した学生服、古い背広などで、汗が吹き出し、インキで汚れた作業着を自分で洗濯する石鹸は家庭でも配給制だったので大変でした。

そこで私は「会社に石鹸支給を要求しよう」「塩分補給に塩を要求しよう」と職場の人たちに呼びかけ、毎日新聞労組で初めての職場交渉が行われました。こうした職場活動を出発点に、本部書記長に就任し、それから本部書記長で組合役員をやめるまで21年間、途切れることなく組合活動を続けました。

私が入社して3年後に入社したのが戸塚章介さんでした。私が本部青年部長で戸塚さんが東京支部青年部書記だった時、週刊誌「サンデー毎日」印刷拒否闘争を起こしました。地下の新聞用紙倉庫で「民族独立行動隊の歌」を歌い、座り込んだのです。当時の平田満夫委員長など組合幹部が「何とか闘争を収めて」と頭を下げに来ました。安保闘争後は、会社の労働組合対策が陰湿かつ攻撃的になり職場が分断されました。輪転機の轟音が響く地下の便所には「山野井、戸塚を殺せ!」と落書きされる事態も起きました。しかし私たちは闘いをやめませんでした。

「陸軍幼年学校卒」の黒岩義之委員長と

長い組合活動の中で、1970年から4年間の本部書記長時代は、緊張した時代でしたが、充実した4年間でもありました。前半2年の委員長は黒岩義之さんで「山さん、任せたよ」が口癖でした。そして会社と妥協することがなく、闘い続けました。

2004(平成16)年正月、元活版職場の龍野正徳さんから「皆さんのおかげで無事定年を迎えることが出来ました。春にはおじいちゃんになる予定です」と書かれたうれしい年賀状を受け取りました。婚約者の女性に関する問い合わせに不当な回答をした会社に怒った龍野さんは酔って活版職場に来て消火器を壊したことなどを理由に解雇通告を受けたのです。黒岩委員長は「この程度で解雇とは何事か!」と怒り、サンデー毎日職場選出の教宣部長・男沢秀夫さんと一緒に、解雇理由の杜撰さを徹底的に調査して反撃し、撤回させました。この龍野君解雇撤回闘争から48年になります。たった一人の労働者の解雇も許さなかったことは、毎日新聞労組の誇りです。

黒岩委員長はまた「真実の報道を守る」立場から、

紙面問題に熱心に取り組みました。中国問題では田中香苗会長との交渉で妥協せず追及し、東京都知事選の候補の広告の扱いが不平等だと抗議しました。新聞にとって命ともいえる紙面問題に取り組んだ黒岩委員長の姿勢は、強く印象に残っています。

2009年10月、その黒岩さんから、突然連絡がきました。膵臓がんが末期となり、東京女子医大の緩和病棟に入院されていたのです。福島清さんと一緒に見舞うと、数人が病室に詰めかけていました。異様な雰囲気、一瞬遅かったかと思いましたが、しばらく待たされて病室に入りました。黒岩さんはしっかりした言葉で「今来ていたのは廣島陸軍幼年学校時代の戦友だよ」と言いました。そして「山さん、福さんにどうしても了解してほしいことがある。2日前、キリスト教の洗礼を受けたことを、直接伝えたかった」と言ったのです。黒岩さんにとって洗礼を受けることは、労働組合活動と決別することを意味すると考え、そのことを厳しい闘いをともにした私に伝え、了解を求めたのだったのかも知れません。

別れるとき「これからどうするのだ」と聞かれた私は、「酒でも飲んで帰る」と答えました。私が酒を飲まないのを知っている黒岩さんは笑っていましたが、私からの別れの言葉として受け止めてくれたと思っています。それが最後でした。

黒岩さんの葬儀は11月2日、東京文京区の「東京カテドラル聖マリア大聖堂・カトリック関口教会」で行われ、陸軍幼年学校時代の仲間が大勢参加していました。陸軍幼年学校とは選抜した13歳から15歳未満男子を将校候補として育成する全寮制の学校です。黒岩さんは父親が陸軍中将だったため、その道に進んだのでしようが、お国のためにとの同じ志を抱いていても、私とは違った超エリートでした。

しかし敗戦後は東大で学び、毎日新聞の入社試験に落ちたため、進学校・千葉東高校で高校教師になりました。そこでは「赤岩先生」と呼ばれるほどの民主的な教育を行い、一年後毎日新聞に臨時社員として入社したこともあって、「闘う委員長」になったのだと思います。

毎日新聞労組、分裂の危機に

1972年から志道良太委員長との後半の2年間は、議事規則改正問題をめぐる毎日新聞労組の「分裂騒

動」に終始しました。労働組合の分裂の多くは労働組合の団結力を弱めたい会社の策動によって起こります。毎日新聞労組のこの時の混乱も文字通り会社側の策動そのものの結果でした。議事規則改正を討議する箱根の大会には、会場近くに会社労務課の「前進基地」が設けられて指令を出していました。会社の意を体して改正に反対する大会代議員が一室にこもって大会成立を妨害したり、本部役員6人が辞表を出して執行部機能をマヒさせました。

大会は、休憩の連続となり、箱根観光旅館、強羅ホテル、読売ランドと会場を変更しての開会となりました。読売ランドの際は、大阪からバス3台で動員された傍聴者と東京本社労務課が集めた傍聴者も合流して異様な雰囲気の連続でした。私は2日間寝られず、大会場の椅子を並べ横になるだけでした。

これはもう「執行部総辞職しかないか」と考えた時、それを察知した組織部長の大住広人さんは「おやじ、早まるな！」と檄を飛ばしてくれました。執行部と大会議員の間で何度も労働組合の原則を守り、会社の分裂攻撃をはねのける話し合いがもたれました。そんな苦労の結果、組合の分裂が避けられたのです。この時労働組合が分裂していたら毎日新聞の経営危機を乗り越えることはできなかったでしょう。あれから47年、当時のことを知る社員はいません。先の戦争で230万人が死んだこと知る国民がいないことと重なります。今、新聞経営は危機を迎えています。この時こそ労働組合が「国民の知る権利にこたえ真実の報道」をしっかりと主張していかなければならないと思います。

「職務分類制度＝職分制」を廃止に

分裂騒ぎで多くのエネルギーと組合財政を使いましたが、また多くの勝利を得ました。「ベトナム反戦映画」を休憩室で上映した中部本社印刷局の磯貝佳身さんと東京本社印刷局の戸塚章介さんに対する会社の「けん責」処分に反対する闘いでは、東京都労働委員会、さらに東京地方裁判所で完全勝利し、解決金2600万円を勝ち取りました。この裁判と並行して会社の差別政策も暴露され、平田満夫・労務総務担当役員が解任されました。社員を徹底して差別支配する「職務分類制度＝職分制」が廃止され、差別されていた組合員が職制に登用されるようになりま

した。

その後、印刷職場で対立した相手の中心人物の市川八郎さんは印刷部副部長として、私は技術担当課長として、一緒になって、新聞印刷の技術革新、カラー印刷実現に取り組みました。その市川さんは、後述するように、定年退職後の再就職の世話をしてくれました。

私は、本部書記長時代の4年間、何度も臨時中央大会を招集しました。全国から集まった大会代議員の前で話す時、私の後ろにはいつも「新聞労連 毎日新聞労組」の真っ赤な組合旗がありました。組合旗は、労働組合が団結することの大切さを示す象徴です。しかし毎日労組関連の行事に20年ほど前に何度か参加しましたが、毎日新聞の社旗が飾られても団結の組合旗が飾られたことはありません。毎日新聞労組は、常にこの真っ赤の組合旗と一緒にあってほしいと心から思います。

私の活動は毎日新聞労組内でしたが、戸塚さんは上部団体の新聞労連から東京都労働委員になるなど、社会的に高く評価される活動を展開しました。2002年には千葉県・松戸市長選に立候補しました。私も宣伝カーの上に立ち「戸塚章介さんをよろしく」とマイクを握りました。(惜しくも3位でしたが)。

毎日新聞での出発点である印刷職場とともに、東京・大阪・小倉・名古屋に支部を置く毎日新聞労組で、多くの闘う仲間を得ることができました。しかし最近では毎年のように、かつて闘った仲間たちの訃報が届くようになりました。一抹の寂しさを感じますが、生きている限りは、初心を忘れずに生きていきたいと心を新たにしている日々です。

かみさん「孝子」に先立たれる

この自分史発行以後15年の波乱の人生で、どうしても書いておかなければならないことは、繰り返される個所もありますが、苦楽を共にしたかみさん・孝子との別れです。

かみさんが最初にクモ膜下出血で倒れたのは、1984年2月23日。担当医は「①再出血で死②後遺症で寝たきりに③後遺症が残るが生活できる。だがいずれも完治は望めない」と言いました。その時、かみさんが奇跡的に完治できたら、かみさんを日本全国を旅に連れていくと誓いました。かみさんは完治しま

した。それから23年の月日をかけ北は礼文島、南は沖縄まで、屋久島を除きすべてを回りました。

私が労働運動と戦争反対の活動に集中できたのは、かみさんの理解と協力があったからです。しかしいずれの日か必ず別れの日が来ます。そんな思いから、12年前の2008年11月15日の私たちの結婚記念日に長女・明子と長男・泰史に対して「遺言書」を書きました。76歳の時でした。

泰史の登山の安全を願って1995年から始めた自宅から成田山新勝寺への30[㌾]を歩いての初詣は、2015年まで続けました。元旦朝、大雨が降っても大風が吹きまくっても歩きました。孫が小学校に入学してからは孫も一緒に。2015年元旦は私とかみさん、孫2人の4人で成田山新勝寺の門前に立ちました。正月の初詣には30万人の人出ですが、歩いて30[㌾]を20回(途中1回だけ体調悪くして休む)続けたのは、私とかみさんだけだと思います。静かな誇りです。

そして2015年11月、今度は「再起を！」の願いが届かず、かみさんとの永遠の別れとなりました。その時の思いは、「かあちゃん、55年間ありがとう」に記した通りです。

『戦争はいけません』を出版

18年間のうち、2018年は一度も「我慢できない 許せない」を書きませんでした。思えばこの年は、友人の後藤真理子さんと一緒に、『戦争はいけません—従軍看護婦戸田ノブ 99歳の思い』出版に集中していたからでした。2015年11月2日、元従軍看護婦・戸田ノブさんと初めてお会いしました。その日は、戸田ノブさんが共同通信の取材に応じた時でした。ノブさんは質問に答える中で、何度も「戦争はいけません」と平和への思いを語りました。それが忘れられなくて、帰宅後、かみさんに話すと「ぜひ書いたら」と言ってくれました。それから13日後、かみさんは亡くなりました。そして3年後の2018年12月に出版することができました。そこで2018年の「我慢できない 許せない」として、同書発行の経過を記した「あとがき」を掲載することにしました。

『戦争はいけません』への反響は今なお続いています。毎日新聞で紹介されたこともあります。泰史がブログ「山野井通信」で紹介してくれたからでもあります。出版して間もなく、岩手県花巻市の菊池さん

から『戦争はいけません』を読みました。戦争を知らない若者に是非読ませたい。花巻市の小中学校に贈呈したいので31冊購入したい」と連絡がきました。今年2020年の夏には、横浜と立川の方から「読んでみたい」との連絡があり、さらに読んだ方から「この方に送って下さい」と要請されました。こうした連鎖で30冊以上を贈りました。読んだ方からは感想文が届きます。「私の母は日赤従軍看護婦でした。陸軍看護婦の方も大勢いたのですね」と、お母さんの従軍看護婦時代の写真と手記を送って頂きました。

「あとがき」を書いている時、電話がありました。「私の父は衛生兵で戸田ノブさんと『兗州陸軍病院』で一緒でした」と。そして戦友会名簿には「戸田ノブ・伝染病病棟勤務」と記載されているとのことでした。あの戦争はまだ終わっていないのです。『戦争はいけません』を発行して良かったと思います。

苦手の漢字はパソコン操作で克服

私は漢字を書くことが苦手です。しかしなぜか記憶力では負けたことがありません。これはささやかな自慢です。本部書記長時代、会社との3時間もの団交の一問一答をほぼ正確に再現して報告できたのもそのおかげです。しかし世の中大きな変化が起きました。ワープロからパソコンです。何とか操作できるようになって以後は、しゃべるようにただただキーを打ち続けました。そして、これまでに自分史『振りかえれば波乱』(2005年)、『我慢できない 許せない』(初版・2009年)、『五分五分—山野井泰史・妙子の「いのち」と向き合って生きる』(2010年)、これをベースにした『いのち五分五分』(山と溪谷社。2011年)、『宮澤・レーン「スパイ冤罪事件」引き裂かれた青春』(2014年、『登山時報』連載記事を冊子化)、『戦争はいけません—元従軍看護婦戸田ノブ99歳の思い』(2018年)と出版を続けてきました。

また、友人・後藤真理子さんの『いのちに向き合って一助産婦・真理子の半世紀』制作・出版を応援しました。かあちゃん・孝子が亡くなった時は『かあちゃんありがとう』と題した冊子を発行しました。書くことが最も苦手の私がこれほどの量を書き、出版できたのは、飛躍的に発展したパソコンのおかげですが、それよりも私の尻を叩いて「書け、書け」と力を貸してくれた60年来の毎日新聞後輩の友人・福島清さん

の力なくしてはできませんでした。最近、自慢の記憶力の衰えを感じていますが、それでも「我慢できない 許せない」が続く以上は、書き続けていくつもりです。

「いのち五分五分」を読んだ方から

2019年暮、『いのち五分五分』を読まれた方からメールが届きました。うれしい内容で感激しました。要旨を紹介します。

突然のメール失礼します。神奈川県に住んでいる三橋健一と申します。歳は38歳です。この度、山野井泰史さんのブログでお父様が本を書いていると知り、『いのち五分五分』を古本(お恥ずかしながら)で購入させていただき、読ませていただきました。自分は10年程前から脳脊髄液減少症という病気を患い、現在も治療中です。そんな中つい昨日入院し4度目の手術を受けました。

今まで大変影響を受けた山野井泰史さんの知らなかった部分や、お父様お母様の気持ちや心の有り方に変化を感じました。何度も入院してはそのつまらない時間の過ごし方にいつも悩まされてきましたが、今回この本を読ませていただいたおかげで大変救われました。そして自分のいのちについても真面目に考えさせられました。今の自分に出来ることは限られるかもしれませんが、前を向いて出来る限り全力で生きていきたいと思っております。ありがとうございました。

追伸 山野井さんのブログで元従軍看護婦の方の本を出されたと知ったのですが、購入できますでしょうか？ 購入方法があれば教えていただくと助かります。

このような感想はたまに嬉しいものです。「書いてよかった」と心の底から思っています。

秋間美江子さんと別れの日が…

2020年9月17日午前10時、アメリカ・コロラド州ボルダーから電話がかかってきました。

「山野井さん、秋間です。お元気？ 私は元気がないの。何も食べられなくなったの……。山野井さん、兄のスパイの汚名を晴らすために一生懸命やってくれてテレビや新聞にも取り上げられたことありがとう。そして娘のヒロコさんに代わりました。お母さ

んは何も食べられなくなってきました。日本にいる人達に電話をしたいようだけれど、今話せる状況ではないので、山野井さんに電話しました」と。私は「午後1時になると娘・明子と泰史・妙子さんが来るので日本時間午後1時に電話ください」と伝えて切りました。

午後1時ちょうど、電話のベルが鳴りました。ヒロコさんからでした。私に続いて、泰史、妙子、明子が話しました。何か危篤の連絡を受けた親族と最後の面会のような感じでした。

秋間さんは、戦後75年の今もなお「スパイの妹」として異国のボルダーに住んでいます。もう二度と日本に来ることはできないかも知れません。戦争の残酷がまだ続いているのです。

そして約一カ月後の10月25日、娘のヒロコさんから、永眠されたとの電話が来ました。93歳でした。29日、関係者のみなさんにメールでお知らせしたところ、翌30日までに新聞各社はじめみなさんからひっきりなしに電話で問い合わせがきました。秋間さんが「スパイの家族」として苦しんでいたことを知っている方々、ボルダーでお世話になった方々がこんなにも大勢いたことに驚きました。今はただ、ご冥福をお祈りするばかりです。

「凶から吉」へと転じた人生だった

「あとがき」は、本文では書けなかった思いをまとめ、関係者への感謝の言葉で締めくくるものだと思いますが、書き始めたら、あれこれの思いがよみがえってくるばかりです。お読みいただいたみなさんにとっては、「山野井さん、気持ち分かるが、繰り返してちょっと長いよ」と思われるかも知れませんが、どうしても書き残しておきたいことを書きます。

振り返ってみますと、私はこれまで何度も追い込まれたことがありましたが、すべて歯車がかみ合い、その都度「凶から吉」に転じてきたように思います。

戦後の混乱時代、小さな町工場から解雇されて毎日新聞社に入りましたが、毎日新聞を定年退職するとき会社は再就職をあっせんしてくれませんでした。しかし仲間たちは、日本教育会館で盛大な送別会を開催してくれました。毎日新聞労組元委員長の増田滋さん、林卓男さんをはじめ、当時の会社幹部も大勢

来てくれました。かみさんは「ご苦労さま」とひとことだけ言ってくれました。

しばらくして、職場闘争が激しかった頃は敵対していましたが厚生部長になった市川八郎さんが心配して、再就職先を紹介してくれました。入社した会社では総務部長でしたが、その会社が経営する居酒屋で焼き鳥を焼き、皿洗いをし、駅前でビラ配りを2年間しました。その実績が認められて、東京・渋谷で、居酒屋7店舗、クラブ・バー3店舗を経営し、年商13億円の飲食店グループの社長になりました。社長を引き受けた時は借金が5億円、それに再建資金2億円、併せて7億円の負債を背負ってのスタートでした。57歳でした。就任すると給料は前社長の3分の1にして、社長専用車ベンツと運転手をなくし、中古のトヨタカローラで千葉から通いました。

東京神田駅前に「すし店」をオープンした時は毎日新聞の若い人たちが神田駅で開店のビラを撒いてくれ、店内の壁には毎日新聞有志が掛け時計を寄贈してくれました。渋谷では居酒屋、クラブ経営には不可避の「やくざ」対策で困るだろうと、当時毎日新聞の写真部長をしていた吉川泰雄さんが渋谷警察署の副署長を紹介してくれました。吉川さんは私が労働組合書記長の時、社会部出身で教宣部長でした。

当時、居酒屋などで働く従業員の雇用条件は滅茶苦茶でした。閉店時間は始発電車が出る時間でした。従業員は座布団を枕にして寝ていました。従業員の労働条件は最低で基準外手当は支払わない、年次有給休暇もなし。親が死んでも葬儀に参加することもできない。長い間労働組合活動に携わってきた。私は驚くばかりでした。その不満から売り上げをごまかしたり、店の食材をくすねる者もいて、それが赤字経営の一因になるほどでした。しかし本当の赤字の原因は社長のでたらめにありました。売上金からピンハネして賭博につき込み、女を囲うなど出鱈目放題でした。それが社長交代の理由でもありました。

そこで私は全従業員を集めて「労働基準法は守る」と約束し、割増賃金を支払い、寮も確保し、年次有給休暇も設定しました。従業員の間には「再建のために数店舗は閉めるかも」とのうわさが流れていました。ところが店を閉めることもなく従業員の労働条件を改善したことで不正もなくなり、3カ月後には全店黒

字になり1泊の社員旅行を計画するまでになりました。

社長就任の際、再建資金として渡された2億円はすべて従業員の労働条件改善に使い、1泊旅行は居酒屋とクラブも一緒に「ゲイ」も参加しました。その時は社会部OBで毎日サービス社長をしていた堀井敦夫さんがバス会社を紹介してくれ、東横デパート前からバス4台で出発しました。堀井さんはバスの出発を見送りに来てくれ、将棋名人戦の記念扇子など抽選会用の景品をたくさん提供して励ましてくれました。

そして「3年間で社長を辞める」と全従業員に宣言した通りに3年間ですべての負債を返し、60歳で社長を辞任しました。その時、労働条件なんて言う言葉も知らなかった従業員たちは「辞めないでください」と署名までしてくれました。

アルバイトの仲間で労働組合結成

60歳で雇われ社長を辞めた後は、休むことなく交通事故の受付センターのアルバイトに就きました。夕方5時から9時までの勤務でしたが、緊張感があって楽しい仕事でした。ところが会社は突然、これからは若い人に代わってもらうと25人全員解雇を通告してきたのです。私はすぐに戸塚章介さんに相談し、言われた通りに、労働組合を結成し、会社に団交を申し入れました。「しんぶん赤旗」が報道した「平均年齢65歳の労働組合結成」を知った東京はじめ大阪、小倉、名古屋の仲間たちから「カンパ」が届きました。社会部出身の組織部長だった大住広人さんからは「財布をはたいたら5千円あった。これでダンゴ食べて団交を！`組合頑張れ、`会社頑張れ、」と。この手紙を会社との交渉の席で読み上げ、交渉を続けた結果、解雇撤回となりました。

カンパは1円も使わなかったので、カンパしてくれた人たちへのお礼に築地の「佃煮」を送りました。メーデーでは、25人中20人の組合員が参加し、新聞労連の隊列の後ろに付いて行進しました。この仲間たちはその後、都知事選をはじめ国政選挙では私が推す候補に投票してくれました。

「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」

本書で何回か紹介している「宮澤・レーン・スパイ

冤罪事件」についての経過と現在です。2013年1月、札幌で「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」を結成し、代表になりました。この事件は、泰史がコロラドで登山中の事故で怪我をし、入院先の病院でボランティア看護婦をしていて泰史の面倒を見てくれた秋間美江子さんが、宮澤弘幸の実妹であることを知ったことが契機になって注目し、訴えてきました。

当初は私一人が取り組んでいると思っていましたが、40年間も資料を集めるなど取り組んでいる方がおられることを知りました。私と共に会の代表になられた山本玉樹さんです。山本さんは北大の物理の教員でした。人権派弁護士として著名な上田誠吉弁護士が書いた『ある北大生の受難—国家秘密法の爪痕』出版にあたって徹底的に取材して協力したすごい人でした。私は山本さんから多くのことを学びました。

北海道大学「冤罪」だと認める

「真相を広める会」の活動によって、北海道大学に「宮澤さんの事件は冤罪だった」と認めさせ「宮澤賞」創設をはじめ成果を上げました、また同大学OBのみなさんをはじめ多くの方々と新しい交流が生まれました。大学と無縁の私が国立大学の副学長と向き合い交渉するなど忘れられない思い出を作りました。

しかし運動が進む過程で、いくつかの意見の違いが原因で、当時、事務局長をしていた福島さんが、山本さんと私は代表を、福島さん自身も事務局長を解任し幹事会を解散した上で、事務局は存続させると提案しました。反対意見がありましたが、多数で決めました。

この件については、福島さんに自宅まで来てもらって、意見の違いを乗り越える努力をもっとすべきだと強く批判しました。それ以降、幹事会解散には反対でしたが、宮澤弘幸が検挙された12月8日と、命日の2月22日の墓参には、「真相を広める会」の皆さんと一緒に参加を続けています。

来年(2021年)は宮澤弘幸さんが特高警察に検挙されて80年です。体が許すなら雪に覆われた北海道大学の構内を歩き、宮澤弘幸さんが閉じ込められた極寒の網走刑務所を訪れたいと思っています。

秋間美江子さんが口ぐせのように言っている「私

たちのような不幸なスパイの家族を出さないために、どうかみなさん頑張ってください」との言葉に答えられなかったことを残念に思っています。私が今出来る事は 100 歳で亡くなった元従軍看護婦・戸田ノブさんの「戦争はいけません」の言葉を叫び続けることだと思います。二度と宮澤弘幸さんのような残酷な事件を繰り返さないためにも。

「働く者が主人公の社会を！」

この「我慢できない 許せない」が最後になるかもしれないと考えて再編集をしていた今年春から現在にかけて、またもや不安と怒りが巻き起こるような思いに直面しました。

その一つが、今年春から新型コロナウイルス禍が世界を震撼させ、日本では全国の飲食店が悲鳴を上げていると報道されたことです。それを見て、31 年前に雇われ社長だったことを思い出しました。もし 31 年前にコロナ騒動が起きていたら、200 人の社員とアルバイトの生活を守るために、私はどのように対処したでしょうか？ 私の今はどうなっていたでしょうか？ と。また行き当たりばったりのコロナ対策しかない政府が続くならば、子どもや孫たちの生活と未来はどうなるだろうか？ と。

さらに、病気を理由に辞任した安倍首相後任の菅義偉首相は日本学術会議新会員 6 人の任命を問答無

用とばかりに拒否するというとんでもない暴走を始めました。かつてのレッド・パージの残酷さを知っている私にとっては、学者・研究者たちに対するこの仕打ちは何としても「我慢できない 許せない」思いを込めて、糾弾したいと思います。

本書の発行にご協力いただいたすべての皆様から感謝します。そして表紙写真とレイアウトに協力してくれた息子・泰史と、写真・年表をチェックしてくれた娘・明子にも。

かみさん・孝子はきっと遠い空から「お父さんよかったね」と言ってくれるでしょう。

思えば、初めて『振り返れば波乱』を出したときは 73 歳、『我慢できない 許せない』を冊子としてまとめた時は 77 歳でした。この時が、最後かもしれないと思いましたが 10 年余生きてきました。88 歳となった今は、10 年後を期待しても、今度ばかりは叶わないでしょう。

でも、生きていれば、労働者と国民の圧倒的な団結の力で「政権交代万歳！」と書けるかもしれません。

「若ものたちが二度と銃を持たないことを願って！」「働く者が主人公の社会を！」

2020 年 11 月 16 日

かあちゃん・孝子の命日に



「安保法制「戦争法反対」と12万人が国会議事堂を包囲した日。新聞OBたちと日比谷公園会場に参加した

|| 2015年9月30日・左から5人目

秋間美江子さんの献身と苦悩を思う

秋間美江子さんとの出会い

秋間美江子さん（以下美江子さん）と出会ったのは、息子・泰史の登山事故が契機だった。

1985年6月、アメリカ・コロラド州ボルダーからコレクトコールの電話が鳴った。泰史と一緒に登山していたTさんからの事故の一報だった。数時間後、アメリカから女性の声で日本語の電話が入った。それがボルダー市内の病院でボランティア看護婦をしていた美江子さんだった。連絡を受けた美江さんは病院に駆け付け、ベッドで足を吊った泰史に、「父親は？」「連絡先は？」と聞いたが、泰史は「連絡しないでくれ」と。「では誰が治療費を払うのか」と聞くと「これ以上親に迷惑をかけたくない」と言った。そんなやり取りが何回か繰り返された末、ようやく親に連絡することをOKしたという。

渋る泰史を説得してOKを取り付けた上で、「あなたは山野井泰史の父親か」「どこに勤めているのか」「役職は」と、まるで警察の尋問のような口調だった。私は「泰史は私の息子です。勤め先は毎日新聞社です……」と答えた。続いて、「治療は『応急処置』『後遺症が残るが杖を使って歩く程度まで』『完全に歩行ができるまで』の3段階があるが、このうちどの程度の治療を受けますか」と、日本では考えられない質問が続いた。私は「治療費は私が責任を持ちます。最善を尽くしてください」と電話に向かってひたすら頭を下げた。

美江子さんのおかげで、泰史の手術、治療はスムーズに進み、しばらくは入院と決まった。泰史の右足の骨折は複雑骨折だった。入院費用は1日10万円もかかるため、美江さんは自分の家に引取り、1ヵ月以上にわたって病院の送迎などの世話をしてくれた。美江さんは、どの日本人に対しても親切に接していたが、「泰史君は自分の身内のような気がする」と好感を抱いてくれたようだった。

ボルダーは標高1655mの高地で、有森裕子さん、高橋尚子さんらが高地トレーニングをしたことなど

で有名になり、日本の有名企業所属の選手も訪れるようになった。強化合宿では、病人や怪我人が出る。こうした時、美江さんは地元の病院で診察と治療を受ける日本人の世話をしていた。ところが医療費を払わないで帰国してしまう日本人がいるとのこと。そんな時、病院は美江さんに催促するという。美江さんが日本を訪れる際には、泰史の面倒をみていただいたお礼に私の家にも来ていただくが、私の家から超有名企業に未払いの治療費を支払うよう電話をすることがあった。詐欺みみたいな行為をして恥じない超有名企業があることは驚きだ。それを知った以後は、美江さんの善意を踏みにじっている超有名企業のチームや選手が、たとえオリンピックでメダルを手にしたとしても、私はそれに万歳する気持ちは起こらない。

「スパイの家族」を胸に秘めて

秋間美江子さんとはどのような方だろうか、との思いを抱いた時、「新宿にある常圓寺に行って、住職の奥様に会ってほしい。そしてそこに兄のお墓があるのでお線香をあげていただけませんか」との電話があった。

早速、私とかみさんは新宿の常圓寺に行き、美江さんの兄上のお墓にお参りした。お墓で手を合わせるかみさんの写真と「お世話になっています」との手紙を添えて、美江さんに送った。この時初めて、美江さんの兄・宮澤弘幸さんのことを知った。

美江さん（旧姓・宮澤）は、1942年、横浜の商家に生まれ、比較的豊かな生活を送っていた。その宮澤家に悲劇が訪れたのは、日本が米英等を相手に戦争を始めた1941年12月8日だった。この日、美江さんの兄で北海道帝国大学（現在の北海道大学）の学生だった宮澤弘幸さんは、スパイ容疑で特高警察に検挙された。弘幸さんは優秀な学生で「大陸一貫鉄道論」を発表、さらに「満鉄電化論」の執筆を準備していた時期でもあった。日本軍による南京大虐殺を報じるアメリカの新聞を見た弘幸さんは、「天皇陛下

の軍隊がこんな残虐なことをするはずがない。全部デマだ」と受け付けようとしなかった。どちらかと言えばこの時代のごく当たり前の愛国青年であった。

弘幸さんは外国人の英語教師と親しくしていた。開戦と同時に外国人はみなスパイとみなされる時代だった。弘幸さんは札幌地裁で軍機保護法違反とされ、懲役 15 年の判決を受けた。大審院に上告したが棄却され、刑が確定し、厳冬の網走刑務所で獄中生活を送った。15 年の懲役は、戦時下の国家機密法関係ではゾルゲ事件に次ぐ重い刑と言われた。

石北線の列車で網走刑務所に護送された時は、編み笠をかぶせられ麻縄で縛られ、草履姿だった。母親は弘幸さんと同じ車両に乗って、離れたところから網走まで子どもの姿を見守っていた。その間、一言も話すことが許されなかった。おそらく暖かいお茶一杯でも自分の子どもに与えたかっただろう。

弘幸さんはその後、宮城刑務所に移され終戦を迎えた。しかしすぐには釈放されず、2 ヶ月後の 10 月 10 日、出所した。刑務所から出たときは栄養失調と肺結核で衰弱し、母親が持参した草履を履くことも出来なかったという。そして「真実は必ず書く」と言っていたが叶わず、1947 年 2 月 22 日、27 歳で亡くなった。

美江子さんのもう一人の兄で、弘幸さんの弟、晃さんは慶応大学在学中の 1943 年 10 月 21 日、明治神宮競技場で催された雨中の出陣学徒壮行会で壮行の辞を述べることになっていたが、兄が「スパイ」と分かり急遽交代させられた。その後、晃さんは戦闘機のパイロットになった。長崎に原爆が投下された長崎の上空から調査するために何度か長崎の上空を飛行したことが原因で被曝した。戦後商社に勤めたが、1964 年に白血病で亡くなった。美江子さんは弘幸さんと晃さんの 2 人の兄をあゝ戦争で亡くしていた。

秋間浩さんと出会う

1945 年、終戦を迎えたが、世間は宮澤さん一家を「スパイの家族だった」と白い目で見ていた。年ごろを迎えた美江子さんはかなり肩身の狭い生活を送っていた。そんな美江子さんに手を差しのべたのは、母と一緒に兄を偲んで網走に行った後、阿寒湖で出会った秋間浩さんだった。浩さんは、美江子さんが「スパイの妹」であることを知った上で、「美江子は俺が

守る」と言って結婚した。

秋間浩さんは、1925 年東京生まれ。東京府立一中、一高を経て、1947 年東大第二工学部電気工学科卒(後年、北大に入学した宮澤弘幸も工学部電気工学科だった)。同年文部省電波物理研究所勤務、後に郵政省電波研究所勤務となり、1965 年、アメリカに移住し、アメリカ商務省ボルダー研究所勤務となり、数々の研究成果を上げた。美江子さんが「スパイの家族」の汚名から逃れたボルダーで、ボランティア活動をし、多くの日本人のホームステイを受け入れ、面倒をみる事ができたのは、秋間浩さんの理解と支援があったからだ。

宮澤弘幸さんの冤罪事件を訴える

宮澤弘幸さんは、「スパイ」とされて取り調べ中「退学届」を書いた。北大側は自主的に書いたものを受理したとしているが、書くよう強制された疑念が残っている。そして前述のように懲役 15 年が確定して網走刑務所に収監された。

この事件を知った藪下彰治朗・朝日新聞記者と自由法曹団の上田誠吉弁護士が真実を明らかにし、汚名を晴らすために調査活動を始めた。1980 年代、政府・自民党は「国家秘密法」制定を策動していた。これに危機感を抱いた藪下記者は朝日新聞に「スパイ防止法ってなんだ」を連載し、上田誠吉弁護士は「戦争と国家秘密法」を出版して訴えた。

この前後、秋間浩さんは一連の出来事に危機感を持ち、上田誠吉弁護士に宮澤さんの事件調査を要請する私信を送り、美江子さんにも事の重要性を話した。

ボルダーで穏やかな日々を過ごしていた美江子さんは、浩さんの訴えで、兄の無念がよみがえってきた。そして日本からの訴えに応じて、国家秘密法反対のために何度も来日した。1987 年 7 月 9 日に札幌で開かれた「国家秘密法に反対する市民集会」では、満員の聴衆に、兄の事件と苦難を訴え「私のような悲しい家族を二度と作らないよう、みなさん頑張ってください」と訴えた。また当時は、マスコミも一致して「国家秘密法反対」で足並みを揃えて徹底反対した。

こうした全国的な運動とマスコミの奮闘によって、政府自民党は国家秘密法制定策動をいったんは中止した。しかしながら政府・自民党は水面下で策動

を継続していたのであった。

一方、戦後ずっと伏せられていた「宮澤弘幸スパイ冤罪事件」が明かになったにも関わらず、北海道大学は一切無視を貫いていた。同じ時期、同じ容疑で検挙され懲役刑が確定しアメリカに送還された北大英語教師のハロルド・レーン、ポーリン・レーン夫妻は、大学あげての運動によって再び北大に復帰して教育を再開し、事実上名誉が回復された。

北大に名誉回復を求める運動

時は過ぎて、2012年秋、来日した美江子さんは私の自宅に来た。思い詰めた表情で「これまで71年間、『スパイの家族』として生きてきたが、私も85歳、兄・弘幸が遺したアルバムを北海道大学に寄贈して区切りをつけたい」と涙を流しながら語った。そして同年10月24日、北海道大学を訪問して、アルバムを寄贈した。同行した私は「秋間美江子さんの本音は、兄・弘幸さんの退学を撤回し、名誉を回復して欲しいということだ」と、北大に強く申し入れた。この申入れ後、東京の常圓寺で、美江子さんも参加して「報告集会」を開催した。

これが契機となって、2013年1月、札幌で「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」が発足し、私と山本玉樹さんが代表に就いた。この会は「宮澤弘幸さんの退学撤回による名誉回復と、秘密保全法(のちに特定秘密保護法)の立法策動を阻止すること」を目的とした。

早速、2月26日、山本代表と一緒に北大を訪問して「名誉回復と謝罪」を申し入れた。しかし対応した総務課長補佐は、物置室のような部屋に案内し、黙って受け取っただけだった。しかしながら北大内部では無視できないと判断したのか、美江子さん宛に5月27日付で、「故・宮澤弘幸氏に係る件について」と題した文書を送付してきた。さらに、6月25日、「真相を広める会」代表・幹事に説明すると回答した。そこでは、北大が退学処分にしたのではなく、本人からの退学願を受理したのだという責任逃れの言い分を批判し、引き続き名誉回復を求めた。

一方、安倍政権は秘密保全法策動を公然と開始した。これに危機感を抱いたマスコミは、宮澤・レーン・スパイ冤罪事件について、秘密保護法が制定されれば起こる事件の事例として注目して報道した。「真

相を広める会」が東京と札幌で開催した集会には、美江子さんがボルダーから熱いメッセージを送ってくれた。

こうした運動にも関わらず、特定秘密保護法は、2013年12月6日に成立した。しかし運動の中でこの法律の危険性が広がったため、現実には秘密保護法による弾圧事件は、まだ引き起こされていない。

美江子さんは、2014年2月22日、常圓寺で開催された「宮澤弘幸・追悼顕彰2.22のつどい」に出席し、再び「みなさん、頑張ってください。私みたいな人間を再びつくりたくないために」と訴えた。

一方、北海道大学は、美江子さんの訴えとそれに応えた北大OBはじめ多くの人々の力によって、宮澤・レーン・スパイ冤罪事件を無視することができなくなってきた。

美江子さんが出席した、2014年5月7日の交渉で、三上隆・北大副学長は「宮澤事件は冤罪であった。宮澤弘幸を顕彰し次代の学生にその精神を伝えるために『宮沢賞』を創設する」と回答した。

美江子さんの生き方に思うこと

秋間美江子さんはアメリカに渡るとすぐにボルダーの病院にボランティアとして働いていた。数年前、美江子さんから「病院から50年間ご苦労様の感謝状が渡された」と嬉しそうに電話があった。

病院でのボランティアを続けながら日本人の語学留学の若者の面倒を見てきた。その数は千人を越えると聞いている。その若者たちの多くはその後、政界や企業家として新聞に名が出る面々だ。

コロラド大学があるコロラド州ボルダーは、アメリカの中でも一番と言われるほど安全な街だ。秋間さんは日本に来られる時もカギを掛けたことがない。これが日本の裕福な家庭の子弟が語学留学として押し寄せ、それを口伝えで聞いてさらに広がった理由でもある。

首相になった小渕恵三も、アメリカを放浪しているとき「困ったらコロラドのボルダーの秋間の家に行けば、しばらくは食いはぐれはない」と耳にして、秋間さんの家に転がり込んだ一人だ。

外務省は年に一回海外で活躍する日本人に感謝するため園遊会を開いていた。ただし旅費は自己負担。美江子さんもこの会には何度か参加していた。その

つど我が家に滞在していた。ある時の園遊会で「秋間のおぼさんでは？」と声を掛けられた。一言二言話して別れた。その後、周囲の人に「あの人が何をしている人？」と聞くと「外務大臣です」と。秋間さんは「ボルダーではぼさとしていたおぶちゃんの外務大臣とはね！」とびっくりしていた。娘の小淵優子は父親が若い頃ボルダーで秋間さんにお世話になった話など知らないだろう。

秋間さんにお世話になった千人を超える人たちの多くが政界や経済界にいながら、なぜ新聞社の印刷工の私の家が定宿になったのだろうか？ その理由が後になって分かった。

私は「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」の代表になって、その活動を始めて間もない時期、美江子さんに「宮澤弘幸のスパイ冤罪事件を広めるため、日本で協力してくれる知り合いを紹介してほしい」とお願いした。美江子さんから「私がボルダーで面倒を見た人たちが「ボルダー会」を作っている。この人たちなら協力してくれるはずだと、その会の世話人を訪ねるように言われ事務局長の福島清さんと東京・神田駅近くにあるその方の会社を訪ねた。

「ボルダーの秋間美江子さんからの紹介だ」と自己紹介、美江子さんの兄・宮澤弘幸スパイ事件のことで協力をお願いに来ましたと訪問の用件を話した。すると席を立って戻ってきたとき茶封筒をもって現れ、「これで、お引き取りを……」の素振りだった。話の続きが断たれ「ボルダー会」の名簿を見せることも拒否されてしまった。

千人を越えると言われている若者の面倒を見た美江子さんが来日しても「良ければ私の家に来て」と言葉かける者がいないのはなぜなのだろうかと考えた私は、神田駅前で会社を構えるあの社長の私と福島さんに対する対応で分かった。それは「スパイの妹との関わり合いはごめんだ」と思っているからだろうと。ボルダーでどんなに親切にされても、日本では「スパイの妹はごめんだ」という空気があるのだ。

美江子さんのご主人・秋間浩さんが「俺が美江子を守る」とアメリカに移住した決意がわかった。そして政界や経済界のお偉方の家ではなく、我が家を30年間も定宿として親戚以上の付き合いをしてきた美江子

さんにとっては、「スパイの家族」を忘れて心やすらぐ場所だったのだと思う。それは亡くなったかみさんも同じだと思っている。

でも、30年という長い年月、何事もなかったわけではない。我慢できないことも何度かあった。かみさんが亡くなる半年前だった。

朝ごはんを食べている時、かみさんが何気なく「お昼は何にしようかな？ 秋間さん何が食べたい」と聞くと、「朝ごはんを食べている時にお昼の話はしないで」とかなりキツイ口調でかみさんに言った。かみさんはテーブルから離れた。

ある朝、私は美江子さんにコーヒーを入れた。「あなた、この入れ方何なの！」とマグカップに3分の2入ったカップを指さした。アメリカではカップになみなみと注ぐものよ！私は黙ってコーヒーを継ぎ足した。こういう時の美江子さんは遠慮がない。それは私の家族だったからだとは今は懐かしく思っている。

美江子さんは、年に2、3回来日して2週間は滞在した。宿泊先は宮澤弘幸のお墓のある新宿・常圓寺が私の家だ。時には遠い親戚の埼玉県大宮に行った。私は「こんな狭苦しい家でなく、もっと広い立派な家がある知り合いがいるでしょうに」と当初よく話したことがあった。おそらく美江子さんをはじめは面倒を見たかつての若者たちが歓迎してくれると思ったようだ。だが、それは甘いと知らされたようだ。

こんな事があった。我が家に来たはじめての頃、美江子さんは私の家から一流会社の人たちに電話をしていた。時には地方にも出かけた。みんなボルダーで世話をした若者たちの親元らしかった。その理由ははっきりとは言わなかったが、ボルダー滞在中の若者たちの面倒を見た時、経費の支払いを約束していたのに、支払わない親元に請求したのではないかと思った。それは約束を果たさない人に対する美江子さんのプライドだったのではないかと思う。

美江子さんについて、私には二つの役割があった。日本にいるときは気軽に滞在できるように。もう一つが美江子さんの兄の「スパイ冤罪事件」を広める運動だった。その経過で、美江子さんに辛い思いをさせてしまったことがあった。それは宮澤さんが特高に検挙された前後のことで、美江子さんが兄・弘幸さんから聞いた証言に疑問が出されたことだ。美江子さんの証言に疑問を持たなかった私にとってもショッ

クだった。しかし放置できないので、美江子さんに事実関係について「本当のこと聞かせて」と、会った時やボルダーへの国際電話で何度も聞いた。美恵子さんの答えはいつも同じだった。美江子さんと、疑問を提起した幹事との間で気まずい雰囲気にもなった。これは現在も氷解していない。

我が家に滞在していた時、美江子さんは「私は宇宙に行ってきた」と言い出した。その話には私は本気になって「そんなことできるわけないだろう」とむきになって話したことがあった。その場にいた泰史は、後で「オヤジむきになるなよ」と言われた。しばらくしてボルダーの美江子さんからから宇宙服を着たボルダー市のポスターが送られてきた。何か子供のけんかのようになってしまったこともあった。

美江子さんの証言と幹事の疑問との間で、私が板挟みになっている苦悩を知った泰史に、「秋間さんの話は時には頭をかしげることもあるが、しかしそれが、スパイ冤罪事件を知らせる運動を進めるうえで障害になることはないだろう。そのことにあまりこだわることはない」と言われた。

美江子さんの生前にきちんとしておきたかったが、それは叶うことができなかった。「スパイの家族」とレッテルを貼られたまま亡くなった美江子さんの苦

しみを解決できなかったことと合わせて、私の無念は消えることはないだろう。

*

美江子さんの9月17日の最後の電話は、「山野井さん、今はなにも食べられなくなった。兄のことが新聞やテレビで大きく報じられ、私は感謝しているのよ！ありがとう！そのことは是非言っておきたかったの。ありがとう」

それから1か月後の10月25日、娘のヒロコさんから「母が亡くなった」と連絡があった。秋間美江子さんは93歳。“スパイの妹”として、日本ではなくアメリカの土となった。

*

しばらくして秋間さんから預かっていた荷物を整理した。白い医務服があった。それは東日本大震災の時、10人のアメリカの医師団の通訳として仙台に2週間滞在した時の医務服だった。滞在中、毛布1枚で過ごしたが、あまりにも寒いので知り合いから衣類を借りたと話していた。日本人の私と知人たちはこの大震災で何をしたらだろうか？

美江子さん、本当にありがとう！

新宿・常園寺に眠るに宮澤弘幸さんの墓守は私たちが続けたいと思っている。

上||骨折で退院後、秋間さん宅で世話になった泰史||1985年
下||泰史がお世話になったお礼に秋間さん宅を訪問||1987年



上||山野井宅で。左から長女明子、孫の未来、幸久と
下||「ガラスのうさぎ」著者・高木敏子さんを訪ねて||2006年

戦後76年

幻のグライダー特攻

13～14歳の少年集め訓練

最終日「敵艦体当たり」に成果役立てよ

太平洋戦争末期、徴兵年齢に満たない13～14歳の少年が集められ、グライダー訓練を受けていた。資料は残っておらず詳細は不明だが、特攻の要員養成が目的だったとみられる。グライダーは戦前、上級学校の教練で活用されるなど、航空隊を目指す少年たちには身近な存在だった。（重政紀元）

山野井さん体験語る

「お前を区の代表としてグライダー訓練に派遣することになった」。千葉市若葉区の実業家の山野井孝有さん（89）は東京都葛飾区の高等小学校2年生になったばかりの1945年4月、校長からこう告げられたことを鮮明に覚えている。当時13歳だった。

前年秋から航空機の部品づくりが続く日々。派遣されることを名誉に感じる一方で、「なぜ体が小さく、成績もよくない自分が？」という疑問を抱えたまま、訓練先として指定された長野県霧ヶ峰に向かった。新宿から乗った汽車は途

山野井さんは戦後、戦争体験を話してこなかった。「体験者が少なくなつてようやく伝える大切さ」が気になった。千葉市若葉区



中、米軍機の機銃掃射を受けた。窓から米兵の顔が見えるほどの低空飛行での攻撃。不思議と怖さはなかった。直前の3月10日、東京大空襲があり、「絶対に復讐してやる」と誓ったばかりだった。

霧ヶ峰に集められたのは首都圏在住の13～14歳の少年約30人。グライダーは木製で、ゴム索の反動で飛ばす仕組みだった。機体は地上から浮き上がる程度だが、2班に分かれ交代で滑空訓練を重ねた。初めにあった恐怖心は、次第に楽しむ余裕に変わった。約2カ月続いた訓練の最

終日。宿舎に來た海軍将校から、「9月に航空隊に入り、訓練の成果を国のために役立ててもらおう」と言われた。その夜に教官から補足の説明があった。

「飛行機に爆弾を積んで敵艦に体当たりしていただろうが、探知機のせいであまり着けない。木製のグライダーなら探知されない。役立ててもらおうというのはそういう意味だ」。事実上の特攻の通告だった。命と引き換えの特攻について当時まったく知らなかった。そのときはあこがれの航空隊に入れる喜びでいっぱいだった。だが、東京

に戻った約2カ月後に終戦。ショックと混乱で、終戦の日の記憶はまったくないという。

3歳上の兄は航空隊員で、終戦時は奈良県内の基地にいた。満足な飛行機はなく、火炎瓶を持って戦車に突撃する訓練をしていたと戦後に聞いた。「こんなバカなことを真剣にしていた時代でした。後から思えば、自分が選ばれたのも、体が小さければ少しでも多くの爆弾を積めるということだったのでしょう」

戦後は印刷工員として毎日新聞で働いた。労働組合活動に参加するとともに、印刷部の部長まで務めた。ただ、家族を含め、自身の体験を話すことはほとんどなかったという。

本当に軍の正式な訓練だったのか？ そんな思いから、霧ヶ峰での訓練の記録が残っていないか、地元の役所や同社の記者にも頼んで探したが、見つけることはできなかった。

76年たった現在、追い詰められた軍の一部が暴走して進めた計画だったので、と考えている。「戦争は人を狂わせる。いまでも世界では少年兵が銃を取ることが続いている。日本もまた同じことを繰り返すのではないか、そんな思いをずっと感じています」



77年前の「匂い」と「香り」

消えぬ東京大空襲の悲惨な思い出

山野井孝有 90歳

私が生まれた葛飾の家の川向こうの空が真っ赤になっていた。77年前の3月10日、米軍のB29爆撃機が東京の下町を大空襲したために発生した炎だった。その頃、国民学校高等科1年の私は軍事工場で働いていた。学校ではなく毎日工場に通い、特攻機の部品を作っていた。工場では2歳年上の向島工業学校の鈴木さんに仕事を教わった。

東京大空襲の日から鈴木さんは工場に姿を見せなくなった。工場の責任者は「鈴木は空襲で焼け死んだらしい」と職場の人に話していた。その話を耳にした私は、数日後、工場が休みの日に鈴木さんの住む川向(荒川区)に探しに行った。

隅田川に架かる言問橋をめざして歩いた。避難する人達は、逆方向に歩く私に「言問橋は死体で渡れないよ」と言った。それでも歩いて行くと、あちこちに焼死体が横たわっていた。その焼死体の「匂い」で何度も吐いた。私はその「匂い」に我慢できずに逆戻り

して家に向かった。

しばらくするとあの人間の焼け焦げた「匂い」とは違った甘い「香り」が漂ってきた。そこは火災から免れた公園で、紅梅と白梅の満開の花が放っている「香り」だった。吸い寄せられるように梅の木に近寄り、紅梅と白梅の小枝を2本ずつ折って、また焼跡に戻り、親子ずれと思われる焼死体の上にその花を一本ずつ置いて手を合わせた。持ち帰った紅梅と白梅の枝はコップに入れて鈴木先輩を思い、手を合わせた。翌日、工場に行き、また旋盤に向かい「特攻機」の部品を作った。

花が散ったあとの梅の枝を庭に挿した。「紅梅」は枯れたが「白梅」は1年後に芽を出した。数年後、私の一家は引越した。それから10年後に訪れると白梅はなかった。近所の人に聞くと私たちの後に住んでいた家族は「寅さん」で有名な柴又帝釈天近くに越したという。その時、梅の木も一緒に大事に掘り起こして持って行ったと聞いた。

そんなことを思い浮かべていたら、柴又帝釈天付近を歩いて見たいと思った。寅さんが「ここだ、ここだ」と教えてくれるかもしれない。77年前と同じように「香り」が私を誘い、梅との再会が叶うかもしれない。しかし90歳の私が寅さんの柴又帝釈天まで一人で行くことには家族が反対するだろう。

もしかするとあの白梅は大木になり沢山の白い花を咲かせているのでは？とも思う。

この77年間「ベトナム戦争」をはじめ地球上のどこかで戦争が起きている。そして、どの戦争でも、多くの子どもたちが巻き込まれて命が奪われている。それなのに、「再び戦争をしない」と誓った日本がいつの間にか航空母艦、潜水艦、戦車もミサイルももつ自衛隊が存在している。ないのは「核」だけだ。私たちが無関心でいる間に「軍事力」は世界で第5位の「軍事大国」になっている。しかし“再軍備反対”の声は野党からも消えた。

「軍靴の響きが私たちのすぐ後ろに迫っている」と私は強く訴えたい。でも、仲間のほとんどは戦争を知らない。その仲間に「すぐ後ろに『軍靴の響きが…

…』と訴えても、実感はわからないかもしれない。戦争体験を語る人は年々少なくなっている。

私は戦場での体験はない。しかし東京大空襲では1夜にして10万人が焼き殺された。100万人が家を失ったのだ。東京大空襲で焼死体を跨ぎ、「この仇必ず取る」、「鬼畜米英と闘う」と特攻隊の訓練に参加した。

3月10日から8月15日までの原爆で広島で10万人が、長崎で7万人が“ピカ、ドン”の一瞬で命を奪われた。

今、ロシアの侵略で、ウクライナでは多くの命が奪われている。とくに子どもの犠牲には「我慢できない、許せない」。

3月10日の大空襲は、90歳になっても、忘れない。あの「焼死体」の“匂い”を決して忘れない。

その思いは、何度も言い続けていきたい。

「無関心は犯罪だ！」と思うからだ。



「真相を広める会」の出発点は、宮澤弘幸の妹・秋間美江子さんが、毎日新聞OBの山野井孝有さんとお会った時からです。1985年、秋間美江子さんは、コロラドでロッククライミング中に滑落して大けがをした登山家・山野井泰史さんを搬送先病院で看病し、自宅で療養させました。そして、山野井さんに「私の兄・宮澤弘幸は、軍機護法違反のスパイとして検挙され、戦後まもなく事実上獄死した」と伝えました。戦争に対して人一倍危機感を持っている山野井さんは、何としても「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」の真相を伝え、広めなければならないと訴え続けています。そんなご縁のある山野井孝有・泰史さん・妙子さんのイベントでした。「真相を広める会」の寺沢玲子さんが参加されましたので、その報告を「事務局たより」号外として、お知らせします。(福島 清)

トークイベント「いのち五分五分」

山野井孝有×泰史×妙子×神長幹雄



2025年7月30日夜、お茶ノ水の「THE TRIBE」で、山野井孝有氏と息子の泰史・妙子夫妻それに孝有氏著書「いのち五分五分」出版に関わられた山と溪谷社の神長幹雄氏が加わり、4人で泰史さんや妙子さんの活動の背景や家族の逸話を話題とする「トークイベント『いのち五分五分』」が催された。

因みに、この場所での講演会で講演者が3人というのは初めてとの事。一般参加者は40名、申込人数を遥かに超えて断られた人も多いという。

はじめに、司会の保科雅則氏よりこの対談実現のいきさつについてのお話があった。泰史さんの所属山岳会（日本登攀クラブ）の忘年会で入手した私家版「五

分五分」が非常に興味深かったので、神長氏とイベントを企画、そのために孝有氏の許可を取ろうと接触したところ、対談にも出てくれることに！

神長氏からは私家版「五分五分」を「いのち五分五分」として山と溪谷社から出版するにあたってのいろいろな裏話が語られた。泰史さんもその時その時の逸話を補足する。

泰史さんからは、高校3年三学期に進路指導の事で父兄が呼び出された時の教師への母の受け答えの逸話「高校を卒業する年齢になれば自分の将来は決められる。法に触れたり人に迷惑を掛けるようなことがあれば命を掛けても止めるが、登山家になりたいという本

人の進路は母親であっても手を広げて止める事は出来ない」などが飛び出した。

「自分で山の面白さを見つける」登山スタイルは母親や母の弟の影響が大きい事、父・孝有氏の戦争体験からの反戦の強い思いを感じるとして、「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」のための活動等や戸田ノブさんからの聞き取りに通う孝有氏の話が出た。

孝有氏が私家版「振り返れば波乱」「五分五分」「戦争はいけません」等、全て自前で出版していた事や、泰史さんが「俺の講演料が<一回〇〇万円>と言われるが、普通の人達が時給千円ももらえないのにおかしいと思わないか」と母親と話していたと知った時には、「息子も母親も真っ当だ、労働者の事を理解している」と嬉しかったと孝有氏。泰史さんが中学生の時に受け入れてくれる山岳会探しに苦労していたのを見て、唯一受けてくれそうだった日本登攀クラブに念書持参で集会と一緒にいったと語る孝有氏。

やはり、<この両親がいて泰史さんあり>なのだと思った。そして、泰史さんの連れ合いの妙子さんについては、泰史さんをして「妙子がいなければ、オレはクライミングしか頭にない、社会性ゼロの常識のない者のままだった」「妙子は実の子供よりも両親の信頼が篤い」と言わしめている。生前の母・孝子さんや父・孝有氏にしても妙子さんの人柄にはべたほれしていると感じる。

山野井孝有氏 93 歳、身体は衰えてもまだまだ「反戦」を訴え続ける。

19 時~21 時のはずの対談は熱のこもり方が凄く、途

中休憩を省略しても足らず終了時間も 10 分ほど延長する事に。それが終わっても孝有氏からどうしてもこれだけは言いたい!と申し出があり、「平和の大切さ」と「いのちの大切さ」について訴えた。

司会者は、<多分参加者に戦争体験者は一人もいない、でも平和やいのちの大切さは引き継いでいかなければならない!「いのち五分五分」は昨今忘れられている親子の絆についてももう一度考えさせられる、まだ読んでいない方には是非とも一読をオススメする>と閉会の挨拶をした。

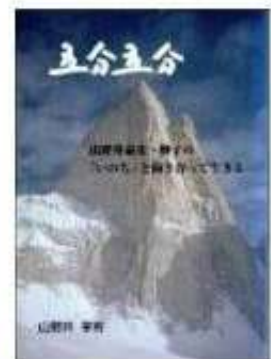
ご存じのように、当日朝 8 時 25 分ごろ、ロシア極東のカムチャツカ半島沖を震源とする大規模な地震があった。震源の深さは 20.7 キロ、地震の規模を示すマグニチュードは当初 8 と発表され、その後 8.7 から 8.8 と訂正。それに伴う津波も当初の<注意報>から<警報>となり、一時は「中止か」との声も聞こえてきたが、妙子さんが千葉へ孝有氏を迎えに行き（彼女が乗った電車以降は運休に!）、泰史さんは伊豆に住んでいる司会者・保科さんの妹さんに車で小田原まで送ってもらい、その後一緒に小田急で向かった。

この場所 THE TRIBE は「自由で、冒険的で、創造的なクライミングの魅力をクライマー同士で共有し、互いに刺激しあえること」を願って株式会社ロストアローが設立、偶然ながら代表取締役の坂下直枝氏は泰史さんがギャチュンカン事故で入院中お見舞いに来て下さり、高熱に苦しみながらも泰史さんがそれでも話をしたい方であった。

(寺沢 玲子)



閉会后、山野井孝有父子を囲んで。右から、麻生豊、山野井孝有、山野井泰史、山野井妙子、大西和子（敬称略）。撮影=寺沢玲子



〔私家版〕2010 年刊



〔山と溪谷社版〕2011 年刊

第5部 追悼の言葉 (敬称略・順不同)

逆境を跳ね返した山野井さん

戸塚 章介 (元毎日新聞・印刷)

山野井孝有さんが94歳の長寿を全うして逝去された。今頃は11年前に亡くなられた愛妻孝子さんとの再会を果たしていることでしょう。

思えば、私と山野井さんとの付き合いはかれこれ70年になります。私が印刷局養成員として入社したのが1956年4月、1年間の試用期間を経て社員になると、ユニオンショップで自動的に毎日労組組合員に。その年、山野井さんは専従の支部副書記長で職場にいなかったと思います。翌年私は青年部書記、山野井さんは本部青年部長に。四支部青年部会議のため、東京駅から夜行寝台列車に乗って門司まで一緒に旅したのを思い出します。関門海峡に面したためかり荘で開かれた会議で、青年部の独自要求として結婚資金8000円を決めました。それを本部が取り上げて会社に要求、会社がまるまる飲んだのは痛快でした。毎日労組青年部ありという気概を持ったものです。

山野井さんの凄いところは、滑らかな話術と卓越した記憶力と言われております。それは同感ですが、私はもう一つあると思うのです。どんな逆境にあっても、筋を曲げずに、短気を起こさずにその置かれた状況の中で冷静に物事を処していく強靭さ。これです。この能力は少年時代、東京大空襲で火の海になった街の中を、死体をまたぎながら懸命に生き延びた体験で培われたものではないでしょうか。

組合活動でもそうでした。63年度の林卓男執行部で山野井さんは本部執行委員をやったのですが、東京支部大会では一票差のすれすれ当選だったのです。林執行部は今でも語り草になるほど、反共がちがち、会社の意向に沿った組合活動が強行されていました。その中で、少数派の西部支部選出の本部執行委員の高藤敏昭さん、本部青年部長の勝又敏夫さんらと組んで、「合理化・労働強化反対」を押し通し、労働組合としての原則を守り抜いたのです。

山野井さんは70年度から4期、本部書記長を務めました。68年の職分制導入直後で、労使関係も荒れ

た時期でしたが、組合内部も議事規則改正を巡ってすったもんだの状況でした。何度も開かれた臨時中央大会では、下手をすると組合分裂か組織の崩壊かという危機にも直面しました。危機に対処するためには、原則的かつ柔軟な対処が求められます。その大会運営の中心を担ったのが山野井さんだったのです。危機を乗り越えて議事規則を改正したからこそ、75年からの経営危機への対処とその後の再建闘争が成り立ったのです。

職場に戻った山野井さんは、仕事に精を出して印刷部長にまで上り詰めました。この時期、私は都労委委員として組合専従になり職場にいませんでした。直接会うことはなくなりましたが、山野井部長の評判は聞いていました。山野井さんは会社の合理化要請に屈従せず、部員一人ひとりを大切に、2年間の任期を全うしました。

山野井さんは印刷部長を最後に、会社を定年になるのですが、その時点で再び逆境に遭遇しました。普通、部長職までやれば関連会社などへの雇用継続の道があるものですが、山野井さんにはそれがありませんでした。当時の定年は55歳なので、まだ働かねばなりません。助けの手を出してくれたのが、職場では対立していた市川八郎さん。「みねしか」という居酒屋の雇われ店長の職を紹介してくれました。

そもそも山野井さんと酒飲みとは相性がよくありません。本人はほとんど飲まないし、かつ酔っ払いが大嫌いです。それが酔客歓迎の仕事についてのことからどうなることかと心配していたら、見事に店長としての成功を収めたのです。その後は渋谷で高級ナイトクラブの経営を任されたり、保険会社のコールセンターに労働組合をつくったり、八面六臂の活躍をしました。

山野井さんは毎日新聞OBでつくる日本共産党の後援会「KOMOK」の立ち上げに呼びかけ人として加わり、老躯を押して会議や行事に都内まで出てきました。国政選挙に当たっては多額のカンパをしてくれました。日本共産党が逆境に陥っていると言われるいま、山野井さんを失うのは本当に痛い。山野井さんなら逆境を克服するための知恵を出してくれた

かも知れないと思うからです。

山野井さん、安らかに眠りください。合掌。

閃きの山野井孝有さんが逝った

大住 広人（元毎日新聞・編集）

畏兄・山親父（やまおやじ）が逝った。5歳先輩の元・毎日新聞労働組合本部書記長の山野井孝有さんだ。少し大げさに言えば直情径行で酔っ払いを嫌い、「これ、冗談だよ」と先にト書きをつけないと冗談も通じないひとだった。

山親父なる愛称も本人、ほんとは嫌っていた。嫌いだが我慢して「おれのことか」という顔して受け答えてくれた。北海道で、山親父は熊（ひぐま）をさす。ちかごろ熊は嫌われものになったが、熊はどっしり頼り甲斐があって、どこか愛敬もある親しみの存在だった。

出会ったのはもう何10年も前。畏兄・牧孝昌が委員長のとときで、当時ド素人の牧孝昌が信頼篤くした1人が執行委員・合対部長の山野井孝有だった。わたしは東京支部の執行委員で、労働組合の労の字も解さない牧孝昌以上のド素人。

労働組合の話は正確を期せねばならず、正確を期すと紆余紆余になるので、不用意に触りたくないのだが、当時は会社の労務政策が労働組合の内部に介入していた時代で、これを排し、かつ、いかに自律するかに命運があり、牧孝昌も本気で意を尽した。

で、大改革は地べたからと、山親父とわたしが組まされ、東北6県行脚へと駆り出された。本来、支部の若造が本部の活動に関わる仕組みはないのだが、牧孝昌の一喝で、そうなった。牧孝昌いうひと、企画「教育の森」で名をなした戦後教育改革の先端を究めた記者ながら、けっこう独断・独裁にもなじむ仁で、前例、細則無視は日常茶飯だった。

とまれ、東北行脚は弥次喜多だった。もちろん、オルグは一所懸命やった。当時は、支局長のほとんどが副部長職で、副部長職は組合員だったから、支部の代表委員や大会の代議員にはほとんど支局長が就いていた。これをひっくり返す下地をつくろうというのが行脚の狙いだった。

そこで、あらかじめ代表委員（支局長）に通知して

ある日の前日、あるいは前々日に宿をとり、その地の記者クラブ他に密行して支局記者の本音を引き出し、また煽り駆り立てた。半面、相手は仕事だから、そうそう時間をとるわけにはいかない。つまりけっこうな余暇も、これありとなる。

ま、弥次喜多ぶりはご想像にだが、先輩・山親父はほんとうに面倒をみてくれた。パチンコに目がなかったもので、それを大目にみてやる代わりに、わたしの我儘、無理難題もほとんど通して貰った。ひるがえって労働組合のなんたるかも教わる、となった。

まるで一宿一飯の義兄弟。もとより本件での成果もまあまあだったから、牧孝昌も評価してくれ、東北行脚の後もたびたび組まされ、呼吸も合ってきて、ほどなく兄貴分というよりも、で、山親父と呼ぶことにした。

以来、腐れ縁という下司になるが、牧孝昌との縁も深く太く、その流れで、飛び飛びと労働組合の舞台を踏むことになり、山親父との縁も深く太くなった。中でも、1973年2月22日の一件は、知る人ぞ知る、忘れるに忘れられない絶体絶命の一件だった。

手っとり早くいうと、組織の命運にかかる難題で本部執行委員会が割れ、議決権を持つ執行委員21人（欠員1）中の8人が辞任・退席した。規約上6人欠けると機能不全で執行部瓦解となる。後に控える定期大会も開けず、再起不能と紙一重の無機能状態に陥る。総辞職を前提に先のない收拾策を弄するほかはないと、誰もが、そう臍を固めた。

鬱鬱と後始末。が、その時、山親父の手元が止まり、目がかすかに光った。

「おい、待てよ、辞任は成立してないぞ！」

訳は省く。規約、慣行を繙けば、この指摘は正しい。急転、山親父の閃きによって態勢を立て直し、言えば緊急時便法によって残存13人による執行体制を押し通し、結果として本件難題の解決までを確保するに至った。

閃きと言ったが、山親父の閃きには裏づけがある。驚異の記憶力だ。当時、団交で記録を取り、団交後の執行委員会で内容報告するのは書記長の仕事だった。当時、会社差しがねで団交要員は労使同数という慣行があり、団交に出れない執行委員が居たからだ。

この団交で、山親父はめもすらも取らない。しかも報告では流れをきちんと整理した上で、問題点を明

らかにし、議論がはかどるように塩梅している。驚異の記憶力は、ただ単に雑然の記憶ではなく整理機能も備わっていた。何が何でどの引出しにあるか、組み合わせればどうなるか。2.22の閃きもこの威力の賜物であり、瞬時に規約、慣行の要点が脳裏に浮かんだのであろう。この機能、活動の全てに寄与したこと、言うまでもない。

加えて山親父の凄さは、一瞬の閃きもさることながら、手柄を独り占めにしないことにある。きっかけを作ると、あとは分担、分担の得意技を引き出す。2.22の時も、本部も支部も職場も夢中になって13人執行部を盛り立て、知恵と手足を持ち出して競った。この集積が、瓦解の危機から一転して、毎日新聞労働組合の骨格をつくりだした。

ちなみに2月22日は山親父の誕生日。一瞬、惨憺となる日を自らの閃きで、最良の、しかも歴史に刻む一日に仕立てあげた。窮地にあればあるほど、知恵と閃きと胆力をほとばしらせ結果を積んできた。こういう先輩がいると、身の小ささを忘れ、たいがいのことは大丈夫だと思えてくるからありがたい。

もとより、いつもいつも弥次喜多だったわけでもない。時に運動の根幹で食い違い、長きに行き来途絶えたこともある。互いに向っ気の強さから、これまたありの次第、その間も、互いの根性だけは分かり合っていた気がする。

思い起こせば次々と、さらに多々。半生の前半では労働組合の自律に精魂込めて礎の一石になり、後輩に道を開いた後は、社員としても輪転作業のおさらいに勤しみ、なんと印刷部長までも務めている。

老いても好奇心衰えず、波乱を引き込む。定年後は、酔っ払い嫌いのはずに、居酒屋の雇われ親父に納まった。といっても反骨眠らせたわけではなく、「我慢できない 許せない」と題して個人報に書き連ね、その一つ、戦時のスパイ冤罪で事実上獄死した若者の無念をはらさんとする運動では有意の後輩に推されて運動の代表にも就いている。「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」代表、がそれだ。

思い返せば、その折々、大小の閃きがあったと知れる。が、気づけば本稿、既に駄して長きにわたっている。それに山野井孝有を悼するに有意の後継は多士あり、恃んで、このへんで駄は擱くとする。

最後に会ったのは、過ぎる2月22日。これまた奇しくもとなるが、先の宮澤弘幸の命日で、法要と追悼集会の席だった。元代表として発言を促され、スパイ冤罪に繋がるスパイ防止法策動に強い警告を発するとともに、軍国少年世代の声をしばり絶対平和の達成を呼びかけた。目を閉じたのは、その11日後の3月5日朝、享年94だった。 南無

山野井孝有先輩を偲ぶ

石井 忠治（元毎日新聞・印刷）

10歳も歳の離れた大先輩「よくぞここまで」。

思い起こせば2つの接点があった。第一は労働組合時代。先輩は本部書記長、小生は本部青年部長と同じ執行部で活動。この間、先輩には労働組合の存在の意味・役割など教えていただいた。そして先輩の卓越した能力を見た。当時、会社との団体交渉で組合側の出席人数は制限されていた。故に交渉後、書記長が経過を報告するのが慣行になっていた。交渉内容の正確さ、かつ問題点の整理など、いつもながら見事な説明であった。数年後、小生が書記長に就任して初めて、先輩の苦勞を知ったわけだが（その時期は団交の出席委員の制限はなくなっていた）。

第二は印刷部時代の部長と部下の場面。小生の人事部への異動の際のことだ。山野井部長は「どの部署に行っても、社員を大切にすることを忘れるな」と言って送り出してくれた。この言葉は今でも忘れない。

先輩の定年退職後の活動の象徴は「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」。「国家権力犯罪に時効はない」と代表に就任し、全国を奔走し冤罪の解明、戦争の悲惨さ、愚かさを訴えた。その叫びが冊子「我慢できない 許せない」になっている。

平和の戦士として生きた先輩の生きざまは手本。後輩には継承の責任があるだろう。安らかに。合掌。

「働く者こそ主人公」を信念に

小川 忠男（元毎日新聞・印刷）

あれはもう40年以上も前になるのだろうか。社員食堂で昼食をとっていた時、私たちの前にたまた

ま座っていた山野井さん「俺の倅が山で事故にあい大けがをしたらしい」と、ぼつり。今朝、アメリカから自宅の奥さんに連絡があったらしいのだ。しかし今はそれ以上詳しい事は分からないという。当時はSNS やスマホなど便利な通信手段が無かった時代、山野井さんはただひたすら次の連絡を待つ事しか出来ない自分に、歯がゆさという立ちを感じていた様だ。休憩室に戻ってから呆然としている山野井さん。あの時の山野井さんの姿、今も私の記憶はつきり残っている。私たち若手（当時は若かった）にとっては、常に頼りがいのある頼もしい親分的存在であり、後にも先にあの様な姿を私たちに見せた事はなかったから。

そして、それから数年たってからです。この山の事故がきっかけで「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」への取り組みが始まり。今では世界的クライマーとして活躍している泰史さんが、あの時の山野井さん息子さんだった。というのを私が知ったのは。

そしてさらに数年。山野井さんが毎日新聞社を定年退職。泰史さんは世界的クライマーとしてNHK特集に何度も登場するようになっていた。そんなある日、酒を飲まない山野井さん、酒飲みの集まりである私たちの飲み会に参加してくれた事があった。その時、私は酔った勢いもあってか、今は「山野井さんの息子、泰史さん」だけれど、これからは「泰史さんの親父、山野井さん」ですね、と。その時、ちょっと間を置きエヘへと、少し照れたような笑いと、泰史さんの活躍を心の底から喜ぶような自然な笑顔を返してくれたのです。「そんな事あるか」と一喝されると思っていた私は、ちょっと拍子抜け。あの時の山野井さんの少し照れた様な優しい笑顔、今思い出しています「ちょっと心配だけでもね」と、ぼつりともらした一言と共に。

今度は現役時代に遡ること数年、こんな事も。朝刊作業終了後、毎朝休憩室で繰り広げられる酒盛り。その中心に酒の飲めないはずの山野井さんの姿、釣り好きの山野井さん自ら釣り上げたイサキを刺身にしておにぎりになっているのです。御馳走に皆が旨い旨いと箸をのばす姿に、少し自慢げに釣りの魅力を語り掛ける楽しそうな笑顔。夜勤前に魚をさばき、クーラーボックスに入れ担いできたというのです。

そして、やはり山野井さんと言えばこの姿、この姿

を抜きに山野井さんを語ることは出来ません。舌鋒鋭くしかも理路整然と、会社を追求している姿です。「働く者こそ主人公であるべき」との自らの信念を実現すべく、労働運動に情熱を燃やすその姿に、私たちはどれ程多くの勇気と希望を貰ったことか。そして退職後は反戦・平和運動に軸足を移し、その信念を最後まで貫通した生き様には。ただ、ただ頭が下がるばかりです。

山野井さん長い間本当に有難うございました。
合掌。

山野井孝有氏の事

寺沢 玲子(山野井泰史・妙子の友人)

初めて山野井父上にお会いしたのは何処だったかもう覚えていないが、親しかった長尾妙子さんが山野井泰史さんと一緒に棲み始めてからだったと思う。まだマカルーで受けた凍傷手術後の不完全な指の妙子さんと、富士山での歩荷中、落石事故で骨折して松葉杖を頼っている泰史さん……内心心配でしょっちゅう奥多摩へ足を運んでいた。

2012年。2人のところに泊まった帰りに「俺たちはいけないけど」と参加を勧められたのが、新宿・常圓寺での美江子さんを囲む会だった。その席上、父上に「妙子の姉さんみたいな人」と紹介された時、巷では泰史さんが主で妙子さんが従のような伝え方をすることに反感を覚えていた私は「私には泰史君より妙子さんが大事」と言ってしまった。

それまでニコリともしなかった美江子さんが笑顔で「妙子を一生守ってね」と碎けるほどの力で私の手を握った。「守る」という一言に尋常ではない気迫を感じた私は、それがきっかけで「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」に関わることになった。

「登山」を絡めてなら何か世間にアピールできるのではないかと<岳人雑学ノート>に関連記事を載せたり、当時お世話になっていた日本勤労者山岳連盟(通称:労山)にお願いして機関紙に父上に連載させていただいたりした。

父上とは時にはぶつかりあい、時には同調したりしてなんだかんだとお付き合いは続いたが、最愛の

奥様が亡くなられてからは、我々に心配かけまいと思われたのか「本日はこんな食事を一人で用意した」と写真を送られてきていたのが段々と「朝は近くのファミレスに行くんだ」と話され、ファミレスの利用回数が増えてきたという。妙子さんが定期的に掃除や食事の準備に来てくれると嬉しそうに報告して下さっていたのがいつ頃から「誰にも迷惑かけないように施設に入る」と話されるようになった。その気持ちが痛い程わかり、返答に困った事もあった。

泰史さんを扱った映画「人生クライマー」や妙子さんの事を扱った「凧の人」が世間に出た時に、とても嬉しそうだったのが印象に残っている。実は泰史さんが奥多摩でクマに襲われて緊急搬送された時に、父上は今後の二人の生活を心配なさせて二人を世に宣伝しない私を責めた。それを後で聞いた母上が私に詫げる姿を見た父上だったが、私には「これほどまでに息子夫婦の事を心配していたのだ」と山野井父上も「世の親の一人だったのだ」と感じて何故か嬉しかった。

今年2026年2月22日、父上の94歳の誕生日に福島清氏の発案で花束を用意した。骨折した右腕はまだ吊るした状態だったが、父上の妹さんの息子で泰史さんの従弟にあたる豊さんが花束を受け取るのをサポートして下さった。花束を受け取った父上が言葉を詰まらせ、目を潤ませた。あの日が我々が父上と過ごした最期の日だった、「戦争反対」の声をあげる度に段々と元気を取り戻す姿が嬉しかった。

あちらの世界で最愛の母上やお母様と再会なさり、お互いのご苦勞を慰勞なされたであろう。

今はもうゆっくりご永眠ください、合掌。

「戦争させてはならない」

水久保文明（元毎日新聞労組書記）

散る桜 残る桜も 散る桜——良寛和尚。

すべての人は、出会ったすべての人との別れが必ずやって来るのは、自然の摂理です。最近の山野井さんは、いろいろな場所で「皆さんに会えるのはこれが最後になるかもしれない」と必ずと言っていいほど語っていました。

そのたびに「大丈夫、山野井さんはそう簡単にはあ

ちら側にいかないよ」と自分に言い聞かせている自分がいました。しかし泰史さんからの突然の悲報に、やや、うろたえている自分を否定することはできませんでした。

また一人、戦争を知っている人が他界しました。話のできるすべての場で「戦争をさせてはならない」と言い続けていた山野井さんは鬼気迫るものがありました。「(戦争に反対する)それが、あの時代に生まれた者の責任だと思うから」という一言は、あの時代を生き抜いた人の言葉として何度聞いても重みを感じたものでした。

いま、山野井さんの語ってくれた危険な事態が間違いなく進行しています。2026年度の日本の軍事予算は9兆円を超え、敵基地攻撃能力を備えたミサイルを買いあさり、兵器輸出の自由化を図ろうとしています。挙句の果ては、国是ともいえる「武器輸出三原則」を完全否定し「武器輸出全面解禁」を閣議決定してしまいました。憲法9条はどこに行ったのでしょうか。

それらを推進するために、「スパイ防止法」(本質は国民監視法)策定の動きを強めています。単なるスパイ防止なら、特定秘密保護法や公務員法、刑法などで十分対応できるはずですが、「日本はスパイ天国」などと公言する政党もありますが、戦後日本でスパイとして摘発された事案は一つもありません。

戦前と同じことを繰り返させてはならないと、元北大生の宮澤弘幸さんの冤罪「宮澤・レーン事件」の真相を広めたことは「戦争はダメだ」と主張し続けた山野井さんの真骨頂だったと言えます。無辜の学生が、外国人の教師と交友を深めていただけで「軍機保護法」に問われ、網走刑務所に送られるという理不尽は許しがたいことでした。

その運動のほんの一部にかかわらせていただいた私ですが、学ぶものは小さくありませんでした。山野井さんには感謝です。

いま世界は一步間違うと、世界大戦になりかねない様相を呈しています。ウクライナとイランがその代表格ですが、新たな世界大戦は核戦争の危機をはらんでいます。山野井さんが訴えつづけた「戦争させてはならない」は、大袈裟ではなく人類が生き残るうえで必要十分条件です。

私には2歳になる孫がいます。毎週日曜日、ママと

パパを少しでも休ませようと育児の手伝いをしています。走り回ることが楽しくて仕方のない、保育園に通っている元気な女の子です。この子らを戦禍に遭遇させる訳にはいきません。今を生きる者に「戦争させない」心を「オルグ」してくれた山野井さんに改めて感謝です。

この原稿を書いている最中（4月25日）、岩手県大槌町の山火事が、『風の電話』に迫っている映像がテレビで流れてきました。被害が大きくなることを願いつつ、いつか行ってみようと考えていた風の電話で話せる日を望んでいます。

山野井孝有さん、長い間お疲れ様でした。ゆっくりお休みください。

信念を形にして行動

明珍 美紀（毎日新聞編集局）

「僕の息子とその妻は山をやっていてね」

その言葉と共に、群青色の装丁の本を手渡してくれた。タイトルは「凍」。登山家の山野井泰史さんが、パートナーの妙子さんとヒマラヤのギャチュン・カン（7,952 ㍎）の北壁に挑んだ時のことを題材にしたもので、著者はノンフィクション作家の沢木耕太郎さんだ。この時、毎日新聞OBの山野井孝有さんと、話題のクライマー夫妻が、私の中でつながった。同書が刊行された2005年のことだ。

毎日新聞労組で教宣部長（現情報部長）を務めた経験がある私は、もちろん山野井さんの存在を知っていた。でも、泰史さん、妙子さんとも知り合い、一家との距離が一気に近づいた。泰史さん夫妻は当時、東京の奥多摩町に住んでおり、そこで開いていた年末の「餅つき望年会」にも参加するようになった。

そして、山野井さんを通じて「宮澤・レーン事件」に出合った。泰史さんは20歳だった1985年6月、岩登りの聖地、コロラド州ボルダールで訓練中、落石で左足を粉碎骨折した。地元の病院に運ばれ、退院した泰史さんを1カ月余、自宅に迎え入れたのが、ボルダール在住の秋間美江子さん。日米開戦の日（1941年12月8日）に特高警察に検挙された北海道帝国大（現北大）の学生、宮澤弘幸さんの妹だった。

秋間さんはこの事件について長い間、多くを語る

なかった。だが、翌86年、泰史さんが友人らとボルダールを再訪した際、「兄が使っていたものだ」と登山用の古いザックを見せたという。兄の無実を訴える秋間さんの思いを受け止め、父の山野井さんが、毎日労組OBの福島清さん、大住広人さんら有志と「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」を結成し、宮澤さんの名誉回復に力を注いできたのは周知の通り。「人権を守る」という信念を抱き、それを形にして行動した。

敗戦後の新聞社、放送局などメディアへのレッドパージの時は、大日本機械工業労働者として関わり、毎日新聞時代は経営難と存続のための新社設立など、数々の労働問題に接してきた山野井さん。日本の社会は、憲法や原発再稼働に加えて軍事費増大、武器輸出の問題が深刻化している。いまごろは、11年前に旅立った妻の孝子さんと共に「この国はどうなるか」と空の上で案じているのではないか。

ジャーナリズムや労働組合の運動に従事した経験のある者が、この社会にどう貢献していくか。山野井さんは、そんな問いかけを、私たちに投げかけている。

波乱の人生を重ねた山野井さん

伊藤 直孝（毎日新聞さいたま支局長）

山野井さんと初めてお会いしたのは2012年秋、雪が降り出す直前の札幌でした。兄・宮澤弘幸さんのアルバムを携えて北大を訪問した秋間美江子さんに寄り添い、涙で言葉を継げなくなった秋間さんに代わって「スパイをする人のアルバムじゃないんだ」と切々と語る姿を覚えています。

それから来札のたびにお会いし、私が入社10年研修で上京した際にも新宿で一緒に朝ご飯を食べながら話をしました。宮澤さんとレーン夫妻。秋間さんと山野井さん親子。山野井さんとの出会いをきっかけに、それぞれ全く違う道を歩んできた人たちの交錯の物語を道内版でいくつか書けたことは記者として本当に幸せなことでした。

山野井さんの自伝を読み返すと、波乱続きの人生の先に、80歳を過ぎてから宮澤事件への対応という別の人生を重ねたことに改めて驚きます。山野井さ

んの言葉や行動を思い出しながら、私も平和な世界のためにできることをしていきたいと思います。

「道行之而成」(莊子) の行動

泉 定明 (北大OB/OG 会世話人、1967 年卒)

山野井孝有様 (以下「山野井さん」と呼ばさせていただきます) が、「スパイ冤罪・宮澤・レーン事件」の掘り起こしと、事件が持つ危険性を広く知らしめるための仲間づくり、そして活動を継続させてきたことへのご尽力を感謝いたします。あなたが居られなければ、危険な体制・機構・法律が作られ、多くの国民が権力に取り込まれてきた危険に対抗するための歴史的事実が現存したことを、世間に知らしめることができなかつたと言えます。山野井さんの活動は「道はこれを行いて成る」(「道行之而成」 莊子) であったと思います。ありがとうございました。

亡くなる直前まで常圓寺の集まりで体力を振り絞って、事件が持つ危険性と良き社会の実現を訴えかけてくださいました。いつも言われていた「戦争はやってはいけませんよ！ やらせてはいけませんよ！ やらす方に向かわせてはいけませんよ！」という言葉は、しっかりと心に刻まれています。

1985 年に起きた息子・泰史さんの登山事故を機に出会った秋間美江子さんが山野井さんに対して、無念に思いつつ長年秘しておられた兄・宮澤弘幸の悲劇を語ったのは、山野井さんから自ずとにじみ出る誠実さと正義心が彼女の心を動かしたことによるものと思います。彼女の話は、権力は自己の施策実行のためにはなりふり構わず無垢の人をも犠牲にしてまでも法を利用して、その力を示し、国民を委縮させ自由な考え・発言を奪う危険性を持つことの実例でした。これまで知られなかつた事実は、社会の不平等・不当・不正に立ち向かってきた山野井さんの信念に火をつけ、人々への呼びかけの必要性を思い立つと共に、自らは 40 年間宮澤の墓参を続けられたと思います。

以上からもにじみ出ている山野井さんの人柄は、①美江子さんへの対応に見られるように、誠実・仁義・深い慈悲を忘れない人②言論の発信場所において、

常に真実を伝えようとの情熱を持ち、闘ってきた人③種々の場で呼びかけ、共感を持って受け入れられる、勇気・幅・見識・徳を持つ人——という資質と経験の幅をもっておられた方であったと考えます。

「宮澤レーン事件を忘れない！ 北大戦後世代をつなぐOB/OG会」は、事件が起きた北海道大学に関係した者達が、山野井さん達が事実を広めようと始めた行動により初めて事件を知り、活動を推進するため会を立ち上げました。会の構成員である戦後すぐに北大に入学した者、そして社会改革の運動に取り組んだ者など全ての者が、自分達の間に権力による非道な冤罪事件があったという事実を知りませんでした。大学当局自身も「真理に立つ自主、独立の自修心。To do のまえに To be」という建学精神が、権力により不当に踏みにじられたことに対峙できなかった反省と再発防止と被害者への謝罪という自覚も検討討議されないままでした (未だ不全です)。事件が学内全体で埋もれていたことは、痛恨のことです。「スパイ」という言葉が持つ陰湿性・過酷性のなせる業と考えられます。まして、「スパイ冤罪」は、事実はないのに多くの人を委縮させるために企てられた、あつてはならぬものなのです。

私たちは結成後、宮澤弘幸とレーン夫妻が検挙された日米開戦日と宮澤弘幸命日に、墓参と講演会を伴う集まりを継続しています。この活動の中で、社会をより良くしてゆきたい人々との交流が拡がり、各々人の世界を広げることができました。

息子・泰史さんご夫妻の活動に例えると、「道なき道で危険と思われる山も、地道な努力で整備し続ければ、道はどんどん歩きやすくなり、山の楽しさを味わいたい人々が次第に増えてゆくことになるだろう」との想いで今後も、山野井さんの思いを繋げて行きたいと思っています。

山野井さん、「道行之而成」(莊子) の行動、ありがとうございました。

「宮澤・レーン事件」と山野井さん

伊藤 セツ (昭和女子大名誉教授・1962 年北大卒)

2026 年 2 月 22 日、私は、夫の伊藤陽一と、新宿・常圓寺の宮澤弘幸さんの墓参と、つどいに参加し、山

野井さんにお会いしました。(その前は、2025年12月8日にお会いしています)。

私は、昭和33年(1958年)4月に、北大文類に入学し、教養時代は秋間実先生がクラス担任で、英会話の授業はレーン先生にお習いして単位を修得したものですので、後で振り返ると、1950年代の終わりに「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」にかかわる方たちに、いくつかの接点を持っていたことに気づかされます。当時は、何も知らず、それから約半世紀も経て、八王子で「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」事務局の福島清さんと知り合い「広める会」の呼びかけに参加するようになって、「広める会」を東京で代表して下さっていた山野井孝有さんともお近づきになれたという経過をたどっています。私の北大時代、まだ若く、助手で北大教職院組合の書記長をされていた、「真相を広める会」の代表をされた故山本玉樹さんとも知り合いました。

さて、今年2月22日、私はいくつかの会合が重なっていましたが、他は振り切って、宮澤さんの墓参の方を選び参加しました。その時、私が創立以来参加していた「日本科学者会議」で知り合った、茨城県東海村の村長選に立候補して落選なさったという経歴を持つ元茨城大学教授の乾昭代さんが、「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」に関心を持ってくださって、ぜひ参加したいとの意向を私に告げられたので、喜んで新宿・常圓寺で落ち合ったのです。乾さんは、ご自宅の庭の木のみかんを手作りジャムにして、友人に配ることを楽しんでいらっしゃいましたが、その日も、出来たてのジャムを3個持参して、集いの後、私に1個くださり2個を山野井さんと、福島さんにとということになり、まず二人で山野井さんのおそばに行ったのです。

私が、個人的にお親しく山野井さんとお話するのは初めてでしたが、私がこれこれと乾さんを紹介するのを、山野井さんは、にこにことして聞かれています。参加を歓迎して、ジャムを受け取って下さいました。腕を悪くされていたので、「持ち帰りにお邪魔では」、とこちらが気にしたら、「大丈夫、持ってくれる人はいるよ」といわれました。

ホツとして、あの日は、初参加の乾さんも加わって、荻野富士夫さんのご講演を聴き、三次会まで行って、初めての方たちと、いろいろ話し合っただけで帰宅した

のです。そして、11日後、山野井さんの訃報に接しました。いろいろありがとうございました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

レーン氏授業を受けた一人として

伊藤 陽一(法政大学名誉教授、1961年北大卒)

山野井さんは、宮澤弘幸の命日2月22日、新宿常圓寺での集会で、腕を包帯で包みながらも冒頭のあいさつをされてお元気の様子だったので、1週間後のご逝去の通知は驚きであった。

山野井さんの毎日新聞社の再建活動など多くの活動があるが、北大でレーン氏の授業を受けた1人として、「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」に関する教えに関してお礼を述べたい。

私は、1957年にレーン氏の授業を受けながら、氏が冤罪事件の被告であり、復職しての教員であったこと、この冤罪事件も宮澤弘幸も知らないままにいた。2013年の「真相を広める会」の発足直後の常圓時の集会に参加して、事件を初めて知った。レーン氏の授業の55年後である。北大による事件の無視によって、学生をふくむ北大関係者が無知のままにいたという事態は、驚きであり、今でも納得できないでいる。

私は、この事件については、広める会の活動によって多くを学ばせていただいた。発行資料には、事件の再検証を経ての『引き裂かれた青春—戦争と国家秘密』(2014年花伝社)の出版、「会報」や「事務局たより」による北大との交渉経過や対外活動の詳細にわたる情報提供、特に2018年の『総資料総目録』。そして、冊子の発行—最近の簡易なまとめとして2025年12月刊の『12月8日』を記憶し続ける」がある。これら資料は、毎日新聞社OBの、新聞関係者ならではの活動がある。私は、その活動の中心に、諸集会で冒頭の報告・挨拶・叱咤激励を担われ、「人生と闘いの大先輩」と目された山野井さんがおられたのだと思う。

この冤罪事件の最大の被害者は、いわれのない嫌疑で、考えられない重刑を言い渡されて、投獄され、戦後解放されたが獄死ともいえる状態で亡くなった北大生・宮澤弘幸であり、その母親とくさんと実妹の

秋間美江子さんであったろう。そして恋人の高橋あや子さん、レーン夫妻他がおられる。この中で、宮澤弘幸の家族は「スパイ一家」とされて、戦後も長く苦労を重ねられた。

山野井さんは、特に、この秋間美江子さんから「お父さん」と呼ばれながら、美江子さんの兄の汚名を晴らすための北大との交渉、このような悲劇を繰り返させないための活動の理解者・激励者・支援者であった。おのずから、広める会で、山本玉樹さんとともに代表を担った。山野井さんには秋間美江子さんの苦しみへの深い理解と北大の無作為への怒りがあったに違いない。

この山野井さんの行動を通じて、私は、改めて宮澤弘幸の無念を再確認し、北大の150年史等での対応を注視し、「スパイ防止法」に反対しなければならない、と考えている。

山野井さんに寄せる記

宮田 貞夫 (元毎日新聞・印刷⇒編集)

私が「毎日」に入社した昭和28年(1953年)3月1日。研修を終えて初めての夜勤をした3月5日、作業中に突然サイレンのけたたましい響き。何か重大なニュースが飛び込むと一旦作業を中断し、新しい記事に差し替えて印刷に回ってくる。情報がすぐに伝わってきた。スターリンの死去だった。

見出しは「巨星墜つ」。

翻って75年後、今年3月5日、山野井さんが亡くなられたという知らせを山野井妙子さんから電話で聞き呆然とするばかり。2月17日、誕生日には少し早い山野井さん94歳の誕生会を兼ね、6人で鍋を囲んでお祝いしたばかりだった。22日には有志が集まり花束を贈って祝ったことも福島さんから聞いていた。それからわずか10日ばかり後の出来事であり、まさに青天霹靂。その時なぜかスターリンの時の「巨星墜つ」が頭をよぎった。私たちにとって山野井さんは誰からも敬愛され替え難い「巨星」に相応しいリーダーだった。

4月1日付の「KOMOK会報」(第120号)に早くも戸塚章介さんが追悼文を書いていたがその文章に感動した。巻頭部分に「思えば山野井さんとの付き

合いは70年になる云々」とあった。師弟愛の素晴らしい絆、毎日新聞労組の誇りであると思った。印刷局在籍13年の私など足元にも及ばない。その意味でもここに書かれた内容は山野井さんを称える戸塚さんの70年の思いが詰まっている。

私は「毎日新聞」が好きだった。だから定年まで35年間過ごすことができた。ただし、印刷の輪転職場に配属されたその日から作業が好きになれなかった。機械が苦手なうえ、輪転機の轟音とインクで黒まみれの作業が耐えられなかった。職場の環境も最悪で休憩場所はローラー置き場の倉庫で狭く椅子さえなかった。真夏の輪転機が並ぶ工場内の暑さときたら並大抵ではない。クーラーなんかはない。後になって出されたのは氷柱がぽつんと置かれたきりだった。

そうした劣悪の状態を見かねて「若人の会」(山野井会長)を立ち上げたのが山野井さんや当時の先輩たちの努力であり職場の改善要求だった。石鹸、安全靴などの支給。椅子やテーブルを備えた休憩室の要求だった。山野井さんが自書の中で書いているが、まさに「タコ部屋」だった。その後、こうした要求が次々実現されてきた時、初めて労働組合の重要性を知った。職場内で同人誌ができたのもこの頃だった。名称は「騒音」と言う機関誌であったが中身はエッセイや恋愛小説風なものから翻訳ものもあり楽しかった。編集責任者は香川廣八さんで増島文夫、勝又敏夫、戸塚章介、宮田貞夫、郡司尚之さんらがよく書いていた。

ここで私が、なぜ印刷職場を13年で離れたのかを、説明しておきたい。前にも述べたが機械が苦手、あの輪転機の轟音が怖くて、将来のことを考えると、自分が他にやりたいことがあるはずだと。昭和42年(1967年)写真製販部の部長に直接談判。自分の特技(イラスト、レタリング、写真)を見せ、配転の希望を述べた。熱意が通じたのか実現した。仕事は写植、写真版の腐食、テーブル(見出し、デザイン)など変化があり楽しかった。作業的には初心者であり、この時の指導者がなんと柳沢勇さんだった。昭和52年、部内の掲示板に編集部員の募集が張られていた。運動部と学生新聞の記者2人「希望者は至急申し出でよ」。製版部に来て10年目だった。以前から新聞社にいる以上、最終的には記者を希望してただけに奇跡の到来のように感じた。異動する時も柳沢さん

に相談している。今でもよく覚えている。「組合にとって損失だけど、宮田さんが以前から記者希望なら応援したい」。私に勇気を当ててくれた言葉だった。

学生新聞を希望し採用が決まったが、文章の構成、筆力、特に独特な新聞記事、きまりなどを覚える必要があった。私が編集長に最初に尋ねたことは「毎日」で一番の文章家は誰か。答えは「浅野弘次さん」だった。ここが新聞社のいいところで、勉強する環境は整っている。本社発行の「ああ根性と闘魂・高校野球」がいい手本だった。それと「毎日新聞用語集」。

とにかく必死に勉強した。編集部で10年いて、印刷部から離れて20年余の歳月が過ぎていた。しかし、この空白期間は決してムダではなかった。印刷は私のサライ（故郷）であり忘れることはなかった。あるとき、柳沢勇さんの消息の事で福島清さんにお世話になり、これがきっかけで「第5回KOMOKのつどい」（2024年）の出席に繋がる。2005年に山野井さんが発行した「振り返れば波乱」の時、突然電話があり、輪転課で「若人の会」が当時発行した「騒音」をカットで使いたいと誰も持っていない、宮田君ならあるかも知れないと。偶然この一冊だけ残っていた。同誌99頁に写真入りで飾ることができた。関千枝子さん、柳沢勇さんの追悼文を書かせていただいたのも、つい最近のように感じている。

<横浜見物とお鍋パーティー>

山野井さんとは、その後も交流が続き上梓するたびに本を送ってくれた。読んだ本は私の友人に貸していたが、その人たちが感想文を山野井さんに送っていたらしい。山野井さんは感激したのだろう。ある時、「横浜に行ってみよう」と言う。令和3年（2021年）、初めて私たち3人と横浜見物が実現。以後3回、山野井さんの誕生日会を開いている。氏はこの会を大変楽しみにしていた。

1回目、2021年 横浜赤レンガ・中華街（宮田・小山芳美・吉本昌子）、2回目、2022年 横浜山下公園・中華街（宮田・小山）、3回目 2024年 山野井家で鍋パーティー（宮田・小山・吉本・菊川智保子・都筑浜子）、4回目 2026年2月17日 山野井家で2回目の鍋パーティー（宮田・小山・菊川・都筑・山野井妙子さん）

「波乱」な人生を送られた山野井さん。だが、それはみんなの幸せを願っての勇氣ある行為からだった。

剛毅と優しさの山野井さんには、氏を慕うたくさん仲間がいた。幸せな人である。心からご冥福を祈っています。

巨木が倒れたような寂しい春

小山 芳美（横浜市在住・宮田貞夫さん友人）

宮田貞夫さんから山野井さんの訃報が届いて絶句しました。2月17日に千葉のご自宅にお邪魔して、半月しかたっていないのに、急ぎすぎます。2月22日の94歳のお誕生日は息子さんと妙子さんご夫妻とでお祝いをなさったのでしょうか。その11日後に亡くなったということは、思わぬことが起きていたのかもしれないとも考えています。

2月にお宅に伺った折、お義父さまの代わりに道案内に出てきてくださった妙子さんに、その日初めてお目にかかった人とは思えない気さくさと親しみを感じていたものです。

あの日、左手首を骨折して間もないお義父さまのお世話をするために、伊東からいらしていたことをその時知りました。無理な訪問を受けていただき、余分なご負担をかけてしまいました。でも、今となっては、肩から左腕を包帯でつっていらしたものの変わらないお元氣な顔と声に直に触れることができ、その表情と声とお話のすべてが私の身に残り、記憶に刻まれました。

初めてお目にかかったのは、2021年2月22日と2が並ぶご自分の90歳の誕生日でした。宮田さんが声をかけて下さり、横浜の赤レンガ倉庫から中華街辺りを散歩した時でした。2024年には千葉のお宅にお邪魔してお鍋を囲みましたが、前日に息子さん夫妻が準備をしに来られたことを後から知って恐縮したものです。

今回、宮田さんは山野井さんの骨折のことをご存知だったとのこと。延期を申し上げたら山野井さんが「予定通りしましょう」と言って下さったので、以前もご一緒した都筑さんと菊川さんを誘って4人で伺ったのが2月17日でした。当日とその前後にいただいた山野井さんからのメールはそのまま残っています。これからもずっとそのままに……。このたびの再会も宮田さんから「千葉と横浜の間をとって東京

駅辺りでお会いする日取りは小山さんに」と提案されて、その交渉役をさせてもらいましたが「外ではゆっくりできないから、またお鍋でも囲んでわが家でゆっくり話しましょう」と押し切られました。「毎日新聞労組書記長だった山野井さんと交渉して、私が勝てるわけないですね」と笑い合いましたっけ。

ある日の電話で、70年前のスパイ事件を再発掘した山野井さんが活動された「北大生・宮澤弘幸さんの冤罪事件」について、「これからも声を上げ続けていきます」と話されました。「高市政権と維新の会が再び『スパイ防止法』の制定を目論んでいます、恐ろしい法律だから反対の声をしぶとくあげ続けていきます」と。どうぞ天国から見守ってください。

山野井さんから「13歳の時に霧ヶ峰高原でグライダーに乗って爆弾抱えてアメリカの軍艦に突っ込む特攻訓練を受けていた」という体験談を初めてお聞きしましたが、低年齢の子どもたちまで死に赴かせる訓練をした狂気の沙汰がほとんど知られていなかったことに驚きました。

剛毅で、豪快で、かつ繊細な神経をお持ちだった山野井さん。今、巨木が倒れたように感じて、寂しい春になりました。改めてご冥福をお祈り申し上げます。

100歳過ぎても活躍を期待した

茂木 良作(元毎日新聞・制作)

山野井さんの事で最初に思い出したのは、私が毎日新聞労組東京支部青年部委員、山野井さんは6000人の組合員を束ねる本部書記長の時代。東京、大阪、名古屋、九州の青年部委員が集う4支部合同キャンプを準備中、山野井さんと同じ輪転職場出身の「どじょうひげ」がトレードマークのH青年部長を、「オイ、ヒゲ」と呼びながら、行事の行方を心配して、辛辣かつユーモラスなやりとりをしていたことです。

合同キャンプは1974年7月末に開催。フォークシンガー駆け出しの頃の横井久美子さんが、ベトナム反戦運動で歌われていた「戦車は通さない」などを熱唱していたのも懐かしい思い出です。

次の場面は、職場代表委員になり、東京の九段会館で開催された臨時中央大会を傍聴し、山野井本部書記長と大住組織部長のコンビが会社側の大会代議委

員と論争をしている場面で、熱のこもったやりとりは見応えがありました。

定年後の動静は、共産党を応援する会のニュース「KOMOK」や「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会・事務局たより」などで、福島さんが折々の活躍をニュース化していたので、相変わらず元気に活躍しているのを知っていました。最近、昨年5月と11月に開催されたKOMOK集会でお目にかかり、とても元気に戦中体験、反戦平和の重要性、共産党への思いなどを語ってくれました。この調子で100歳を過ぎても、元気に色々教えてくれると思っていたので、突然の訃報に驚くと共に、残念でなりません。心よりご冥福をお祈り致します。

「偲ぶ会ご案内」返信に記された 追悼の言葉 (敬称略・50音順)

荒木富士雄(奥多摩餅つき望年会参加者)

奥多摩での「もちつき望年会」は楽しかったですね。毎回、山野井さんが持ってこられた大きな大根、見事でした。ご冥福を祈ります。合掌。

*

岩田 健一(元毎日新聞・印刷)

63年前、私達の結婚式の仲人を、突然のお願いにもかかわらず心よくお引き受けいただきました。

山野井さんご夫婦のあたたかさを感じた思い出がいっぱいあります。ご冥福をお祈り申し上げます。

*

近江 眞(元毎日新聞・印刷)

94歳山野井さん御本人と御家族が登り続けてこられた高い数々の山からみると、今年80歳の私はまだまだ“ふもと”に居るようです。内視鏡検査のため欠席させていただきます。皆様によろしく。

*

大貫 遵子(元毎日新聞印刷・大貫安弘氏夫人)

長い間の正義の闘いに敬意を表します。山行や散歩の大切さを教えていただきました。心よりご冥福をお祈りします(亡き夫・安弘とともに)

*

香川 澄雄（奥多摩餅つき望年会参加者）

ここ数年、毎年1回、千葉県都賀の山野井さん宅で、泰史・妙子夫妻と焼き肉で会食することを楽しみにしており、今秋の再会を約束していました。最後に電話でお話したのが2月26日でした。残念です。

＊

勝又 敦子（元毎日新聞印刷・勝又敏夫氏夫人）

山野井孝有さんは夫・敏夫と私にとって良き上司、先輩としてだけでなく人生の師として頼りにしてきました。亡くなられて本当に残念であり悔しいです。山野井さんに恥じない生き方をしていきます。見守ってくださいね。

＊

栗原 四郎（元毎日新聞労組書記）

山野井孝有さんが毎日労組本部書記長時代に労組書記局専従（書記）に採用していただき、公私ともに大変にお世話になりました。労働組合運動には縁のなかった者が、書記局業務に携わるうえでの「教育」「助言」、時には叱咤・激励を受けての日々だったことを思い出します。深く感謝申し上げます。

山野井さんが日々の政治動向を見るにつけ繰り返していた「我慢ならない！」の言葉が懐かしくもあり、「その通り！」と応じたいことが多く、昨今です。理不尽なことは絶対に見過ごすことはなく、厳しく対決してきた山野井さんの生き方に深く学び、少しでも近づけるよう、残された人生を歩んでいきたいと思えます。

山野井さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

＊

後藤真理子（山野井孝有さん友人）

山野井さん、本当にお世話になりました。感謝でいっぱいです。まだ信じられません。最後までよく頑張られましたね。心からご冥福をお祈りいたします。

＊

小林庸男（元毎日新聞・印刷）

ご冥福をお祈り申し上げます。

＊

沢木耕太郎（ノンフィクション作家）

残念ですが、海外取材中のため欠席させていただきます。

孝有さんのことは、奥多摩の、旧泰史さん宅における「餅つき望年会」での楽し気な顔が思い出されま

す。

もちろん、『凍』の取材中には、さまざまに協力していただきました。深く感謝しています。

＊

鳶 信彦（元毎日新聞・編集）

介護を受けている身なので、出席できません。山野井孝有さんのご冥福をお祈りします。

＊

白石富美恵（元毎日新聞労組書記・九州）

ご案内ありがとうございます。遠方と足腰不調のため残念ながら出席ができません。

山野井さんのお人柄を偲びつつ心よりご冥福をお祈りします。

＊

鋤柄 好子（奥多摩餅つき望年会参加者）

山野井お父様の思い出は何と言っても奥多摩での餅つき望年会です。毎年楽しい時を過ごしました。一昨年には伊豆の泰史さんの家で奥多摩同窓会と称し、お父様も来られ、まだまだ元気でいらっしやと思っていましたのに……。

＊

鈴木 俊子（元毎日新聞印刷・鈴木章夫氏夫人）

久夢に昨年のKOMOKの集いでお会いし、90歳を過ぎててもなおお元気な様子をお見掛けしたばかりでしたのにとても残念です。ご冥福をお祈りします。

＊

田場登志子（元毎日新聞印刷・田場武勝夫人）

山野井さんご夫妻は、私が夫・武勝と結婚した際の仲人です。夫は毎日新聞印刷局に入社して出会った山野井孝有さんから輪転機を回す仕事上のことよりも、労働組合活動について学び、さらに「戦争は絶対にしてはならない」との信念を学んだと思います。

遥かな天で再会した山野井さんと夫は、今の世界と日本の異常に怒っていることでしょうか。山野井さんご夫妻に心から感謝申し上げます。夫・武勝とともに、安らかに眠りください。

＊

茶原正士（元毎日新聞・名古屋）

1969年頃、中部活版の合理化反対闘争の際、36協定破棄の戦術に失敗。本部合理化対策部長の山野井さんが励ましの職場オルグにみえたのが最初の出会いでした。意気消沈していた職場が山野井さんの言

葉でいっぺんに明るく元気になったことを覚えています。支部書記長の吉田哲郎さんからその後の活躍ぶりをよく教えられたものです。

出版された『いのち五分五分』は地元で10冊ほど売り、山野井さんから御礼の電話がありました。その時初めてお話できました。最近も本が話題になり、山仲間での生き様を紹介したばかりでした。

ご冥福をお祈りします。

＊

手塚恵美子（毎日新聞労組書記）

毎日新聞労組50年史で、山野井さんが本部書記長に就任されていた1970年8月～74年7月のページをみたところ、議事規則改正をめぐる組織問題で会社と組合の間に大変な闘いの時期であったことを改めて知りました。

時代と共に労働組合の形も随分と変化しました。進化した面もあれば、衰退してきたと思う部分もありますが、今の労働組合や毎日新聞があるのは、山野井さんはじめ先輩たちが闘い続けてくださったおかげだと、心から感じています。

形は変われど今あることを当たり前と思わず、先人たちのおかげであることを常に心に留め、今後の糧にできればと思っています。

心からご冥福をお祈りいたします。

＊

十川 弘治（元毎日新聞・九州）

ベトナム映画裁判から議事規則改正、経営危機の新社移行と激動の毎日を支えて頂き、本当に有難うございました。ご冥福を祈っております。

＊

西山 公雄（元毎日新聞・名古屋）

毎日新聞在職時代は、同じ印刷職場でしたが、東京と名古屋と離れていましたので交流はありませんでした。しかし退職後、名古屋で開催した花見の会に来て下さいました。さらに「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」の真相を広める活動を知らせてくださって関心を持ちました。

2015年には心がこもった年賀状をいただきました。昨年末、感謝と連帯の気持をこめて、友人が描いた吉永小百合さんの鉛筆画を贈ったところ、千葉名産の落花生を送ってくださり娘と孫たちが大喜びしました。誰でもいつかは通る道ですが、何とも寂しい限り

です。ご冥福をお祈りします。

＊

早川たみ子（奥多摩餅つき望年会参加者）

お知らせいただきありがとうございます。山野井さんにお電話しなくちゃと思っていたところに、妙子さんからご連絡いただきました。あの声が聞かれなくなって淋しくなりました。

＊

晝間 弘子（奥多摩餅つき望年会参加者）

山と溪谷社刊『いのち五分五分』は勿論大好きですが、実は隠れた限られた人数に贈られた『五分五分』がおとうさんの家族愛、人類愛に溢れた名著です。

＊

福原 恵美（宮澤弘幸姪・広島市）

最後まで現役で反戦活動に生涯を捧げ、宮澤弘幸の罪の真相解明にもご尽力下さいました。美江子伯母との約束の墓参りも長年にわたり守って下さいました。感謝の言葉もございません。合掌。

＊

本田 克夫（元毎日新聞・編集）

遠出ができないため、残念ながら欠席します。思い返せば半世紀前、会社の経営不振で役員総退陣、後を継いだ田中社長の下で労務部が突然作られ、それまで編集局で紙面制作をしていた私が部長に指名され本人がア然としました。ともあれ組合との良好な関係を築こうと努力しましたが、折衝の窓口は福島書記長。大住委員長はもとより、山野井さんや戸塚章介さんらは存じ上げているものの言葉をお互いに交わすことはありませんでした。今思えば残念です。

山野井孝有さんご逝去、謹んで哀悼申し上げます。

＊

真木枝里子（奥多摩餅つき望年会参加者）

母が山形の実家でご近所さんに頼んで、さくらんぼ、りんごを作っていた時期があります。収穫時には私達が埼玉、群馬からかけつけて、山野井パパさんにお送りしたところ、律儀なお手紙に、山野井通信とグリーンランドのビッグウォールの写真等が同封されてきました。

『宝石のような輝き、おいしい「さくらんぼ」。まさに果物の王様を沢山ありがとうございます。近所にも配らず夫婦だけでいただきました。「さくらんぼ」が木に実っているのをこの目で見たことはあり

ませんが、見事なものでしょう。おいしいりんごと合わせてお母様にお礼申し上げます』と、山野井パパの手紙。素直に喜んでいただけたこと忘れません。

大勢に愛された律儀な、そして時に茶目っ気を垣間見せて下さるお姿に、私の方からこそどうもありがとうございました。

どうぞ安らかに眠りくださいませ。

*

森田 稔（元毎日新聞・九州）

信念の人・山野井さんから学んだことは限りありません。息子さんの登山家・泰史さんの講演会（満員の聴衆のもと北九州で開催）を聞くことができました。そして泰史さんの妻・妙子さんを描いた「凧の人」

読むことができたのが山野井さんとのお別れになりました。長年ありがとうございました。

*

山中 繁（元毎日新聞・印刷）

平衡感覚機能の劣化で体調不良のため歩行が困難で振らついて歩いている状態です。出席したいのですが、申し訳ありません。

*

吉田 哲郎（元毎日新聞・名古屋）

山野井さん亡くなられたとのこと。私も認知症気味ですが、老人ホームからメールで、お悔やみ申し上げます。

<「奥多摩餅つき望年会」の思い出>



山野井泰史・妙子夫妻が奥多摩に住むようになってから、年末に「餅つき望年会」を開催した。

写真上は2003年12月13日。山野井さんは毎回、千葉の菜園で育てた大きな大根を持ってきた。下は、山野井夫妻が伊東に転居した後の2024年7月13日に開催した同窓会

2026年2月22日
94歳誕生日
新宿・常圓寺にて



山野井孝有

悼む

讃える

ありがとう

2026年6月1日

山野井泰史

「山野井孝有さん偲ぶ会実行委員会」

戸塚章介 石井忠治 大住広人 小川忠男

寺沢玲子 福島清 水久保文明

